海外 ▶藝術に表はれたるスラヴ◀ 新潮
▶ワグネルの艶書◀

中央公論

第二十年第四號

概目

THE CENTRAL REVIEW

明治卅二年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行 明治卅八年四月一日

中央公論第二十年第四號目次



盲者の提琴彈奏

SIR DAVID WILKIE

中央公論



第二十年
第四號

韓國の處分

吾人日本國民は今や重大なる問題を解決すべき任を有す、韓國を如何に處分すべきかといふ是れ也

二十七八年戰役は、我れ實に韓國の獨立を完くするがためにしたるもの也、清廷まさに兵力を以て韓國を其の屬邦と爲さんとし、且つ韓國に於ける我が利益を蹂躙せんとしたるを以て、我れ則ち敢然として之と抗爭し、遂に干戈相見ゆるに至りしのみ、而して其の結果、清國干渉の手を全く韓國より引かしめ得たり

爾來我が朝野共に韓國の獨立扶殖を其の主義としたりき、而して我が利權の韓國に於ける漸く滋く且つ多きを致したるに方り、露國端なくも滿州を掩有せる餘威を挾み、韓國を威嚇して我が利權を蹂躙すると、また復た彼の二十七年に於ける清廷の如くならんとしたり、韓國若し折れて露の有たらん乎、我れは近く一葦帶水の地より露國の壓迫を蒙むらざるを得ず、單に韓國に於ける我が利權を喪失するのみに非ずして、當さに我が國礎を危くするに至らんとす、是れ我れが敢然として强大なる露國と砲火を開くの已む無きに至れる所以也

其の地勢よりいへば、而して我が自衛の必要よりいはゞ、如何なる場合に於ても斷じて韓國を他國に屬せしむ可らず、從來の經驗より視るに、殊に最近十三四年來の實驗に徵するに、韓國は到底獨立せしむ可らず、若し之を從來の如き獨立國と爲し、從來の如き王室、官吏、制度(寧ろ習俗)を存置せば、彼れや朝に呉に之き、夕に楚に之きて方背恒なく、我が日本の安全常に

十分なるとを得ざるべし、別言すれば今日假令露國干渉の手を絶つを得るも、更らに第二第三の露國出て丶、我れは殆んど其の煩に耐えず、また屢々戰はざるを得ざるべし、嗚呼是れ忍ぶ可けんや、我れは韓國を以て斷然之を我が管下に措くを可とす、是れ我が自衛上最も安全の策にして、今や歐米列國の一も異議なき所のものたる也

然れども單に我が自衞のため韓國の獨立を滅するは、正義の許さゞる所也。夫れ韓國は韓國民の有也、恣に之を取るは是れ他の國土を侵略する也、猶ほ盜の强ひて他の財物を奪ふに異ならざるのみ

然りと雖も韓國の獨立を滅して我が管下に措くは、韓國民の利益也。然り、少くも韓國民のためにして、又實に世界人類のため也、人道のため也

何を以て然かいふ乎、今の韓國民は歷代惡政治に苦むものなれば也、今の韓國の王室と政府とは、唯だ韓國民を虐し誅求して、曾て之を啓發し良導して其の安寧幸福を圖る者なければ也、夫れ韓國が一千年前の彬々たる文明蕩然として地を拂ひ、土壤肥えたれども農事盛ならず、工藝衰へて復た起らず、人民貧弱にして蠢爾憐れむべき狀態にあるは、其の王室と官吏と恣に韓國民の財產を奪ひ、重稅を課し、誅求徵發至らざる所なくして、國民遂に勞働し貯蓄するとを嫌ひ、僅かに衣食すれば則ち足れりとせざるを得ざるに至りし結果のみ

多數の韓國民をして、永く今日の如く貧弱憐れむべき境遇に呻吟せしめ、而して其の暗愚にして私利私慾にのみ耽る國王官吏をして益々人民を虐し誅求せしむるは、人道に於て決して默止す可らざる也、世界人類のため斷じて默止す可らざる也、暴君汚吏の罪を正し、韓國民をして憐れむべき桎梏を脫せしめ、猶ほ我が國民の如く一定の法度の下に其の生命財產の安固を保たしめ、其の奮發努力に依て工藝を盛にし文化を進ましむるは、實に韓國民を救ふ所以にして、又實に世界人類のため也、人道のため也

此の故に吾人日本國民は、韓國を我が管下に置き、

善良なる法律を以て之を治め、之を敎育し、之を保護し、之を奬勵して、我が國民と共に文明の化に浴せしむべし、是れ韓國問題解決の唯一方法也

世或は韓國民に獨立の希望ありと爲すものあり、彼の崔益元若くは儒生等の檄文を以て之を證すと雖も、是れ皮相のみ、韓國民が獨立を希望すといふは其の歴史を無視したるもの也、彼等が獨立を主張するは、一個の野心運動に出づ、譬へば猶ほ政黨末流の徒の奔走運動するが如し、目的は其の主張以外に在り、若し彼等眞に獨立を希望せば、而して其の獨立なるもの眞に多數韓國民のためならば、彼等は先づ第一に今の暴君汚吏の罪を糺さゞる可らず、事玆に出でずして、却つて其の君主官吏に阿付するは、是れ桀の狗なるのみ、嗚呼韓國の多數國民豈獨立を望まんや

彼等の望む所は善良なる政治のみ、而して是れ同種同系統の吾人日本國民の當さに天より受けたる重任也

新禮を定むべし

前聖繼レ天立レ極之道、莫レ大二於禮一、後聖垂レ世立レ敎之書、亦莫レ先二於禮一、禮儀三百、威儀三千、孰非二精神心術之所一レ寓、故能與二天地一同二其節一、禮の重んずべき論なきなり

且つ東西の禮節多く相異なる所あるを見ず、蓋し天地と其の節を同じくし、人間精神心術の寓する所なるが故ならん

其の心を平らかにし、其の容を端ふして溫良謙讓なるは禮の要なり、神佛祠堂を敬ふは東西相同じ、耆宿を尊び、幼弱を扶くるは東西相同じ、髮を亂さず、鬚髯を亂さず、汚れ垢きたるを衣ざるは東西相同じ、故に日本の禮必らずしも歐米の禮と異ならず、而して別に新禮を定むべしといふは他なし、日本には私禮ありて公禮なければ也

玆に私禮といふは私室に於ける私人間の禮儀のことにして、公禮とは公道、公園、公會堂等に於ける公衆間

の禮節をいふ

日本には所謂小笠原流なる禮儀あり、其の坐作進退より、飲食起臥、出入及び贈答に至るまで、備はらざる所なく、盡さゞる所無し、之を行ふものは禮容端正、儀貌肅々として眞に君士子也、然れども是れ私室に於て然るのみ、一び公場に出で、公會堂に入れば、また何等の禮節あるとなし

試みに街上を瞥見せよ、人道車道の區別ある所と雖も、歩するもの必らずしも人道に於てせず、悠々として車道を濶歩するものあらずや、車馬相避くるに左側に於てし、歩するもの亦左側よりすると、警察令の定むる所なるもの、人は必らずしも左を取らず、故に街上少しく群衆あれば、往者來者混々紛々として雜遝名狀す可らず、甚だしきは則ち死者を出すの慘狀を現するに至るにあらずや(神田酉の市を見よ)、歐米人の行くや、必らず定めらるゝ所の側路を取るを以て、如何に群衆多きも、往者來者整然として紊れず、且つ後者の邊りに前者を突退けて進むもの無く、已むを得ずして先んずれば則ち叮嚀に辭謝するを常とす、而して我が邦人には曾て此の美風を視ざる也

試みに滊車電車に乘り見よ、歐米人は拱手端坐して邊りに席を犯さず、老幼婦女には則ち讓り、且つ相伴ふものあれば大抵坐を讓りて之を並坐せしむ、是れ亦我が邦俗になき所也、然り、滊車中に於ては、恣に多くの席を占領して毛布を布き、鞄風呂敷包みを横へ、後客來りて彳立するも曾て顧みる所なし、甚だしきは則ち脛を開き腕を横へ、酒を蒙むりて泥醉し、煙草を吹きて車中を暗憺たらしめ、時には食物の殼を四邊に狼籍たらしめ、或は卑猥聞くに忍びざる談を交へて喋々饒舌す、殆んど野獸の柵中に咆哮するに似たるものあるにあらずや

更らに試みに劇場、寄席、諸興行物の見物席を見よ、時を擇ばずして飲食し、喫煙し、放語し、饒舌し、喧々囂々として其の狼籍亂雜實に言語に絶す、若し夫れ劇終り曲了へて去らんとするや、人を排し人を突退け、先を爭ふて下足を呼ぶ、其の狀また形容す可らず、老

幼婦女は殆んど危險にして近く可らざるには非ずや

時としては試みに葬儀なるものを看よ、死者を送るもの丶心は悲み嘆くに耐えず、戚容愁然として殆んど見るに耐えざるもの也、然るに會葬者の多くは、相顧みて笑語し、其の式場に待つや、茶を飲み菓子を喫して互ひに諧謔四出、笑聲四隣を震ふもの往々にして少からざるにあらずや

更らに宴會なるものを見よ。其の日本式なる所に於ては、獻酬未だ終るや終らざるに、既に處々に幾個の團欒を作り、其の熟知する所の妓女を執へて恣に笑ひ興じてまた主客を顧みざるもの殆んど十の六七に居るべし、其の西洋式なる所に於て、立食の饗あれば則ち先を爭ふて皿を攫みフォークを飛ばし、肉を貪ぼり菓菓を掠むる所餓虎の獸肉を爭ふが如く、また甘きに競ふ群蜂の如し、彼の禮節端嚴なる宮中の陪食の如き、蓋し陪食者の口に榮と稱するも其の實、窮屈に耐ずとする所なるべし

抑も此等非禮無節の人、必らずしも無識の野人のみにはあらず、多くは小笠原流の禮式をも學習したるもの也、唯だ其の場所の私室にあらざるが故に、乃ち群衆の間、知らず識らず放縱に流るゝのみ、畢竟一定の禮節無く、假令之あるも、其の公禮なるがために則ち未だ嫻ばざるのみ

故に吾人は曰ふ、新たに公禮儀を定むべし、之を定めて先づ小學校の生徒より其の初歩を敎ふべし、男女の中學校程度に於ても亦殊に嚴格に之を敎ふべし。家庭に於ても常に此の禮節を喪ふと勿かるべし、斯くして漸次其の俗を爲さば、蠻風遂に絕えて禮容の大に見るべきものあるに至らん、夫れ漢高、天子の位に上れるも諸將朝堂の喧爭するを見て愁蹙するを禁ぜず、叔孫通禮を定むるに至て始めて自から其の尊さを知れるに非ずや、日本人種をして世界に尊からしめんとせば、公禮儀を制定すると一日も忽ちにす可らざる也

武士道とゼントルマン

東京帝國大學總長　山川健次郎

武士道は維新後何事も西洋の風でなければならないと云ふ皮相の歐化熱の盛んであつた比は頑冥固陋の舊弊として世の中から全く擯斥せられたものでありましたが是六七年來世論が少々變はつて萬更サウ嫌らつたものでないと云ふ樣にはなつたのでありますが矢張り心底に於ては野蠻の遺風であるかの如く思つて居る人か少くない樣であります尤も是等の人も滿洲出征の將士が現に武士道の花を咲かせて居りますので武士道と云ふ事は戰爭の時などは特に都合の好いものであるから征露の大業が始まつてからメッキリ評判が好く且つ外國人などから武士道が稱贊される場合なども少なからないのでありますが平和にでもなつたら又元に反るのであらうと存ます是は畢竟武士道の何たるを知らないのに座するのであります然らば何もサウ珍らしい野蠻時代の遺風でも何でもない即ち武士道を踏む人はアングロサクソンの云ふ所のジエントルマンと大した違はありませんのであります勿論國が違ふから違はありますが余程類似したものであります英語のジエントルマンを普通紳士と反譯致しますが近頃紳士と云ふ詞には一種特別の意味が附隨する樣になりましてジエントルマンの眞意を表明する事が出來ん樣になりましたからジエントルマンを紳士と譯しませんで士君子と反譯しましようと思ひます此士君子は如何なるものでなければならんかと申すに第一に僞を云はない言責を重んずる然諾を守る事を要するのでありますが武士道の方て申しますと武士に二言なし武士の一言金鐵の如しなど丶云ふ諺がある位で二言をいふ事を深く戒めたものであります士君子武士道が此點に於て全く一致して居ります第二オノル即ち名譽を保つと申す事を嚴しく戒めるのでありますが武士道の方にては名を惜むとか耻を知るとか廉耻心を養ふとか申まして是れ又兩道相一致するのであります第三英語でミーンな事を爲す事を深く戒めて居ますが是はオノルを保つ事を力める事を消極的に敎訓したものであります此ミーンと申す事は卑怯と云ふ事と大體一致して居るのでありますが武士道に於て卑怯の振舞をば深く禁じて居る事は申す迄もないのであります第四士君子は「インテグリティ」を持

て居らなければなりません是は利害の爲めに其言行を變んとてあります我武士道ては是を節操と申しまして節操のないものは武士の風上にも置けんのてあります

第五ファイデリチー、ローヤルチー是は信義或は友誼とても譯しましようが友人の爲めに力を盡し艱難を共にする事をも辭せん事てありますが是も武士道に於ては武士は素より信義友誼を重んぜねばならぬのてありまして場合によつては死をも辭せんのてあります又之を擴めて武士は相み互ひなど申す諺の有る位となり遂には廣く義侠心は武士の性質の如くなつたのてあります

第六フェアプレー是は公平とても申しましようか武士道に於ては不意打だまし打を嫌ふとか刀槍の世の中に飛道具を遣ふ事を賤むとか多人數て一人に向ふ事を賤むとか又段々强を挫ぎ弱を助けるとか老人小供婦人を勞るとかは凡て武士の力むべき事てありまして此點に於ても亦兩道一致するのてあります第七士君子道に於ては勇氣を尊ぶので勇氣のない者は士君子に列せられぬのてありますが武士に勇氣を要するは申す迄もありません第八禮義を守るとも兩道に於て嚴敷訓戒して居るのてあります武士道に於て一例をあげれば敵に對しても其身分相當の敬語を用ゐるのてあります大石内藏之助は吉良上野介の首を取つたとは申ません上野介殿の御首を賜つたと申すのてあります扨外の點に於きましても士君子道武士道の相一致する點が澤山ありますけれども是は他の道他の敎とも相一致するのでありますから述べません勿論何れの敎に於きましても詐を云ふて宜い名譽などはドウでもよい卑怯な振舞をしても惡くない信誼がなくてもよい不公平な事をしてもかまはない利害の爲めに言行を變てもよい臆病腰抜てもよい無作法な所業をしても苦くないと云ふ事はありませんが武士士君子兩道に於ては特に此八點に重みを置くのてあります

　扨又兩道に於ける違の重なるものを揭げますと士君子は婦人を非常に敬する事て是は武士道に於ては婦人は弱いものてあるからいたわつてやると云ふ事はありますが格別に是を敬すると云ふ事がないから此點に於て一致せんのてあります又武士道に於ける忠君と云ふ事が士君子道にはない樣に思ひますが是は彼國の發達に特殊の事情があつてサウなつた事であろうと思ひます又親に孝を盡くす事をも嚴しくは敎訓しない樣てあります又武士道に於ては死ぬると云ふ事をば甚だ重く見て居りますが併し死なくつてならない場合が頗る

多いのであります即ち死を以て其道を貫くと云ふのが武士の本懐でありますが士君子にあつては夫迄に至らずともよい場合が澤山あるのであります尤も此點に於きましてアングロサクソンのなす所が我武士道の標準より見ましても一點の指さす所のない場合も隨分あるのであります一例を揭げますと明治廿六年六月廿二日に英國の地中海艦隊が演習の折號令の間違の爲めに衝突して旗艦ヴィクトリア號が沈みました其時艦隊の司令長官海軍中將トライオン氏は他の人々をば沈みかゝつた軍艦より逃れ出でさせたが皆人が立退く事を勸めたにも係はらず自分は艦に殘つて艦と共に沈みました是は號令の間違によつて生じた結果一萬噸餘の大戰鬪艦を沈没させ數百名の將士をして溺死せしめたのでありますから死を以て其責に任じたので實に立派な武士であると思ひます併し士君子道では必ずしも艦と共に沈むを要求せん樣に思ひます昨年我金州丸が敵の重圍に陷り下士卒が敵に向つて一齊射擊を爲し從容として悲慘の最期を遂げられた事を西洋の人は到底勝てぬ敵に出遇ふたのであるから降參して捕虜に爲つても好いてはないか腹を切つたのは犬死てはないかと云ふ批評がありますが爰が士君子道と武士道との違のある處てあります併し殉難諸士の場合と前に申ましたヴィクトリアのトライオン中將の場合とを比較するに兩方共に生命を保てば保つ事の出來るのでありますが生を捨てゝ義を取つたのであります只一は艦と共に沈んだ一は割腹したと云ふ丈の差で兩方共自殺には相違ないのであります單に自殺が惡いとなれば二ッながらわるいので一方の自殺は正當で一方が惡いと云ふ事はないのであります併し自殺も時によつて好いが金州丸の場合は惡いと云ふなら是は仕方がないのであるが武士道では此割腹は至當の事と見認めるのであります畢竟武士道士君子道は此點に於て少々相違はありますけれども概して士君子道は人に向つて死ぬ事を要求する事が武士道よりも少いが時によつては武士道と同じ點迄死ぬ事を要求するのであります

扨此兩道に關して其優劣は爰に論じませんが一括りに申せば士君子道に忠孝と云ふ事を加味致しますと殆んど武士道と同じものになるのであります武士道は野蠻の遺風でも何でもなく世界で最も進歩したと云はれる英米兩國の士君子の行ふ立派な道と殆んど同じなのであります諸君は此軍國の際は殊に武士以上の人たる事を心掛けられ武士道にはづれた所業のなからん事を

諸君自身の爲め又國家の爲めに切に希望するのであります。

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に貢獻するところあらんことを期す

以上は既に掲載せり敢て江湖の一讀を乞ふ

社會に對する學者の勢力

法學博士 戸水寛人

予嘗てカーライルとバックルとを比較對照して英雄の社會に於ける地位を論じたることあり。今中央公論記者來りて社會に對する學者の勢力を問ふ。夫れ學者の社會に對するは恰かも英雄の社會に對するが如し、即ち予がカーライル、バックル比較論を應用して此問に答へんとする所以なり。

カーライル氏は英雄を崇拜する有名なる文學者にしてバックル氏は英雄を無視する有名なる文學者なり。予は此兩人の兩極端なる議論を掲げ、且つ之を批評して英雄の社會に於ける地位を論ぜんと欲す。

バックル氏は有名なる文明史を著はしたる人なり。其第一卷第五章に於て論じて曰く、一國を支配する政治家は通常一般の場合に於て、其國の住民に外ならざるなり、其文物の薫陶を蒙り、其祖先の傳説を聞き、かくして生長したる彼等は如何なる最合目を以てするも其時代のために作られたるものと視ざるを得ざるなり、其企畫する所は社會進歩の結果にして決して其原因にあらざるなりと。バックル氏はかゝる議論を唱へて古來の英雄豪傑を非難し、彼等が自己の力を以て世界を進歩せしめんと欲し、人民の行爲に干渉することは甚だしかりしを攻撃せり、略言すればバックル氏は非干渉主義、放任主義を唱へて英雄主義を無視したり、

其文明史には幾多の事項を記載せりと雖も一貫する所の主義は要するに英雄を無視し、干渉を非難し、學術を尊重するに外ならざるなり。

然るにカーライル氏の議論はバックル氏と正反對にして甚しく英雄を崇拜せり、カーライル氏は種々の著書を出したりと雖も一貫する所の主義は要するに英雄を尊重するにあり、サートル、レザルタス。ヒーロー、アンド、ヒーロー、ウオーシツプ。及び其他の著書皆歷々として此主義を表示せざるものなきなり。カーライル氏の說によれば國家は一の有機體にして各人互に獨立するものにあらずとなし、人の本分、道德、良心等に重きを置き、人の自愛、欣慕、熱心、感化等に基て世界の進歩を論じて曰く、世界の進歩は一として此等の力によらざるものなし、基督敎の傳播も十字軍の起源も皆此等の勢力の發揚にあらざるはなし、之よりして大變革を生し、之よりして大時限を生じたり、世に英雄豪傑あつて人民の欣慕する所となり、人の崇拜する所となり、之を敎導し、之を感化し、以て此等の時變を生じて、世界の動力となり、世界の風敎を維持し、世界の政治を指導するなり、實に世界人類の目標となりて進む者は英雄豪傑なり、世界は幾多の英雄豪傑之を率ゐて更に之よりも大いなる英雄は其の中心となるなり、略言すれば世界の進步活動は英雄豪傑の力に基くものとなすにあり。而してカーライル氏の英雄とするものゝ例を擧ぐればマホメットなり、ダンテなり、セークスピアなり、ルーテルなり、ノックスなり、ジヨンソンなり、ルーソーなり、クロムウエルなり、ナポレオンなり又之に似たる英雄豪傑なり。

以上述ぶる所を要するにバックル氏は英雄豪傑を無視し、英雄豪傑と雖も世界を作りしものにあらず、寧ろ之に作られたるものなりとなし、カーライル氏は世界の進步活動は全く英雄豪傑の行爲に基くものなりとなすにあるなり。

然らば此兩極端なる議論に於て孰れか是にして孰れか非なる。孰れか眞理に適合して孰れか眞理に背反せる。是れ吾人の研究せざるべからざる問題にあらずや。

予の考ふる所によればバックル氏の議論にも一理あり、カーライル氏のにも一理あり、されど兩氏未だ眞理の全部を盡さゞるなり。一方よりいへば如何なる豪傑も其鄉里に生れ、其時代の敎育を受け、其時其國に行はるゝ議論の影響を蒙らざるものなし、即ち略言

すれば多少其時代の爲に作られたるものにあらざるはなし、若し其時勢に反抗したることを敢てせんか、如何に努力するも其志望を遂ぐることと終に難かるべし。されど亦他の一方よりいへば英雄豪傑の事業は啻に其時代のみならず、遠く後世の文運に影響すること頗る大なり。試に見よ、アレキサンダー大帝が亞細亞西部を併呑したるが爲めに希臘文學其地方に行はるるの結果を生ぜしにあらずや、又ジーサス、クリスト及びマホメットが宗教を以て武器となし、東大陸の西部を併呑したるの結果上、帝王より、下、奴隸に至るまで洪大無量の恩澤を蒙りしにあらずや。ニユウトン。ワットの諸氏が學術技藝に大發明をなし、億兆の同胞をして非常なる便益を蒙らしめしにあらずや、此等の例證は殆んど數ふるに遑あらざる程澤山ありて一として古來英雄豪傑の雄圖鴻業が其生存せる社會並びに後世の幸福に向て莫大なる影響を與へたることを示さゞるはなきなり。然らば則ち英雄豪傑は一方に於ては其鄉里其時代の輿論のために多少支配せらるゝと同時に他の一方に於ては其時代並びに後世を或程度まで支配するの勢力を有せるものといはざるを得ず、かるが故にバックル氏の説も一方に偏し、カーライル氏の説も一方に偏せり、眞理は此兩極端の中央に在りと見るの最も穩當なるべきを信ずるなり。

學者の社會に對する勢力も正さに之を相同じきものあり。其學識は一方より見れば其國、其時代のために作られたるに相違なきも、他の一方より見れば其社會に及ぼす影響は非常に大なり、此點より觀ずれば學者の任務や重且つ大なりといはざるを得ず、故に予は世の學者に向て望む所は世の目標として進み、人の手本として勉め、以て世界に自己の勢力を及ぼさんことと是れなり、學者として一時俗衆の名譽を得るを以て滿足すべきにあらず、永久に自己の勢力を社會に及ぼすべきことを心懸くべきなり、彼の自家の見解を曲げて世に阿り人に媚ぶるが如きは實に學者の本務を無視したるものといはざるべからず、世の學者たるもの正さに三思して可なり。（文責在記者）

遠きに似て近し

後藤宙外

個人が心身の二面を具するが如く、一般の人間も其

が專ら活動する方面より見て精神的と物質的との二つに分つことを得べし。勿論この區別は兩端を取つて對照する時に、始めて顯著なるものにして、中間の交錯點を見ては何れに屬せしむべきか判斷に困しむものも多し。例へば科學上の分類に於て、動物と植物との何れに屬せしむべきか疑はしき生物に接することあるが如し。されど專ら精神的事業の爲めに活動する者と、主として物質的事業に働く者とを比較する時には、其の間に明かなる區劃を立つること必ずしも難からざる也。假りに哲學、文學、美術、宗教、その他應用的ならざる學問に從事する者を精神的事業の爲めに生活する者とし、農工商及び各種の實業家と勞働者とを統べて之れを物質的事業に從ふ者とするは、強ち不當の分類にあらざるべきか。而して政治、法律、教育、經濟、醫學及び應用を主とする學問などに從事する者は二者の中間に位し、或は左右に出入することあるべし。此等の分類法は我が此の論題には別に重大の關係なし、隨うて精確を缺くの點は讀者隨意に補訂せられて可なり。但だ漠然ながらも精神的事業に從ふ者と物質的事業に就く者との二者ありて、其の生活の狀態、思想、感情、及び活動の結果に於いて著く相異る二方面の世に存するを認むれば可なり。這は吾人が特に言ふまでもなく、苟も常識ある者は何人も容易に認識し得る事實なり。吾人は此の事實を發途點として少しく言ふところあらんとす。

　精神的事業に從ふ人々は、動もすれば物質的事業に營々たる者を目して、彼等は眞に憫むべし、物慾の爲めに齷齪して無意味に一生を送る、俗物なるかなと。物質的事業に專らなる者は、他を嘲りて云ふ、彼等は眞に穀潰しなり、只管空想に耽りて、徒手徒食に老い、何等實益に補ふところなしと。一方が高慢不遜なる俗物と罵れば、他方は手數のかゝる穀潰しの器械と嘲ける。是れ極めて露骨に極めて簡明に兩者相互の對他的感想を抉出し得たるものと信ず。勿論彼等とても表面には常に公平と謙遜とを裝ひて、他の長所も有益なる點も充分に是認するかの如く言論を爲すことあるべし。然れども、其の肚裏を探ぐれば、先づ十人は十人、大抵如上の對他的感想を抱かざるものなきが如し。是れ果して何が故ぞ。蓋し相知ること極めて淺ければ也。否。偏見は人間本來の稟性に基ゐすること後頭部に眼なきが爭ひ難き確證ならずやとの感なきを得ず。

されど、吾人を以て見れば、所謂精神的なる者も外見程には精神的ならず。彼等が自信する程には物質に緣遠きものにもあらず。寧ろいと脆く物質的勢力に降參する邊もあるなり。又物質的なる者も、外見程には物質的ならずして、彼等が實利實益と誇稱するところのものも、其の自信程には確實なるものにあらず、彼等が往々輕侮する精神的方面に歸着する趣も見ゆる也。但こゝに見落とし難きは、精神的事業に從ふ人々には比較上、辯論や文章の達者なるもの多きが故に、我田引水の說は此の方面に最も盛んにして、物質的事業の方面には緘默者割合に多きことを記憶せざるべからず。

兩者ともに心と肉との二面より成る人間のことなれば、雙方甚だ異る方途に就くに似て、實は頗る相近きは當然なりと云はゞ、既に說くべき必要もなきか如しと雖も、聊か二三の例を取りて述ぶべし。

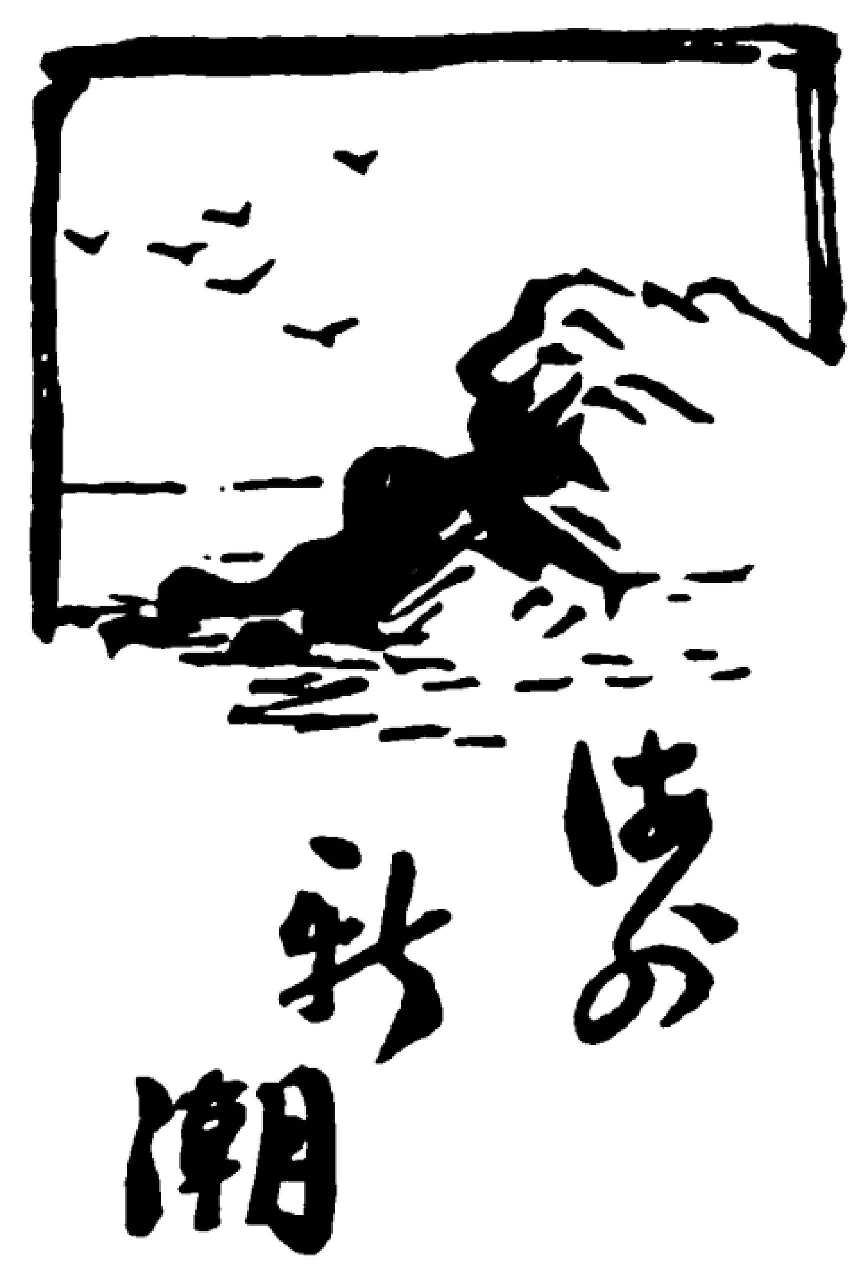
精神的方面の人々は物質的方面の人々を罵りて、彼等は美の何たるか、詩味の何たるか、人生の何たるか、哲學の何たるかを知らずと云ふ。されど、先づ美の勢力が實際上、一般の俗物を奈何に支配し居るかを思へ。彼等が活動の結果、成功の曉には、先づ妾を畜へ、別墅をしつらへ、美衣美食に飽き、花柳の巷に豪遊を肆まゝにするが主なる目的なるが多し。而して唯肉慾の爲めに妾を畜ふると云ふは甚だ皮相の見なり。美貌を悅ぶ故に家庭の平和をも犧牲にするを辭せざるが寧ろ彼等多數の眞情なるべし。別墅を構ふるにも、其の趣味の程度は別問題なれども、兎も角、山水の美に心動くことなくば不便なる田舍に大金を投じて、建築はせざるべき也。美衣美食これも文字通り、肉慾以外の要求の潛むを解すること難からじ。數多きお家騷動の動機は、常に婦人の美貌に係らざるもの罕なり。商店の招牌(かんばん)にも美人を描かねば客足向かず、繪端書や雜誌の口繪にも美人ならでは賣行宜しからず。新聞の雜報にて溺死轢死の婦人は常に美人と書かねば讀者は承知せぬ趣あり。その他美の勢力が奈何に俗物界を支配するかは、少しく精察すれば、意外に深大にて、學者などの憂ふる程に物質一偏に偏し居るものにあらず。

さて、物質的事業に從ふ人々が、金を儲け富を得て後(のち)、その究竟目的は何ぞと問へば、概ね子孫に之れを傳へて、子々孫々、末の末まで安樂に生活させたしと云ふ大慈悲心に外ならず。終生の努力の結果惜氣もなく、敢て有難しとも思はぬ、伜や孫に投げ與ふるなり。

此の位獻身的、利他的、純愛的なるはなかるべし。而してその讓り受けたる者が讓與者の豫期する如く、子々孫々まで安樂の出來るやうに維持し得るや否は保證すること難し。かゝる不確實なることを目的として、終生總身の汗や膏を搾りて顧みざるは、何等熱烈なる詩人的情操なるぞよ、何等雄大なる空想家なるぞよ。

更に家名とか、世間の名聞とか、名譽職などいふ事に苦心慘憺たる實業家などの大多數を見て、その心事を深く解釋すれば、哲學者や詩人や宗教家などに決して讓らぬ精神的、信仰的、空想的な面白い趣が數々あること疑ひなし。

さて精神的事業に從ふ人々の方を見んに、是れも存外物質的なるところあり。卑近な例を取らんに、名利快樂を斥け、煩惱斷滅を說いたショペンハウエルの如き大哲學者も、小遺錢を他人に窃取せらるゝを恐れ、インキ壺の下に隱くせりのと傳說あるは面白からずや。若しカントをして其の『批評哲學』中の或重大なる問題を思索最中に、激烈なる齒痛に罹らしめば、彼は其の哲學上の問題の解決を先にすべきか、はた齒痛の療治を先にすべきか。彼れは必ず齒科醫の許に駈込みて、暫く、彼の十二の範疇も、眞實體をも忘るゝならん。更に一歩を進めて言へば、世の普通の所謂哲學上の安立を求むるといふも、窮極は心の靜平にして不安ならぬを望むに歸着するが故に、一種の快感を求むると云ふに外ならざるべし。無意味にせよ、心の平靜より來たる快感にして、永く繼續するものならば、其の人に取りては、大哲學によりて得たる安立と價値に於て差違なかるべし。心の上の苦(混亂)を拔き、樂に就かんとするに外ならじ。されば財產をつくりて老後の安堵を得たしと思ふと、哲學上の安立を求むるとは、其の徑路を異にすと雖も、等しく心の靜平を得て、苦痛をのぞかんとするは同一なり。但し心の苦痛は嚴密に肉體の苦痛と分ち難し。一を精神的と云はゞ、他をも精神的と云ふべく、前者を物質的と云はゞ、後者も亦物質的と云ひ得ざるにあらず。又宗教上の未來の享樂を希ふなどは、最も俗にして最も實利的、物質的なり。神佛に關する宗教上の理論及び信仰も、概ね結局は人間化又は人體化して之れを感納するに容易ならしめ、之れに接近するに好都合ならしむるの傾向は、各宗教を通じて見られ得る現象にあらずや。是れも亦精神的發途點より出てゝ物質的歸結に入れるの面影を示すものにあらずや。



露國内に蜂起せる數多の革命運動が今後如何の發展をなすべきかは實に世界の大問題にして荷も經世に志あるもの丶決して看過すべからざる所なり、依て今之を一は内亂の中心となれる人物の側より、又一は勞働者の方面より觀察して、聊か大方の參考に供せんとす

露國勞働者の現狀

「ウエストミンスター、ガゼツト」

露國に於て騒擾を極めつゝある内亂の原因を知らんと欲すれば先づ其勞働者の現狀如何を知らざるべからず、露國には最近に至るまで純粹なる勞働者の階級存在せざりき、何となれば長き冬の間は農業の暇なるによりて百姓の多數都府に移りて工場に入り、以て其生計の資を得んと欲すれども一旦春に至れば再び故郷に歸りて農業に從事すればなり、年々かゝることを繰り返しつゝありと雖も彼等は年々同一の工場に入るにあらず、又同一の事業に從事するにあらず、たゞ最初に見當りたる工場に入りて、命ぜられたるの職業をなすのみ、故に其事業に就て專門的の勞働者は極めて少かりしなり。

然りと雖も最近に至りて、新器械及び新組織の工場の多くなるにつれて、かゝる非專門的のものを採用するの餘地に乏しく、從て純粹なる勞働者の階級を生ずるに至れるなり、莫斯科は今尙工業上の中心といふべきも、又聖彼得堡に於ても甚だ大いなる工場の設立せられしもの多く、政府に屬する工場に勞働する職工の數も十万人の多きに上りたり。

勞働時間も數年前までは一定せざりしと雖も今は大抵十一時間半に制限せられたり、されど或所に於て十時間となして却て良成績を見たるもあるなり、此勞働者の住宅は實に淺ましきものなり、大抵其雇主は職工に向て宿所を備ふ、其建物は實に偉大にして之を多くの寐室に分ち、一室に二十乃至五十の寐臺を置く、然れども時として一家族に向て一室を貸し、又は二室位を與ふる所もあるなり、寐室及び室は概れ不潔狹隘にして、法律上の取締全くなしといふも可なり、寐室は一種奇怪なる光景を呈し、厚板の上に汚れたる而かも花々しき色の床をおき、壁には宗教畫をかけたり、室の各所には大なる卓を置きて茶飲時に至れば露人の愛する酒精の氣なき飲料を取る。然れども聖彼得堡に於ては比較的職工の家少きを以て、彼等は都の出口、殊にナルバ門の近傍に其家をおく、而かも其家たるや工場の貸家よりも一層甚しく、家よりも寧ろ小舍と稱すべきものに多數の職工集り、而して比較的高價なる家賃を拂ひつつあり、而して貧の貧なるものに至りては之にさへ住することを得ず階上の物置又は穴藏の傍などを借るゝものさへあるなり、

又食物は極めて粗惡にして低廉なるものを食するも尙且つ賃銀を以て之を支拂ふこと能はず往々負債をなすもの少からず、時として雇主が一切の食物を供し、賃銀の中より其代價を差引するものあり、幼兒の勞働に關しては其規則極めて嚴重に十二歳以下の小兒は決して工場に入るこ

とを許さず、又十二歳以上十四歳未滿のものは特別の條件を附して工場に入ることを許せり、又賃銀は國の各地によつて異なれりと雖も概して東部は西部よりも低廉なり、聖彼得堡に於ては普通の職工は一ヶ月十乃至十五ループルを得べし、故に若し妻も共に勞働せば一ヶ月二十二ルーブル位を得るに足れり、

同盟罷工は露國法律の絶對的に禁止する所にして之を爲すものは重き罰に處せらるべし、昔時人民の愚昧なる時にありては職工たゞ其雇主又は役人を困らしめ、工場に火を放つ等の亂暴をなすのみなりしと雖も近時教育の影響は漸次彼等をして自己の權利を自覺せしめ、又正當なる理論の存在を悟らしめしを以て最早や腕力のみを以て事を起すが如きことは其跡を絶たんとせり、而して大學生及び學問ある社會主義者の理論に大に勞働者の頭腦を支配し、彼等は漸く政府の處置について是非の論評を叫ぶに至れり、而して此傾向は今後益々著しかるべく、延いて或は大革命の基をなすや未だ知るべからざるなり。

露國內亂の中心となれる諸人物評

「デーリー、ミルロア」

(一)皇帝。露國內亂の中心となれる第一の人物はいふまでもなく皇帝なり、彼の性格は强固なるか薄弱なるか又は殘酷なるか溫和なるかを問はず、革命の根本は彼の手中に存せりといはざるべからず、彼の言語は至上權を有す、彼若し改革を承認すべしとの一語を發すれば全露西亞帝國は平和の光を見るべく、若し其人民を虐待することを止めよと命せざれば革命の騷擾は連續せざるを得ざるなり。露國人民は憲法制定を誓願せり、而して彼は之を拒みぬ、人民は「彼等の小父」に向て歎願を願はさんことを乞へり、而して彼は之を斥け、ヴラドミール大侯を遣して彼等の誓願を記載することを妨げたり、彼は己れの弱點の爲にかゝることを爲したるやも知るべからず、然れどもかゝる時に當つてはかゝる弱點は邪惡なりといはざるべからざるなり。

(二)ヴラドミール大侯。今日まで流されたる血潮に向て直接に其責を負ふべきは實にヴラドミール大侯なりといはざるべからず、彼は露國中にありて最も嚴格にして最も慈悲心なき男なり、彼の社會觀は單純其者なりと名つくべし、彼にとつては露國王冠は全世界なり、軍隊は王冠を防がんがために存し、他のあらゆる物は王冠を飾らんがために存せりと思惟す、彼は決して殺戮を嫌はず、事あれば刀鎗を用ひんとす。彼の生存し得るは實に專制政治の行はれ得る時期に止るべし、何となれば全露西亞は彼を惡み、又彼をしてかゝる行爲をなさしむる張本人たる野心深き其婦人を嫌ふこと甚しければなり。

(三)ポビエドノスツエフ。露國の內政を指揮し、皇帝をして改革を拒み、ヴラドミールをして專權を擅まゝにせしむる主腦は實に聖シノドの長官ポビエドノスツエフなりとす。彼は敏捷なる資質を有するも尙露國の最大幸福は無智愚昧なる農民に向て獨裁政治を施すにありと信じつゝあり、彼の生涯の計畫施設皆此目的のためになされたり、彼はあらゆる改革に反對し、殊に教育の最大なる敵にして、全國の人皆自由に考へ、又は自由に働くの能力を備へざることを希望す、

(四)マキシムゴルキー　現存せる社會制度に向て反抗するマキシム、ゴルキーは漂泊者として生涯を送れる有名なる文學者なり、彼は各所に於て如何なる事をも試みたり、庶民の間より起りし彼の幼時は困難に變され又彼の教育は極めて不完全なり、故に彼は百姓又は勞働者に同情を

表し、彼の筆及び聲の力を抑制せんとする政府に向て極力反對しつゝあり、

（五）教父ガポン。あらゆるものゝ頭となつて各所に出入し、組織し、運動し、未だ革命黨員によつて充分なる信頼を得ずと雖も隱然たる一勢力をなすものは教父、ガポンなり、彼の希望は成るべき丈け人命を救助し以て圓滿に事を收めんとするにあり。此露國内亂が今後如何なる形勢を呈ずべきかは實に世界の括目して知らんと欲する所なるべし。

日本兵の眞價漸く露人に知らる

「スフヰーア誌」

大戰爭の開始せらるゝ毎に兩敵國が互に相評隲するの言を集めなば當さに一冊の興味ある著作をなすべし。戰爭の初期に於ては人心の激昂最も甚しく、概ね輕侮苛酷の心を以て敵兵を評し、些かも公平寛大の言をなすものなきが如きも交戰の時日長きに亘り、彼我の長短漸く明かなるにつれて、終に敵國の眞相を了解し、之に向て相當なる讃否の聲を放たざるを得ざるに至る。今回の日露戰爭の如き亦此例に洩れざるなり。初め露人の心を滿たせしものは實に輕侮の念に外ならざりき、「侏儒」「黃皮の」「猿の如き」「奸譎なる」等あらゆる暴言は日本人の上に冠せられたり、而かも一二の戰に於て敗を取るや、輕侮の念は嫌惡の思に變じ、今や輕侮嫌惡の思念を抛ちしにあらざるも又寛大なる嘆美の心之に加はるに至りたり。



INTO HIS OWN MINES AGAIN.

—Gilbert in the Denver *Times*.

露國軍人の書簡を見れば彼等の日本兵に對する感情の變遷を知るに難からざるなり。六ヶ月以前アレキセ、タークハノフは記して曰く、「猿軍は我等の豫想せしが如く臆病にして奸譎なり、十人の日本兵一人の露人を見れば勇しく進みて之を殺すと雖も、露國人の數彼等より多しと見れば直ちに退きて猿の穴に隱る」と。然るに現今の觀察は大に其趣を異にしプルートコフなるもの記して曰く「日本兵は未だ露國軍人に匹敵せずと雖もよく戰ひ得るの軍人なり、而して彼等は死に就て毫も恐るゝ處なし、遼陽に於て我等は一大隊の兵を殺し勝鬨を作りたる時、生殘りたる日本兵二人は臆する所なく我等の陣中に進み來れり」と。

アレキサンドル、サドヴニコフの記載する所を見るに「日本人が如何

なるものなるかを知らんと欲するか、強健にして小軀に、且つ予の長靴の如き皮膚を有せり、我等の捕虜となりたる日本兵を觀るに毫も通常人と異るなし、而かも彼等は其長靴を脱し、素足にて進行し得るなり。是れ何故ぞといふに日本兵の踵は實に厚くして棘多き野草の上を歩行するも痛みを感ずることなし、又彼等の吾人と異る所は其手なり、多くの人は其指の間に鵝鳥の如き蹼を有せり、而して彼等が射擊すること能はざるに至れば後陣に送らる。」

コサックのトレミッフは曰く「殆んど總ての日本人は皆讀み書きすることを得、これを以て觀るも彼等の聰明なることを了すべし彼等は基督教を信ぜず、從て靈魂の不滅なるを知らざるを以て、死に就て考ふることなし、彼等は余りに丈低きを以て却て彈丸の厄を免かれ大に利することあり」、と

「日本人は捕虜となることを忌み、爲めに我等は多く之を捕虜とすること能はざるなり、遼陽の戰爭に於て我軍は屢々日本人を圍み、之を捕へんとしたり、一人の日本兵あり、我將の爲に銃を落され將さに捕へられんとしたり、彼捕へられなは安全に活くるを得べし、而かも彼は銃を拾ひて突然其喉に宛て、自ら殺さんとして發射せり、病院に於て血痕斑々となり、尙叫びて「我を殺せよ、我を殺せよ」といへり、我將校之を見て曰く我等も斯くの如くなれば降參するの要なし」と。

「日本人の皮膚は其顏色の如く黃ならず、其顏の黃なるは恐らく日光のためならん、我等の捕たる一將校は露語、淸語、韓語、英語、佛語及び其他二三の國語を話すことを得たり、此人勇敢にして我陣中に入込みしが誤つて合圖の鐵線を踏み、かくは捕虜となりたるなり、我等が彼に物を與へしや、彼は露語を以て「有難し、汝は親切なりといへり」。

支那に於ける英國の商業

「倫敦タイムス」

バイロン、ブレンナン氏は「極東に於ける英國商業の鑒望」と題する文中の一節に於て記して曰く「支那に於ける外國貿易の隆盛ならざる最大原因は支那政府が商業の如き一國發達の根本をなすべきものに向て充分なる熱慮を與へざるなり、而して只地方的、一時的なる無意義の利益に向て追究するは是れ商業を殺し、企業を滅するものといはざるべからず、支那の財政に關する政略は總て全く自殺的なりといふべく、我等英國人が將來の目的とする所は決して我國に向て商業上の特權を有せんとするにあらず、實に支那國人をして自由なる商業をなすべき地位と願望を與へんとするにあり、思ふに今回の戰爭は支那に於ける商業狀態を一變せしむるに至るべく、若し日本の成功が支那の獨立を承認し、而して他列國の商業に關する惡干涉を排斥することを得ば英國の商業や自らにして好況を呈すべきなり、何となれば支那にして他の干涉を受けず、自ら其好尙に從て貿易することゝならば我英國の正直なる商人は必ず彼等の意に投し、以て其商業の愈々增加すべきこと決して疑を容れざればなり」。

リヒハルド、ワグネルの艶書

「リテラリー、ダイゼスト誌」

音樂の嗜好を有するもの、殊にワグネル崇拜者に向て最も趣味ある一書は發行せられたり、是れ即ちリヒハルド、ワグネルがマチルデ、ウエ

ゼンドンクに送りたる書簡を集めたるものにして天才の戀愛が如何に其著作上に影響すべきかを顯はすと仝時に又かゝる艶書文學中に於て最も異彩を放てる好文字を附加したりといふべし。彼の有名なるバルザック對ハンスカ夫人の小説的事件の如き又頗る此ワグネルの事と相似たるものあるなり、バルザックが終に結婚することを得たりし美貌なる波蘭女は此小説家の大著述の靈感の源泉たりしことは世人のよく口にする所なり、而して之と等しくマチルデ、ウエゼンドンクは實に大作曲家ワグネルの上に最高なる美想を起さしめし本尊なりしが如し、彼女は實に「イソルデ」の主人公なりき、彼嘗て彼女に書を送て曰く「予がトリスタンを書くを得たるは全く貴女の賜物なり、予は之に向て永久心底より湧き來る感謝の念を絶たず」と、又「ニーベルンゲン、リング」を作りしも此マチルデと交際しつゝありし時なり、毎夕彼は其作りたる部分を彼女の前に朗讀し、且つ之れを演奏したり、彼は全く彼女の趣味を信頼し、屢々其忠告によつて詞曲を改作したりしなり。



THE RING IS OUT.

—Maybell in the Brooklyn *Eagle*.

一千八百四十九年の革命運動の結果としてワグネルは獨乙を去りて一時ツーリヒに住まざるを得ざるに至りぬ、彼女と知りたるは實に此時に始まりぬ、マチルデは富みたる獨乙商人の妻にして當時年猶二十四、ワグネルは四十歳にして二人の交情日を追って親密を加へたり、マチルデは容姿端麗にして美術的趣味を有し、韻文を作り、且つ音樂の熱愛者なりき、彼女の夫オットー、ウエゼンドンクはワグネルに大に尊敬の念を抱きたりき、此書簡集は一千八百五十三年より七十一年に至るまでの分を含めり。

ワグネルの性質の甚しく憂鬱にして厭世的なりしことは此書簡の全部にあらはれたり、「貴女の御玉章は如何ばかり我を悲ましめしか」これ開卷の一語にして而かも亦全卷を通ずるの精神なり、「惡魔は我等の感情の一方を去りて又他の一方に入る、嗚呼如何にして之に打勝つべきか」「わがこの悲嘆に加ふるに更にわが妻の病床に横るあり、二ヶ月が程予は妻の突然死神の手に奪はれんことを顧へり、醫師も亦應急の準備をなさんことを勸めたり、予が周圍は總て死の呼吸を以て充さる過去に向ふも將來に面するも予が眼に入るものは皆悲哀なる形影にして、人生は最早や全く意義なきものとなり了りぬ」「予は此苦痛より救済せらるゝの法を求めつゝあり、されどこは外部の物を

以てなし得るにあらず、予が心の奥底より求めざるべからず、平和!!あらゆる慾望の鎮靜!わが心を殺して他人の爲に活くるは此世の慰安なるべし」

ショッペンハウエルがワグネルに及ぼせる影響は極めて顯著なり、此厭世哲學者の名は屢々其書簡中に記されたり「予が讀書の範圍は極めて狹隘なり、予は常にわがショッペンハウエルに就て心を慰む、彼は予が近來彼に告げたるが如く、多くの缺點を有せるに拘らず、予を導て最も奇怪なる理想の迷宮に遊ばしむ」、一千八百五十八年十月彼は記して曰く「予が友ショッペンハウエルは嘗ていうて曰く、天才の著述に於ては其明瞭にして完全なる解釋をなすことは極めて難く、而して其誤謬缺點を指摘することは甚だ易し、何となれば天才の誤謬は他の特質と反映して殊に顯著に、且つ些少なりと雖も、天才の長所に至りては無限無盡にして到底口舌を以て評し得べきにあらずと。予は此言を以て直ちに貴女の御玉章に應用せんと欲す、其缺點と思はるゝ處は一讀の後容易にわが眼に浮ぶ、されど其深奥、優美、神聖なること無限無盡にして只だ心之を樂むべくして、筆之をあらはすことを得ざるなり、貴女の純潔高貴なる精神が如何に予を喜ばすかは到底予のあらはすことを得ざる所なり、予は之をあらはすことを學ぶく、且つ之れを一生の事業となすべし、予が今日まで ー 貴女と相逢ひ、貴女が予のものとなりし今日まで —— 如何なる生涯を送りしかは貴女のよく知らるゝ所なり、予は美術家として過せられたる世界に就て益々予の性質と合はざるを知り、之より退隱せんとしたりしなり、予は人と交ることを忌みて之より逃遁せり、予は好んで寂寞を求め、隱遁を欲したり、されど或一人の心を得てこゝに我が隱所を求め、こゝにわが救濟を得、こゝに我全心を打明けんとするの熱望は益々其激しさを加へたり、而して人性の赴く所予は之を美人の胸中に於て見出し得べきことを知りたり、されど貴女と交際するに至るまでは此安慰の如何に貴く、如何に樂しきものなるかを想像すること能はざりき、貴女と一度逢ひて予のあらゆる不幸不滿は影の如くに消え失せたり、「予は貴女を愛す」是れ實に予の救濟なり、之がために予は安靜なる幸福を味ひ、予が人生に對するの意義全く一變を來せり、されども今日の目的は實に大いなる悲慘ー戀愛に伴ふ大いなる煩悶を以て遂せらるべし、我等は盃を傾けて其滓までを飮めり、……世界は我等の愛と惱みによりて征服せらるべし。

ワグネルが彼の音樂に關して曰く、「予が著作は日々一層大いなる愉快を與ふ、何となれば是れ予の外何人によつても遂せられざる疑問を解決せんとするものなればなり、げに何人も予の如き意味に於ける詩人音樂家は未だ世にあらざりき、予のあらはす所は到底他人のなし能はざる所なり」、と

「一千八百五十九年の夏、ワグネル及びウエセンドンク夫人の交際は餘りに親密となりしの結果、ワグネル夫人及びウエセンドンクの怒を起し、終にツーリッヒを去らざるを得ざるに至りたり、其後七年にしてワグネル夫人は死し、一千八百七十年ワグネルはコシマ、フオン、ピユーロと結婚したり。

藝術にあらはれたるスラヴ人の特質

「リテラリー、ダイゼスト誌」

エッ、エム、コナーセル氏は獨立評論（インデペンデント、レヴュー）紙上に於て論じて曰く

「スラヴ人の缺點は其餘りに感情的なるにあり、其性質の悲哀的なること恰かも希臘人の如く、其感情の鋭敏なること恰かもケルト人に似たり、吾人若しスラヴ人の特質を研めんと欲して彼地に入り込み、其記録其舞踊、其俗曲等を見るも未だ其眞相を悟らずして歸ることあるべし、然れども十九世紀に於て産出せられたる幾多の天才は其民族の特質を發表して全歐の人皆之を明知するを得るに至れり」

「スラヴ人の藝術は純粹なる人生の批評なり、而してスラヴ人の批評は彼の希臘人又は印度人のそれの如く抽象的にあらず、何となれば彼は前者の如き好奇心なく、又後者よりも遙かに多感的にして靜かなる沈思に堪ゆべからざればなり、かるが故に吾人は時としてスラヴの批評は推理的ならざるを疾むことありと雖も又トルストイに見るが如き實際的なるを嘆ずることあり、而して彼等は戰爭の小説に就ては毫も嗜好を有せざるなり、見よトルストイが今日の如き主義を抱持せざりし以前の作「セヴアストポール」に於ても戰爭を恐るべきもの丶如く記したるにあらずや。ヴエレスチヤギンも單に忠實に戰爭を畫きたるに過ぎず毫も之に熱愛の情を表したるにあらざるなり、



NICHOLAS (to Kuropatkin)—"Wave your flag and distract his attention until he begins to hibernate again."
—McCutcheon in the Chicago *Tribune*.

ゴルギーも亦勞働者を寫すに其裸體のまゝを以てす、トルストイさへ今尙批評的といはんよりは寧感銘的なり、「コサック」はルーソーの感化によりてかゝれ、「クロイツヱル、ソナタ」はショッペンハウエルの主義によりて作られたり、又或點より見ればスラヴ人の特質は最もよくツルゲーネフの作にあらはれたり、彼はトルストイの如く粗野なるに近き禁慾主義を持せず、遙かに優美温和の性質を備ふ」

「あらゆる藝術中にあつて最もよくスラヴの勢力を西歐に及ぼしたるものは其音樂なり、スラヴの音樂を見れば直ちに彼の特質を知るに難からず、如何に絶妙なる音樂と雖も國民特質に基かざるものは到底人工的なるを免れず、從て國民の賞讃を博すること能はず、かるが故に一國の愛好する音樂には必ず國民の自然的感情を包括せり、而してスラヴの音樂は概して悲哀的なり、時としてはシヨッパンの樂の如く餘りに悲哀を極めて人心を溶かし却つて性情を弱からしむるの恐なきにあらざるものあり、而して吾人が過去五十年間に於けるスラヴ音樂の功績を見んと欲すれば之を仝年代に於けるケルト人のそれと比較するに若かず、スラヴ人は「「アイステッドフオド、又は「フ

アイス」等の作を有せず、然れどもケルト人は到底スラヴ作曲家の如き大傑作を出さゞるなり、スラヴの音樂には勿論スコットランド、アイルランド又はウエルス的の風調を帶びざるにあらざるも此等は決して此大傑作の根底をなせるものにあらざるなり、實にスラヴ音樂の勃興は希臘戲曲のそれに比すべき充分の價値ありとす」。

外人の觀たる日本の芝居（下）

（丁抹の名優カアル・マンチウスの所說）

天弦生

近世の芝居

取調材料の匱しきため、近世の日本の芝居に關して十分に是を明かにすることが出來ぬのである。玆に記述する斷片の記事は、唯日本の國劇に關するものたるに過ぎぬ。元來受用性に富める日本人のこととて、外來の風習事物の一切を摸倣する傾向も著しく、從つて支那の文化の影響を受けたことは莫大なものであつた。而して此の支那文明の影響の中に就て、芝居の方面には最も其の結果が著しく顯はれた。肝心の國劇は、尚其の幼稚なる、半ばは身振狂言風な狀態に止まつてゐた其の一方で、もう一種の支那芝居が始められたのである。丁度、歐洲でも文藝復興に伴うて輸入せられた古典文學をひとへに模倣して、肝心持ち前の中世風の芝居が、一時其の發達を阻止せられたと同じ行き方である。これから推して見ると、今日の日本の芝居が、歐洲芝居の影響を受けて、遠からずかの『日の國』の小國民が、一種の上衣や、高い帽子を著けて、かの佛蘭西風の芝居を演ずるを見るに至るであらう、そして、それがために國風の芝居の特質は一切煙滅に歸するとであらう。（譯者曰、此の推論は不當であるが、かの一流のオペラ直輸入說を唱へる連中などに、遠い丁抹の役者が敎訓を與へるやうな心地のするのは面白い。）さりながら、現今に於ては、日本國劇の特質は尙維持保存せられてゐる、而して其の特質たるや、諸他一切の國の芝居に、遂に見ざる特異のものであつて、亦多少注意するに足るものである。（譯者曰、マンチウスのいふことには間違ひも多いが、日本の芝居に顯然たる特色のあることを認めて、明かに斯う述べてゐるところは、さすがは其の道の名人だけあるといふべきで、無闇に西洋を有りがたがる連中の無見識と比べものにならぬ。

戲曲と演技とは、ともに支那の典型に密接なる關係を有してゐるが、舞臺の搆造に至つては、大ぶ變遷を經たものである。花やかにして休むときなき空想の豐かな日本人は、かの單純にして無趣味な搆造を以て、永く滿足してはゐられなかつたのである。尤も、かゝる搆造の劇場に於て、情致湧くが如く光景躍如たる日本の芝居は演ぜられ、また幾百年間かの保守的な支那人は、かゝる搆造を以て滿足してゐたのである。

さて、斯くの如くにして日本人は、舊來のよりは一層よく自國の戲曲の性質に適應せる舞臺を新たに造り出したのである。此等の新工案の中には、極めて巧妙なものがあつて、歐洲の芝居に採り用ふべき個處の有無を考ふるに足るのである。

興行の時間

觀劇の時間も支那のとは相違してゐる。即ち日本では、朝の六時に始まる。日出の頃に、劇場の外で太鼓をいくつも敲く、すると群集は切符を買はうとして事務所（木戸の事）へ押しかけて來る。此の樣に朝早くから—吾々歐人には實に法外な早さであるが—始まるといふことは、日本

人とても非常に不便を感じてゐるのである、併しながら彼等日本人は、此の芝居を觀るといふことを非常にすき好んでゐるので、其の芝居の初めから觀たいために、すゝんで早朝から起きるのである。高位高官の人々、または學者といふ類の人々が、芝居を觀に行くといふことは、似合はしからぬことと思はれてゐる。併しながら、尤も日本では、支那に於けると同様に、芝居は高尙な、寧ろ尊敬すべき職業ではないものと思はれてゐるのであるが、尙高位高官の人々乃至學者の貴婦人たちは、此の通俗の藝術を味ひ娯まんがために、お忍びで行かるゝことは敢て拒まれぬのである。ところで、朝の時間の早いといふことは、紳士に對してよりも貴婦人に對しては、一層不便なことである。何故といふに、朝の早いために、貴婦人たちの苦心慘憺たる念入りのお化粧を、其の前夜から初めねばならぬ故である。髪結ひは前日に來て、技巧をつくして頭髪を組み立てるので、其の頭髪は實にすべての日本貴婦人の誇りとするところである。かくの次第故、勿論前夜中は、マクラと稱する一種の木片の上に其の頭を凭せかけて、其の立派な衣裳のまゝで一夜を過さゞるを得ぬのである。眞にこれ觀劇者の



HINT TO NICHOLAS II.—WHAT HAPPENED TO LOUIS XVI.
—*Simplicissimus* (Munich).

苦行であつて、歐洲の俳優は其の東洋の同業者を羨みもすべきことである。さて、貴婦人が朝早く起きれば、其の頸や、胸や、顔の彩色は剝げてしまふかも知れぬ、しかし日本人が唇を彩色するために用ふる薄い金の被せもの（紅の誤であらう）を以て其の唇を被ふことを忘れてはならぬ。蓋し、彩り作つた顔の白い色に愛嬌を添へるかの櫻色とせんがために、此の彩色をするには數時間を要するのである。

お支度にこれほど手數がかゝるのであるから、其の償ひとして日本の婦人は、歐洲の如く三時間の芝居で追ひ拂はれることはないのである。大抵の芝居は午前六時から午後九時まで續く。ある歷史劇になると、支那と同様日本に於ても、ある英雄の榮枯盛衰を其の最後まで悉く演ずるので、數日間に亘ることすらあるのである。

觀客席と舞臺

日本の劇場は、他の一般の建築物に反して、非常に高いので區別しやすい。否、更によく目に著き易いことは、屋根の上に突出しになつた構造のものがあつて、丁度最高櫓か何かのやうに、見張り番人が一人居て、火事があればそれを知らせる役

目をするやうになつてゐる。劇場の前面は、布の張り札を引き廻してあり、その布には演ぜらるゝ芝居中の最も主なる場面を一ぱいに描いてある。入り口は普通二たところであるが、何れの入り口にも切符を賣る男が番をしてゐる、其の番人は周圍に小さな貨幣を高くいくつにも積み上げて、其の中に、土間の上へ坐つてゐる。劇場の內部は大きな正方形の室で、其の奥の方が舞臺になつてゐて、其の舞臺は、支那のとは違ふが歐洲のとはよく似て、布の幕で以て劇場の他の部分から區別せらるゝのである。觀客席は、多數の同じ大きさの正方形の桝に分けてあつて、低い仕切りで境がしてある。その桝の中へは互ひに向ひ合せに舞臺へは橫になつて四人だけ坐れるのである。觀客の間には、餘燼を容れた一個の暖氣を送る鍋（火鉢のことであらう）があつて、紳士等はたえず其の銅の煙管を此れにあてゝ火を點けてゐる。其他、かかる長時間の慰みに欠くべからざる必需品は、全体の平床を占めてゐる桝の間の仕切りの端の廣いところで賣らるゝのである。張り出しの緣側は壁の上部に沿ふてゐて、その前の方の桝には、最上の座席がある。此の最上の座席は、特に上流社會で懇求せらるるものである。平床は中流社會の占むるところで、高棧敷は最下級の貧民の占むるところである、劇場の中央高臺の上に一個の取締りがゐて、全場內に目を配り取締つてゐる。觀客の左の、舞臺に密接したところにある、突出しになつた桝には、囃し方と唱歌者とがゐる、樂器は太鼓、笛、及び特異なる三絃の琴サムシン（三味線のことであらう）の三種である。樂人は壯麗な衣裳を著ける、これは芝居の宗教上の起源の遺物である。可なり大きな日本の觀客席には、千五百人を容るゝに足る。

日本の舞臺の特色の一として擧ぐべきは、觀客席の全長を經て劇場の背部に到る二筋の平行せる通路である。此の二つの通路は、平床の桝と水平の高さで、俳優が舞臺へ出る路なのである。俳優は時としてはその路で行きもやらず逗まり、おのが感情を身振りで表はすために十分間も費すことがある。勿論この路には何等の裝飾もない。支那のとはちがつて、日本の演場は比較的非常に其の舞臺藝に於て進步をなしてゐる、其の附屬物や必要品も非常に實際上の精密に忠實である。しかしながら、就中最も驚くべき成功は、日本の舞臺を更へる方法である。

日本の芝居も支那の芝居も、歷史劇になると、度々舞臺を更へればならぬ。然るに支那の芝居では、沙翁劇の如くに、一切の裝飾を卑しむである一方で、日本人は數百年前已に舞臺面を變へる一の簡易にして巧妙なる方法を發見したのである。エシケルフレヒト　ケムフェルは、日本の振り事（默劇）に就て記せる條下に、『舞臺の主要なる附屬物、即ち井戸とか、橋とか、門とか、家屋とか、庭園とか、山とか、動物とかは、能ふかぎり自然に近く現はされてゐる。そして丁度歐洲の舞臺に於けるが如く、是等の道具は一の相圖とともに直ぐに移し動かし、又は切れ切れに離すことの出來るやうに仕掛てある。』と書いてゐる。是の事は既に前章に揭げて、後の章で說明をする筈にして置いたのであるが、このケムフェルは、如何にして斯かる舞臺の取りかへをなし得るかといふことは知らなかつたに違ひない。知つてゐたなら、其の取り更への手續きを記さずに省いて置かう筈がない。兎まれ角まれ、ケムフェルは以上の事を以て歐洲の舞臺の取り更へとは比較して見なかつたらしい。此の事は斯様にしてやるのである。即ち、舞臺の床は、一はいの長さと廣さとの圓面で、丁度鐵道の蒸氣機關を平圓盤の上で側軌に移すやうな具合にして廻轉することが出來るやうになつてゐる。此の平圓臺は後幕で二つに仕切られ、觀衆には其の半分だけしか見えぬ。一つ相圖をすると、仲の平圓臺は、すべてのものを其の上に載せたまゝで廻轉し、かくて舞臺面は

更はるのである。此の單純な工夫のおかげて、日本人は舞臺の更はる毎に舞臺に背向ける必要もない。この方法は十分に利用せられ、一時間の中に六回位は廻り舞臺があるのである。

此の工夫は、十分に發達した歐洲の機械を以ても實際用ひるに足ると思はれるのであるが、玆に吾れ等の想像と全く相容れざる今一つ特別の仕掛けがある。(ミユーニツヒの宮廷劇場の舞臺主任として有名なるラウテンシユロエゲルは、千八百九十六年に、日本の廻り舞臺とよほど酷似したる仕掛けを用ひた、其の一例は、モツアルトの「ドン ヂオワンニ」に於ける如きものて。)其の特別の仕掛けといふは、ブーダエーの所謂「影」なる生きた機械である。舞臺に出てゐる各俳優の背後には、黑頭巾黑裝束の忍び男が隨いてゐる。此の奇異なる幻の唯一の職務は、俳優に其の必要なる物品を手渡したり、倚子を置いたり、また舞臺の暗いときには俳優の顔を照らして見せたりするのてある。最初は、外國人の觀客は、舞臺のあたりを絶えずうろついてゐる此の黑い影を見ると、うるさくて癪にさわるのであるが、だん〳〵しまひには目に馴れて何ともなくなるばかりか、其の必要缺くべからざるを知るに至るといふ。



RUN OUT.

The Russ—"Come on, Ivanovichski --'taint much of a show town anyway."

—*World* (Toronto).

俳優と其の演技

おもて向き、日本の俳優の社會上の位置は支那のと同じことよくないのである。彼等は社會の最下級に屬する。併し實際彼等は隨分尊敬もせられ、且つ一般の民衆から崇拜せられてゐる。彼等の中の小數は、其の死後公衆から悼み戀まれ、公費を以て非常に華美な葬式を營まれた。普通俳優の給料は實に僅少で、一千兩(殆んど二百二十ポンド)以上に上らぬ。併し重立つ俳優は通常劇場の株主て、此の資格によつて、其の收入の大部分を得ることになつてゐる。

日本に於ても、支那に於けると同樣、婦女子は舞臺に出ることを許されぬ。併し男子を教育して女性の役を演ぜしむることは、音聲練習の上から見たところでは、よほど支那のには劣つてゐるやうである。外貌や擧動に於ては、男俳優は女性に扮して眞に迫ることも出來れど、自分の聲をつくつて、殆ど代々の受けつきになつたかの鋭い鼻聲を出すためには、彼等は餘程苦しむやうである。

以上の諸點を除けば、日本の芝居は支那のと比べて、其の根本に於て差異はない。其の著しき傾向は、無關係な實地の細かしいことを、純粹に機械的に模倣することである。そして同時に、最も明白な形で、感情を粗大に大袈裟にして示すことである。憤怒と怨恨との激烈な發作や、死に物狂ひの怖ろしさを、生硬に病理的に模倣することや、是等は以て日本俳優が其の大名を成したところで亦實に其獨特の技であるらしく見える。日本の俳優は、此れ等を演ずるにあたつて、毫も自から勞を惜まぬ。日本の俳優の扮した英雄が情に激した場合を以つて比ぶれば、單に魯鈍なるものに過ぎぬ。その臺辭は一高一低、或は高調にして四壁を震はし、或は低調にして、殆んど聞えぬばかりに、打ち咽び、全く人間の詞とは思はれぬ揃ひの音律的な歌臺辭である。或る時は語を發せずして、默し、其の憤怒の絶頂を唯身振りのしぐさに依つて現はす日本の俳優が身振りの最も完全なるところに達するは以上の如き光景に於てゞある。かの英雄は憤怒のために泡を吹き、歯がみをなし、兩眼をくり〳〵と廻轉し、その總なす頭髮をひき捩り、恐ろしき痙攣を起して床の中を轉げ廻り、遂に觀衆の喝采の裡に徐ろに呼吸を引取る。觀客はやかましく騒ぎたて、吐息をつく。此の種の肉感的な芝居を見た一人の佛の旅行者が有名なる日本の俳優宗十郎に、何故に彼は其聲と身振りとをさほどまでに誇大にしたかと尋ねて『自分には大名や武士がさ樣にものをいふとは思はれぬ』といひ足した。すると、その俳優の答へに『併し私どもが舞臺の上で、普通の人間のするやうに演じましたなら、私どもが英雄であると誰が思ひませう。』とあつた。

此の一語は實に日本人の藝術に關する概念の本體を云ひ現はしたもので、人間を理想的に表現する方法は、著しく誇大に演ずるといふに在るのである。

（完）



明治闇黑史

有磯逸郎

○後藤象次郎の對韓陰謀（下）

『後藤象次郎と金玉均、面白い對照ではないか、君も知つとるぢやらうが、後藤といふ男は、理屈をひねくる土佐人には、珍らしい大腹な、術策に富んだ男で、幕末の際などは、隨分危い橋を渡つた、叔父の吉田東洋の系統を繼いで、一種の開國論者であつたが、野中多内が藩廳に立つと、長崎に逃げ出し、坂本龍馬と手を握り、王政復古論を携へて、江戸に上ぼり、例の長廣舌を揮つて、徳川慶喜を説いて、一夜にして政權を奉還せしめた辯論の雄ぢや。金玉均といへば、弱年ではあつたが、事大黨の跋扈を憤り、眇たる青年の身を

以て、政權を取らんとした朝鮮第一等の才物ぢや、後藤は狐のやうな公卿等に對すると。激烈な討幕論を稱へて、荒膽を挫いてゐたが、德川慶喜からは、こつそりと五萬石の墨附を取つてゐたといふ豪の者、(噓ぢやといふ噂もあるが)、金玉均は彼の十五年に日本に遣つて來た時に、最う新橋や柳橋の美人を生擒つて、浮名を流したといふ才子、此の豪の者と才子の會合、芝居にすると、我輩は乾度面白い役割と爲るぢらうと思ふが如何ぢや、いや、そんな婦女子の喜ぶ芝居よりも、福澤の書簡で會つた兩人の間には數時間の後には、早くも、異日大活劇を演ずべき默契は、成り立つたのぢや」

「金玉均は、福澤に會つたよりも、尙一層熱心を籠めて、朝鮮の內情を語つた、此際日本の力を借りて、支那の跋扈を抑へざれば、朝鮮の前途は、到底發展の途なきを告げて、後藤の同意を求めたのぢや、靜かに金玉均の言に耳を傾けてゐた後藤は、倚子に倚つてゐた身體を動るぎもせず、決然として、一臂の力を添へんとを誓つた、が、後藤にも注文は有つた「朝鮮改革の一儀は、此の後藤、不肖ながら一身に引受け申すべし、併しながら直に事に着手するは、聊か輕卒に失するの恐あり、故に此の後藤に國務刷新の一條を委任す、といふ國王自身の親書を携へ來り玉はゞ死を賭して朝鮮改革に努むべし」と念を入れたので、金玉均も最もなりとし、その意に隨ふて朝鮮に歸つた、此時金玉均は、後藤の一諾で、在野黨は、擧つて朝鮮獨立黨に助力するものとして、欣然として、本國に歸つたのぢや」

「此時、後藤は國王の親書を見ると同時に、百萬圓の運動金を調達して、朝鮮に渡るべし、といふとまで誓つたのぢや、後藤も隨分無鐵砲!、後藤の經歷と威望を信じてゐた金玉均は、後藤の此の誓約に、一點の疑惑だも挾まなかつたが、實は此時の後藤には、百萬圓は愚ろか、十萬圓の目途も無かつたのぢや、ハッ〱……一體、金玉均が日本に遣つて來た眞意は、國王の內意もあつたに相違ない。が實は獨立黨の氣勢を揚げんが爲に、運動金の調達に、日本に遣つて來たのぢや、事大黨が、朝鮮の內政に勢力があつたのも、李鴻章の爺は、吝嗇てはあつたが、閔族の奴等に金を惠れたのが、何よりの勢力、金玉均等も、朝鮮人て有るだけ、其處に拔目はない、獨立黨の勢力を張るには、金力に依るの外はない、といふので財源を求むる爲に、

日本に來たのぢや、之は朝鮮ばかりでなく、一時自由黨の勢力が、旭日の如き勢であつたのも、氣運の然らしめた故でも有つたぢやらうが、大和の土倉などは、板垣に戀れ込んで、金を貢ついだからぢや、我輩等も、今日まで、幾度となく活劇を試みたが、何時も失敗に終つたのは、軍用金の缺乏か重もなる原因、外に理屈も糸爪もあつたものにあらず、後藤が、右に在るものを左へ送るやうに、如何にも氣輕に、例の澄ました顏て、金玉均の百萬圓の依賴を引受けたのぢやが、後藤には此時少しも才覺の見込は無かつたのぢや——後藤の事ぢやから、娘を緣つけてある岩崎からでも引き出す筈ぢや、と言葉の穗にほのめかしたかも知れぬが、例の高島炭坑の一件もあつた際ぢやから、岩崎からは、百萬圓は兎も角も、五萬十萬の金も引き出す譯にはゆかなかつた、が、當時後藤の金箔は、煌々としてゐた時代であつたから、飄然と、朝鮮から遣つて來た外來者には、固より後藤の內幕が判る筈なく、金玉均が後藤の大引受に引受けたのを見て、安心して歸つたのも無理はない」

「後藤は、金玉均を煙りに捲いて、引受けは仕たが、調達の目途が無い、流石の後藤も之にははたと閉口した、其處で、後藤は、大阪セメント會社の森脇直樹を呼んで相談した、此の森脇といふ男は、矢張土佐人で、自由黨の勃興した當時は、盛んに運動を試つた一人で、同人間には理財の道に長じてゐるといふので推されてゐた男、後藤は、差し詰め此の森脇に大事を明かしたのぢや、百萬圓は兎に角、十萬丈けでも調達したいといふのが後藤の精神、兩人膝を交へて相談したが、おいそれと妙案が浮はぬ、森脇の發案で、以前自由黨に關係した地方の富豪原を說き、三千、五千と集めて、十萬金に集めやうと定め、二三の地方をあたつて見たが、一二萬は集る見込はついたが、十萬の調達は覺束ない、我輩は後藤の相談で、同じく地方說客の一人に加はつたが、那の地方も、孰の地方も、民權運動に疲れたものと見え、相談に乘らぬ、流石豪膽を以て知られた後藤も、大に避易の體に見えたが、雨のしよぼ降つた或夜の事、火鉢を圍んで、思案の首を鳩めてゐると、後藤は、決然とした樣子で、何やら灰の上に書いて見せた、我輩も、森脇も、何心なく、火鉢の中を見ると、綺麗にならした灰の上に、現然と見へたのは、紙幣僞造の四字」

「紙幣僞造の四字を見て、我輩も、森脇も、愕然とし

たが、後藤は空嘯ひて、平然として、落ちついてゐる、森脇はすと立つて、便所に行き、我輩は火鉢の火を眺めて、默然としてゐると、後藤は俄に手を拍いて酒を呼んだ、此時は深更の十二時——一時頃でも有つたらうよ、森脇も座に歸つたが、その儘、考案に耽つて默然でゐる、後藤は呵然と、大事の前の小事ぢや、と笑つた、その音聲は、些しも平生に變らぬ、我輩は此時窃に後藤の度胸に感服したのぢや、そこで先づ我輩は賛成すると、森脇も賛成して、その儘酒に倒れた、その翌日より、森脇は技師捜索の任に當り、我輩は渡航後の準備に着手し、寄り〳〵同志を語らつてゐた…返事をしないな、何んぢや、その顏は、呆れてゐるのかハッ〳〵」

「我輩等は着々と、闇中の事業を進行してゐると、中途に森脇の手で仲間に這入つて來たのは、小林樟雄ぢや、後に小林は、大阪事件に、參謀の役を勤めたのも、此の大陰謀に加はつて能くその事情に通じてゐたからぢや、爾して、偶然にも、僥倖にも小林の加入した爲に、此の秘密計畫に一大發展を見るべき好機會を得た、といふのは、小林は佛蘭西語に通じてゐたので、折々佛蘭西公使館に出入してゐた、特に前に擧げた書記生のサーベルとは、懇意であつたので、或時、話說の序から、秘密運動の一端を洩らして、佛蘭人の義俠で、軍用金は出來ぬぢやらうか、と相談したものと見ゆる」

「話說は中途に爲るが、茲に此の運動の進行を急ぐべき意外の事變が、丁度此時持ち上つて來た、それは彼の安南戰役ぢや、佛蘭西政府は、支那駐在の同國公使バテノートルを以て、得意の外交手段を弄し、クールベー提督は、艦隊を列ねて、支那海を壓した、バテノートルと、日本駐在の同國公使との間には、間斷なく電報の往復がある、其の間に挾まつてゐる朝鮮は、如何爲つてゐたか、といふに、依然として、事大黨は勢力を張つてゐたが、支那は戰爭に氣を奪はれて、朝鮮の內政には、暫らく干渉の手を休めてゐた、正に獨立黨の乘ずべき好機會!、彼方には佛蘭西政府は、滿々たる野心を懷ひて、東方に手を延ばしてゐる、我國を見ると、一代の怪物後藤象次郎は、一生一度の大芝居を打たんとて、闇中に事業を進めてゐる、が、暢氣なのは、その頃の明治政府さ、今は大勳位侯爵の、正二位伯爵のと時めいてゐた伊藤井上等の參議諸君は、歌舞宴飲の中に、杓子定規の官制を作るに之れも汲々と

して、内外の形勢は、斯んな具合に迫つてゐるのを知らんてゐたのぢや、役人なんて氣樂なもの」

「小林がサーベルに相談したのは、内外の事情は斯んな形勢に迫つてゐた時ぢや、時あれかしと待つてゐたサーベルは、早速に小林の意を汲んて、之を公使サンクウイッチに謀つたのぢや、兼て後藤の大名を知つてゐた公使は、サーベルの熱心に動されたのか、或は他の思案があつたのか、後藤に會つて見たい、と藪から棒に小林の手を以て、後藤に申込んで來た、渡りに船！　とは此時の後藤の心情てあつたらう、紙幣僞造といふ變則手段まで選ばなかつた後藤は、直に之に應じて小林とサーベルの案内で、一夜窃に佛蘭西公使館を訪問した」

「公使館の奥まつた一室て、後藤はサンクウイッチに會つた模様は、後に小林に聞いたが、後藤の態度は見事てあつたさうぢや、後藤は、滔々として、東西の形勢を說き、日佛同盟の必要を論じて、例の大風呂敷を擴げたといふ事ぢや、公使は後藤の快然とした人物を喜び、直にその議論に贊成の意を表した、公使は、更に、在野黨の首領板垣君も同意なるべきや、と聞くと、その言の終るを待たず、後藤は、自若として、板垣も贊成なりと斷言したといふ事ぢや、すると公使は、前よりも一層眞面目に爲り、板垣氏列座の上にて、今一回會見を重ぬべし、といふので、此の會見は終つたのぢや、但し板垣は當時土佐に歸つてゐて、後藤の此の計畫は夢にも知らなかつたのぢや」

「後藤の計畫は、佛蘭西公使と會見後、何んだか眞物に爲り掛つた來た、が公使は板垣に會ひたひといふ、君も知つとるぢやらうが、板垣は、後藤のやうに融通の利く男ぢやない、此の秘密運動に加はるか如何か、心元ないが、何んでも板垣を東京へ呼ぶの外ない、といふので、小林森脇の兩人は、晝夜兼業で、後藤の密書を携へて、板垣を土佐に尋ねた……板垣も半ば贊成し、小林等に伴はれて東京に出た、後藤は此時自ら品川停車場に迎へて、板垣を高輪の屋敷に招じた、や、彼の時の後藤の様子といふものは無かつた、板垣の意を迎ゆるを到れり盡せり、後藤より一伍一什を聞いた板垣は、自ら表面に立たざるを條件として、後藤の大計畫を贊成したので、日を定めて、板垣後藤相伴ふて、佛蘭西公使館を尋ねた、此時も矢張小林は通辯、左様ぢや、此時は、小林の最も得意の時てあつたらう、今は豚屋を遣つてゐると聞いとるが、此の話說を

見ると、小林も今昔の感に堪へまい」

「肅然と、佛蘭西公使と對座した板垣は、後藤の紹介終るや、滔々、數萬言を重ねて、朝鮮計畫の、今日逸べすからざる好機會なることを論じたさうぢや、小林は何時も、板垣の此時の議論を繰り返えしたので、今でも我輩は、ちやんとその議論を覺えとる、一體、後藤は喋舌ることは板垣より上手であつたが、嚴肅な席上に爲ると人を動かすことは、眞面目である丈け、寧ろ板垣は後藤より巧かつたやうに思ふ、此時、佛蘭西公使は大に色動き、膝を前めて、後藤等の大計畫に贊同した、が、其處は外交家、直に承諾を與へない、「公使としては斯くの如き議に與かるの權能なしと雖も、一私人としては、滿幅の誠意を表する以て、一身の許す限り兩君の計畫に援助すべし、幸ひ本國の友人に、義に富める資産家あれば、こゝに一書を送りて、兩君の意を助くべし」と告げ、尚後日を契つて、爰に板垣と公使との會見は終つた。爰に注意したいのは、書記生のサーベルぢや、始終に小林と意を一體にして、斡旋の勞を取り、事實以上に板垣後藤の人物を紹介した骨折は尋常ではなかつたのぢや、後藤等の大計畫が、此處まで進行したのも、我輩は寧ろサーベルの盡力が與りて多かつたので、我輩は今にサーベルを多としてをる」

「サーベルが、公使と後藤との間を取り持つたばかりでなく、また支那駐在のパテノートル公使や、クルーベル提督に書を送り日本政界の實情を報じ、民間黨の首領が今日の如き意向を示し來りしは、佛國の東方政策に得べからざる好機會なり、と論じて、後藤等の意を通じてゐた、サーベルは、パテノートルやクルーベルより來た返書を小林に示し、なほ絶えず公使館内の消息を後藤等に通じて、秘密連絡の任に當つてゐた、顧みて、安南戰爭は如何であるか、と言ふに、戰局はますます擴がつて、支那政治家の朝鮮に對する注意は、戰爭の方に奪はれて、暫らくお留守に爲つてゐる」

「その頃、小林は、芝兼房町の金虎館に泊つてゐた、金虎館といへば、土佐自由黨員の定宿で、板垣も東京へ出ると、矢張此の金虎館に泊りその他竹内綱でも、植木枝盛でも、片岡健吉でも、林有造でも、皆んな此の金虎館に泊つた、それに金虎館の女將は、隨分の剛物て、政黨員を待遇うのは、巧みで、我輩等の間に、女豪傑の名を博してゐた、一種風の變はつた女、そら中江篤介の家内は此の、金虎館の女將よ、小林もその

頃は、此の金虎館に泊つて、ごろ〳〵してゐたのぢや、すると、一日、金虎館の前に、二頭曳の馬車は駐つた、女將は狼狽して、出て見ると、二人の立派な西洋人は、小林を尋ねる、小林は何者ぢやらう、と階下に降りて見ると、佛蘭西公使のサンクウィッチー、サーベルも後ろに跟ひてゐる、公使は小林を見るや、滿面笑を湛へて、小林の手を握り、

トラビヤン、トラビヤン

と叫んだ、トラビヤンといふのは、佛蘭西語では、吉報といふ言葉、百万圓の調達は出來たといふ報道であつたのぢや、ア丶一日千秋の思を以て、待つに待つた報道を、公使自身來りて、小林に報じたのぢや、此時我輩等の喜びは、喩ふるに物なし」

「併しながら、我輩等は、何時迄も此のトラビヤンに醉ふてゐることができない意外の事情に陷つて、此の壯絕快絕の大計畫も、水泡に歸したのは、殘念千万」

「といふのは、斯うした譯ぢや、當時板垣は、伊藤博文と交際はしなかつたが、後藤は彼樣な氣象ぢやから、依然として、伊藤と交際を續けてゐた、一日、伊藤は、後藤を高輪の屋敷に尋ねて來た、四方八方の話說より、端なく朝鮮問題は伊藤の口に上ぼつた、碁を圍みたる手を休めて、慨然として、異日東洋のバルカンは、朝鮮なるべしと嘆息した、爾して言葉を續けて、朝鮮問題の解決は人に在り、適任者あらざるべきや、と後藤の意見を質したのぢや、すると後藤は、石を擲ち、乃公は朝鮮公使の任に當るべし、と突然に言つたので、伊藤も暫はし呆然としてゐたよしてあるが、余り後藤の樣子が、眞面目であるから、伊藤も改り、若し君にして其の覺悟あれば、政府は特別の待遇を設け、朝鮮改革の一事は、悉く之を君に任かすべし、と眞意を籠めて、起たんことを求めた、後藤は伊藤の眞實明けた言葉に動き、實は我等の間にも數月前よりかく〳〵の大計畫あり、佛蘭西公使の援助に依りて、云々、と百万圓の運動費の一件まで打ち明けたるのみならず、更に朝鮮國王の密旨ありしといふ事まで、伊藤に話したのぢや——之が此の大計畫の破れた源因ぢや、口は禍の門、慶喜を說いた後藤の口は、天下を起こしたが、伊藤に大事を明かした、二重張の後藤の口は、過去の人物を棒に振つて、陰謀史上の大箆棒と爲ろ、後に爲つて、我輩等は之を知つて地團太踏んで、後藤を責めたが、最う跡の祭！」

「後藤の打明咄を聞いた伊藤は、胸中大に驚いたが、

後藤には程よき返事を與へ、匆々にして、後藤の邸を辭して、驀然に井上馨を尋ねて、後藤等の大計畫を語つて、急に朝鮮公使に電報を發して、後藤の裏を掻いた、數月前、金玉均の哀請を拒絶した井上は、俄かに、支那を恐れた從來の態度を變じ、竹添公使に獨立黨を助くべしと命じた如何ぢやへ、伊藤の井上のといへば、今は我物顔に元勳風を吹かせて、大政治家然としてゐるが、斯んな塩梅式に、一夜の中に、猫の眼の玉のやうに、ぐる／＼變はるのが、見られたザマぢやない、一時、日本の對韓政策が、俄かに强硬と爲つて、それ迄失意であつた朴泳孝金玉均等は、之も一夜の中に大臣と爲つたのは、此の結果であつたのぢや、爾うして後藤等の大計畫は、うたかたの水の泡」

「此の日本の外交政策は、幾月續いたか、と言へば、眞個の二三日！、再び閔黨に追つ拂はれて、金玉均等は、日本に亡命客と爲つて、遂に花牌屋にまで墮落させたのは何んといふ醜態ぢやい、それより十年の後に日清戰役、又十年にして、今の日露戰役、歷史は繰り返へす、といふが、成程其樣らしいやうぢやわい。その後聞くと、佛蘭西公使が、トラビヤンと呼んだその百万圓は、公使の友人でもなければ、義俠者の義俠より來るのでもなく、佛蘭西政府は、安南戰爭役を機會として、朝鮮の地に、百万圓の大賭博を試むる筈であつたとか」

雜感

文學博士　芳賀矢一

近頃は神宮奉齋會で婚禮を行ふことが段々と流行して來た。これは皇族方の御婚儀が賢所の前で行はれるのに倣つたのであらう。元來我國の神道では、死の方よりも生の方を司どつて居るのがむかしからの習慣で、今日でも赤兒の宮參りといつて、三十日目位には產土神の御宮へ參る。死んだ時にはお寺へいつて坊さんの厄介になる人でも、生れた時には必ずお宮へ參ることになつて居る。生は神、死は佛と分業があつた樣なわけで、少しも衝突をして居らぬ。近年になつて神葬式といふことが始まつて、神道流の葬式の儀式が出來たが、神道で葬式ばかり取扱つて居るのは感心しないとつね／＼思つて居つた。所がこの頃段々と婚禮にまで關係する樣になつたのは喜ばしい事である。生れた時ばかりでなく、婚禮といふ人生の一大儀式にも、祖神

の前で執行ふといふのはさもあるべきことである。信仰なり、宗教なり、人生を通じて支配すべきものである。

佛法の方では死のことばかり司つて居るが、これも佛法家の今日に勢力の無い一原因である。西洋の坊主は生れた時から、死ぬ時まで。冠婚葬祭すべての場合に世話をするものである。然るに佛家の坊主は死人を取扱つて、世外に立つて居る。これは宗教の性質にもよるだらうが、もう少し社會に立交る樣にしなければ、宗門の繁昌は望まれぬ。學問のなかつた時代には坊主が名付親となつたり、いはゆる寺小屋の先生をした事もある。平安朝以前の佛法は鎭護國家の佛法で、朝廷のすべての儀式に關係した。未來の世ばかりでなく、現世を支配する宗教でなければ、勢力をもつことが出來ぬ。正月の元日に坊主が來ると縁起がわるいといはれる樣では、これからの世には一日一日衰へるばかりだ。教育事業や、慈善事業で、社會に立交るのも必要だが、もう少し家庭と結付く樣な方面で、社會に容れられねばならぬ。佛前の婚禮は一人二人やつた人もあつた樣だが、今日ではまだ行はれさうにもない。

佛教の方では死んだあとの七々日を懇に吊ふ。神道の本も祖先崇拜で死んだ人をしのぶ。これは決してわるい事では無い。併しながら死人にばかり厚くて、生きて居る人に薄いのは宜しくない。我國では宗教の關係もあらう、とかく生前に人を貴ぶといふ風が足らぬ樣に思ふ。功勳ある人や、偉業をなした人はどこ迄も尊む風が欲しい。死んでからお宮を立てゝ祭られるよりは、生前にその人の功業を稱へて崇める方が、風教の爲にもよい事であり、その人に對する敬禮である、外國では偉勳ある人を尊奉して生前からその銅像を建てたり、紀念碑を作つたり、少しも他人の功業を褒めるに吝ならずといふ風が見えるが、我國では生前にはどんなえらい人でもそんなに褒められる人は無い。今日の新聞雜誌を見ても、惡口をいふことが大流行だ。或外國人が日本に豪傑の無いことは惱てある。なぜかといふと、誰に聞いて見ても、本當に褒める人は無いと言つたさうだが、これらはよく穿つた評言かも知れ無い。少しも嫉妬の心をもたず、えらい人はえらい人として國の光を出す樣にせねばならぬ。死人を尊ぶ風とともに、生きて居る人をも尊敬する風を養はねばならぬ。

外國では誕生日を祝ふことが日本よりも盛である。日

本ては死後の法事供養を大事にして、誕生日は第二になつて居る。激しい競爭場裡に立つて世界と競爭して行からうといふ國民は生誕日を大に祝つて現世の幸福を祝し將來の希望を促進せねばならぬ。死者を忘れ、祖宗を忘れるのは本よりわるいが、死んだものにくよ〳〵して居ては發達が出來ぬ。自ら自己の誕生日を祝して前途の奮發心を起すもよし、他人の誕生日を祝して他人の功業心を奬勵するのも必要である。日本國民は元來生々主義て、現世主義であるから、生誕祝賀のことはもう少しやるべき筈だとおもふ。

我國には尙齒會といふとがあつて、老人の長壽を祝ふことがある。これは支那からの傳來であらうが、長者を尊敬する事でもあり、人生を貴ぶ風をあらはしたもので面白い。併し唯だ長命ばかりては何の役にも立たぬ。社會の實益をなし、國家に功勞のある人でなければ祝ふには足らぬ。無益に穀潰となつて隱居しただけでは少しも祝賀する價打は無い。獨逸などでは巡査や郵便配達夫などで三十ヶ年勤續をした人が八十の賀七十の賀などをやることが多い。新聞に度々その記事がある。これは非常に面白い事で、たとひその仕事が如何に低いにしても、國家や社會に對して爲した功勞は同じことである。職務に貴賤尊卑は無い。自己の職務をよく守つて、二十年も三十年も國家に盡す人は實にえらい人である。之を尊敬する價打がある。我國で巡査を二十年もやつて居れば意氣地なしの樣におもふ。これは大間違である。忠實に一つの職業を守つて、微力でも國家社會の爲めに勤めて怠らぬ人は立派な人である。大政事家や、大學者が國家に貢獻したのと同樣に祝賀すべき價値がある。金持の隱居が妾狂などをして長命をしたものを祝ふ樣なことはこれから斷然やめたいとおもふ。

學窓餘談

伯林騷動

藤井健次郎

第十九世紀はあらゆる方面から見まして、眞に偉大なる世紀でありました。政治、社會、經濟、文學等、すべての方面に於いて、光榮ある進歩發展をしたのでありります。その中でも取り分け一千八百四十八年は、若し之を政治、社會、實業等の側から見ます時には、第十九世紀中、隨一に活動の旺盛な年でありまして、殆んど全歐羅巴が騷ぎ立てた年であります。佛蘭西の

二月革命や、獨逸一般の動揺や、以、墺兩國の爭や又ヴィンナ、伯林に於ける一揆騒動や、實に夥しい程、多いのであります。殊にヴィンナの騒動の如きは、宛然今日の露西亞の有様と酷似して居りまして、之等を比較して見まするのも、差當り實に興味のあることて御座います。が、今はすべて此等を措いて、たゞ一つ伯林騒動の御話をして見たいと思ひます。

さて一千八百四十年代に於いては、佛蘭西と謂はず、バーデンと謂はず、墺太利、以太利、否殆んど全歐羅巴の天地に、自由、參政の聲、平等、獨立の叫が、東から西、南から北、隅から隅まで、反響せられたので御座います。普魯西國も亦其數に漏れず、人民が屢々國王に逼りて、國會開設を促がし、參政の權を確實にせんことを要求したので御座います。當時の普魯西王は何人かと申しますると、一千八百四十年にフリードリッヒ、ヰルヘルム第三世が御隱れ遊ばして、次に御位に御即きになつたフリードリッヒ、ヰルヘルム第四世で御座います。此御方は大分聰明の資てありましたので、人民は此王によつて改革を成遂しようといふ多大の希望を繋ぎ、國王も亦可成人民と調和して、共に國勢伸暢に盡くしたいといふ御意て、即位早々國事犯人に對して特赦などを行つたり、又可成自由制度を施行したりしたのてありました。が、さて肝心要（カナメ）の憲法問題になりますると、國王と人民との意見が遙かに懸絶して居つて、到底一致融和すること出來ぬ程てありました。國王は容易に人民の請求に應じようともしなかつたのみならず、寧ろそれを以て不都合のことゝ思はれたのてある。國王たる者は自己特得の權力て國家を統治してこそ、國王たる者の權威は保持せらるれ、若し人民にも統治上に參與するの權を分與したならば、國王たる者の權威何くにあるといふ御考て、度々地方議會の代表者などから請願があつても、是丈けは容易に允許を與へなかつたのてあります。

併しながら、洪水の決し來る所、赤手之を阻止すること出來ず、天下大勢の赴く所、國王の力も亦如何ともすることなして、フリードリッヒ、ヰルヘルム四世も一千八百四十七年二月三日に、終に、從來の地方議員を基礎としたる聯合議會（フエライニーグテ、ランドターヘ）を開設すべしとの詔勅を發せらるゝの已むを得ざるに至つたのてあります。此聯合議會は最近の國會といふやうな者てはありません、其議決權は唯々新税を起したり、或は既存の税率を上げたり、又平時の國債等に關する者て、其他

に法律の制定、廢止等を議するの權は有つて居りません。唯國王の諮詢に對して法律に關して奉答するといふまでゝあつたので御座います。其組織をいへば二院制度で、一を貴族院（ヘルレンクリー）といつて七十二人の貴族より成り、他を三級院（ドライステンデクリー）と謂つて、二百三十一人の士族（リッターシャフト）一百八十二人の市選出代議士、一百二十人の農民選出の代議士より成つて居つたのであります。

此聯合議會の第一回の初召集は、一千八百四十七年の四月の十一日でありまして、其開院式に於ける國王の宣言は、王が畢生の政治上の信念を披瀝せられたる者で、確かに壯快の言であつた。其旨趣は、君は君として獨裁の力を以て國家を統治し、臣は臣として飽くまで之に服從するといふ君臣の關係は天地自然の道である。憲法を作りて國王の行動をそれで律さうといふは是れ人爲の道である。天下何者か朕をして此天地自然の道を捨てゝ、人爲の道を取るべく說服する者やある。朕は飽くまで、國王として統治の權を總攬すべしといふのでありました。何がさて聯合議會の開院式に此調子の勅宣故、何で議院の氣受けのよい筈があらう。中に氣早の代議士は、其場からすぐ席を蹴立ち自分の家へ歸らうとした者さへある程でありました。が、他の代議士連中は之を慰めて、此處を辛棒して、將來の發展の基礎とせねばならぬといふに服して兎に角聯合議會の開會を繼續し、六月二十六日に閉院致したのであります。

さて國王の方では、此聯合議會を以て國王が人民に讓歩し能ふ最極限と見て、此上にも讓歩することは到底堪へ得ざることゝ御考になり、人民の方では此の如きは立憲政體に進む第一歩のみと考へて、決して之を以て滿足しない。飽くまで參政權を要請して已まない。加之一千八百四十七年は凶作であつて農民が大に苦しい狀態に沈んだが上に、商業上の恐慌があつて實業社會一般に不振の狀を呈したものでありますから、それやこれやが重なり重なつて一般人民の動搖が益々甚しくなつたのであります。如此有樣で一千八百四十七年を越して、明くれば一千八百四十八年、其月早々に佛蘭西に所謂『二月革命』が起つて、之が爲めに歐洲各國特に獨逸諸邦の君主間に恐慌を起し、さらでも烈かつた處の動搖は一層の激甚を加ふるやうになつたのであります。

三月十三日に於けるヴインナ騷動の報知は、實に伯林市民に充分塡裝したる重砲の引金を引いたやうな衝

動を與へたのでありました。彼等市民皆意へらく、我が學藝天下に冠たる處の『智慧の都』（シュタット、デア、インテリゲンツ）は又政治上に於いても選手たらざるべからず。然るに今ドナウ河畔の市民によつて先驅せらる。寧ろ耻辱とすべきであると、かくて三月十八日正午を期して、多數の市民宮城前に群集して、その內から委員を出して、親しく國王に謁見して、四ヶ條の請願を致しました。第一に軍隊を伯林より退出せしむること。第二に其代りに市民の或者に武裝を許して、守衛、警察の職を執らしむること。第三に出版の自由を確認すること。第四に可成速かに聯合議會を召集すること。然るに國王は詔勅を出されて、第三の出版の自由を確保すること、第四の聯合議會をば四月二日に召集することとの二條を允許遊ばされたので御坐います。此の如く兎にも角にも二ヶ條も允許を得たといふが爲めに、群集は拍手國王の擧を賞讃したのでありました。

然るに折角此の如く兩者の間好感情を以て相近つくやうになつたに拘はらず、茲に一事件が人民の怒を買ふやうになつて、そして遂に伯林騷動なる者を演ずる樣になつたのであります。それは他でもありません、群集は、宮城の各門々に、兵士を以て塡塞せられつゝあるを見て、寧ろ之を以て驚くべきこととなし、その兵士を撤せしめやうとしたのであります。『軍隊を撤せよ』の聲は伯林の至る所に反響せられて、爲めに革新の氣運は刻一刻に逼りつゝありました。然るに彼等軍隊の方では國王の命令によつて、其群集を解散せしむべく、裝塡せる小銃を以て來ましたが、如何なる機會（ハヅミ）でありましたか、歩兵の方から二發の彈丸が人民の方へ發せられました。あさ此二發が抑々の始まりでそれに對して、人民は怒つたことか、怒るまいことか、悉く皆烈火の如くになり、以爲らく國王吾等を欺けり、國王は詐て吾等を此場所に招集して、以て吾等を逆殺せんとする者である。吾等は最後の手段に依らざるを得ない。吾等は武器を執て戰はざる可らずと、そこて、群集は四方に散て、凡そ二時間にして二百の堡柵を作り、其上に黑、赤、及金色の旗を飜へした。午後三時に及んで軍隊は攻擊を始め、七時頃に至つて、漸く『國王街』の大部分を淸掃するを得た。爭鬪は此の如くして終夜持續して、翌十九日の朝になりて、僅かに鎭靜に歸したが、兵士は全く疲勞困憊を極め、到底充分の勝利といふを得なかつたのであります。斯の如くして國王は終に市民の壓迫に堪へ得ず、彼の軍隊に命

じて伯林を退去せしめ、市民自らをして、市の守衛警察の任に當らしめ、又内閣の更迭をやつて、つまり市民の要請を悉く容れて、人民と和睦したのであります。其上此爭鬪の爲めに斃れたる二百十六人の爲めに鄭重な葬式をなし、國王及王妃は帽を脱して之に向て敬禮を表し、愈々市民の意を迎へ、僅かにホーヘンツヲルレン家の顚覆を免れたのであります。

是が所謂伯林騷動の概畧の御話で、之を我邦が君は慈母の愛を吾等臣民に垂れ賜ひ、吾等臣民は又子たる者の愛を君主に捧げ、熙々として相和し、穆々として相睦み、國家の大憲章は天皇親ら之を制定して吾等人民に授け玉ひ、吾等人民は、此大憲章を奉じて、忠節を君と國とに致すのに比較しますれば、實に驚く可き對照ではありませんか。敵國露西亞では、氣の毒にも外我邦と戰つて敗れながら、内は今を盛りに、此騷動を起し、爲めに血を流したのである。國體の然らしむる所、寔に已むを得ぬ次第でありませう。

最後に何故伯林騷動の御話を致したかといふに、此一千八百四十八年は社會の各方面に影響を及ぼした社會でありますが、殊にダウッン氏の謂はれた通り、獨逸社會主義が眞の活動を始めたのは此の年からて、獨逸社會主義は此時から始つて居る。それて苟くも十九世紀の特に獨逸に於ける社會主義運動を會得するには此一千八百四十八年を知らねばならぬのであります。それ等のことから、終ひ伯林騷動の御話をしやうといふ氣になつたのであります。

軍國雜記（中）

丁字樓

◎行商人の弊害に付ては、なか／＼取締るよがむつかしい、宿舍の中にも、行商人とチヤンとグルになつて居るのもある、それは若干の口錢を宿舍へ拂つて、その者にばかり賣らせると云ふのもあれば、又口錢さへ出せば、誰にも賣らせると云ふのもある。

◎行商人は大抵、持つて居る丈が身代てあるが、中には立派に店を張つて居るものが、不正なる彼等と同じ仕方で爪を長くして、日々其雇人を派出して居るのもある、廣島あたりでは、こんなのが正直な商人の信用を傷けて、惡い影響を與へて居るのである。

◎理髮師などにも、宿舍廻り專門のがある、初めは此連中も「兵士の爲に」と云ふので、大抵普通よりは安く理髮(かツ)て居た處、兵士の方から、餘計に錢を出して、「エ、釣錢はいらない」と言ふのが多いとやらて、後にはチク／＼直上げをして、益々慾張る樣になつて來たが、そんな連中にさへ、一人何程て、口錢を取る宿舍も有るさうな。

◎元來行商人は、兵士が宿舍に入り込んで、チヤンと落着いてから、ボ

ッ〳〵來たものであるが、此頃はせち辛くなつたと云ふものか兵士が、此町へ何時に入ると聞くと、チヤンと前から待ちかまへて居て、我一にと押掛ける樣になつて來た、あつかましいものである。

◉わるい奴は、ペテン師の寫眞屋に賣藥屋である、寫眞屋の中には、木賃宿などにころがつて居て、小さな寫眞機械を持つて歩いて、宿舍廻りをしては、田舍出の兵士を欺し込み、一人で何百圓と云ふ詐欺を行つた奴もある、是等は尤も憎む可き者であるが、割合に警察の取締りが手ぬるい樣子である。又賣藥屋の中には、鼠の糞の樣な藥をつかませる奴が、往々あるのは、忌々しい事である。

◉また「美人はがき」の賣行のよい所から、一歩すゝんで、風俗壞亂になるべき寫眞繪端の類を、寫眞屋や賣藥屋が、賣歩くとの事である、何處にも斯樣な奴は居るが、これでも國民かと思ふと慄然とする。

◉一時よく賣れたのは、「軍事郵便」であつた、それも今は段々工夫して、何月何日さへ記入れたら、それで可い樣に、チヤンと到着の報知に、留守を賴むと云ふ位の、文句を刷込んだのが出來て居るから、文字の書けない連中には、實に重寶である。

◉隊に依ては、隨分よく萬事行屆いて居るのもあるが、中には僕の腑に落ちぬ事の有つたのもある、そんなのは隊長の性行が、どうであらうかと、僕は陰ながら注意して居る、但し今はそんな事を云ふ場合でないから先づ言ふまい。

◉僕は多くの兵士に接觸した爲、陸軍に對しても、僕自身として多く要求したい事がある、補充兵の食物に付ても、僕は或人を介して、當該師團參謀長へ、參考のため、賄請負から仕出す一飯分を、差出して、僕の意見を申し込んだともあつた、それに付ては他日世に問ふ機會もあらうと思ふ。

◉兵士の輸送、宿舍へ入宿の都合などは、モウ少し考へ樣もあらうと思ふとが時々ある、兵士を犒ふと云ふ上から、視てかゝり、又宿舍を國民の義務として、眞面目にやつて居るものゝ上に付て、考へて見たならば、都合は好い上にも好い樣にしてやりたいものである。

◉宿舍料の支拂に付ては、東京でも隨分小言がある、宿屋なら夜よなかに泊れば、必らず泊り賃は取るが、宿舍の方では、十二時過てから、泊り込んだときには、その泊りを數に入れぬのである、之が若し横着な者の手に扱はれて、拂つたとにでもしてあつたら、意外の曲事が行はれやうと思ふが、實際はどんなものであらうか。

◉旭川事件などは、時節柄甚だ面白くない事であるが、實際軍隊の事は、一寸別世界の樣になつて居るので、局外者には窺ひ知るとを得ないけれども、隨分いかゞはしい事も有るらしい、それも其筈、一人に付て壹錢ちがつても、大きいのであるから、「軍國の經濟」は、殊に清廉潔白の士に於て、處理せられねばならぬ、それも唯、一部の者バカリが、眞つ正直であつても、到底滿足に行く筈はないから、局に當るものは、大官小吏に論なく、余程撰敍を愼まねばならぬ事と思ふ。

◉代議士は、壯士の古手でも、貳千圓になる、兵士は博士學士其他立派な名士でも、一日六錢(戰時給)である、此高いものと安いものを比較して、いろ〳〵と考へて見ると、犒軍恤兵などゝ云ふ事は、たゞ單に「軍國の爲」と云ふてはなくて、他の理由から云つても、宜しく大いに務むべき事たと思はれる。

◉ことしは舊正月に、丁度兵士が僕の家に入舍して居たので、雜煮を食はせるために、家で餅を搗いたが、兵士が我も〳〵と、手傳つて呉れて、臼取を爲る、杵を持つ、それは〳〵面白かつた、何しろ露助を膺懲す勢ひで、やつたのであるから、一臼や二臼は、造作なく遣ッつけて了つた。

◉さまで文字のない兵士へ、その親元から來た手紙を見ると、圖は甲州丈に、法華宗てゝもあらうか、「此頃は百人講を拵へて、毎日々々おまへの爲に祈つて居るから、彈はどんな事があつても當らぬ、安心して征くがよい」とあつた、僕はその「はがき」を手にして、覺えず知らず泣いた。

◉越後の兵士て、僕の家へ入舍した者が、旅順方面て「行方不明」になつたのがある、親元へ弔詞を送つたら、母親から「行方不明と云ふのてあるが、どうてあらうか、實狀が分つて居れば、知りたい」と言つて來た、其後また家内からも、同じ樣な問合せが來た、僕は一々それに答へて、尙戰友にも、僕から問合せたが、不相變「行方不明」て、殘念てあつた、一番あはれなのが、こんなのてある。

◉北海道夕張炭山に働いて居た者が、兵士になつて來たのがある、聞けば我家には四人の子があるとやら、本人出立の後、家內から其事情を記して、「萬事宜しく賴む」と言つて來た手紙を、僕は見るとはなしに幾たびか見かへしたが、いつか知らず胸一ぱいになつた。

◉三河から出た兵士て、本業は理髮職てあるのが、至つて無邪氣な男てあつた、文字は一向わからぬ身て、一行入人の宿舍長を勤めた處、命令を持つて來られて忽ち困つた、それを僕が寫して、皆に讀み聞かせたとらある、兵士の對手もナカ〳〵面白い。

◉深草聯隊の兵士て、たッた一日入舍したのがある、くれ〳〵言つて置いたにも拘はらず、本年六月に出發したまゝて、何の便りもしなかつたが、遼陽占領の時に、餘程うれしかつたものと見えて、「繪はがき」を寄越した、その文句はたッた八字て、端書の片隅に「遼陽占領無事安心」とあつた。

◉それから以來、その兵士と文通し始めたが、かなたも怠らず手紙を寄せて、近頃斯いふ都々逸を送つて來た。

露兵の捕虜

露助は行く〳〵日本の國へ
　攻めに行かずに食ひに行く

◉大坂の兵士て、落語家があつた、それが僕の近居に泊つて、一夕僕の家て談莚を開いたが、明日午前四時の整列てあると云ふのに、前夜十二時過まで、おしやべりをして、大いに人を笑はせたが、その戰地からのたよりが可笑しい、「相變らず暇さへあれば、おしやべりをして、內地に居るよりハ、いつそ氣樂に暮して居りますが、たゞ小便に行くにも、生命がけて、決死隊て行かればならぬにハ、閉口します」とあつた、彼は旅順方面に居たが、今は北進して居るさうな、無事て凱旋したら、歌澤のおもしろいのを聞かせると言つて來た、僕はたのしんて待つて居るのてある。

◉福島縣の生れて、病院へ後送された傷兵があつた、僕がそれを見舞つて、いろ〳〵戰地の事などを話した後、「あなたはモウ再び出征される樣な氣づかひハ有りますまい」と言つたら、「わたしは戰友が氣の毒てすから、戰友に對しても、モウ一度征つて見たいと思ひます」と應へた、そんなに戰友の事を思つて居るかと、僕は其心中を推察して、黯然たらさるを得なかつた。

◉これも福島縣の生れてあるが、或る下士は、負傷して歸つたから、僕が家內を見舞に遣つたら、兩の頰(喋ろ口のふち)小銃創を受けて歸つたのてあつて、殆んど一口も利けなくて、唯叩頭謝意を表するバかりてあつた、征戰數月、創を被つて歸つた彼は、不幸の中にも、幸ひに其親と相見るを得るてあらうが、其時には、口の利けぬ爲、充分意志を通じ、感情を表はすとが出來ぬのを、さぞ遺憾しく思ふてあらう、と僕は其心中を想像するに堪へなかつた、

外國從軍記者

渡邊生

○タイムス(英國)の フレーザー氏

年齢の三十七よりは割合に若く見える、唯髯の極く安ッぽい人、元は英國砲兵の下士官ださうな、開戰前から渡韓して居つてタイムス社の通信船(デスパッチボート)で芝罘、仁川等を幾度も往復して旅順の大海戰(二月十日の)を目撃したと、自稱する一人、尤も其船には同社のジエームス氏も乘つて居たので、船中裝置してある無線電信に依つて、頻りに通信をしたが、遂に我政府は之を差し留めた、ジエームス氏は名高い軍事通信員で、元來氏が第一軍に從事する筈であつたが、何しろ海軍の方の通信もあるので、フレーザー氏が黑木軍に從軍する事となつて、氏は通信船で乘り廻し鴨緑江の戰爭の時にも龍巖浦まで通信を取りに來て居る、フレーザー氏は義州から戰報を以て驅け付けると云ふ有樣で、通信は何の社よりも一番早く出した、

新聞記者としての從軍は初めてなので、從つて功名に焦せる所爲(せい)か、一日として驅廻らない日はない、何がな、通信の好材料を得んとの考であらうか、戰爭があれば無論のこと、長き滯陣中と雖も、先生非常に忙しい　我軍の動靜さては敵の容子と頻りに飛び廻つて少しでも變つた事があれば直と打電する、一度面白い事があつた、それは矢張甜水店滯在中、露の敗兵が二三人我等通信員天幕の傍に夜陰に乘じて來たとの評判が何所からともなく立つた、スルト先生直ちに其旨をタイムスへ打電した、のは好いが、後から段々調べて見ると、豈計らんや、それは附近に住んで居た支那人が露兵の分捕品を着用して其邊を徘徊して居たのだと分かつて見れば折角打つた電報も餘り有り難いものではない、

一寸した事でも斯う云ふ風であるから、タイムスの電報欄を仔細に讀んで居た讀者は馬鹿々々しい事で隨分威かされた事であらう、

○デーリー、ニユースの バッス氏

もと米國の富豪バンダビルト家の料理人であつたとのこと、辛苦勉勵の結果、獨學自修して、佛、獨の二語

をさへ繰る、志俄古の新聞記者としては一流に値する人なさうだ、極めて温柔な、人好きのする方で、そして戰線に出れば頗る、豪膽で、一度戰線に臨んで寫眞機を持つたが、最後平氣なものだピントを定めて樂々と撮影をする、氏常に「砲彈は懼るゝに足らぬが、小銃彈は危險である」と語つて居た、

苦勞人丈あつて萬事に如才なく、露營の時分杯は人手を煩はさずに庖厨の事まで自分一人で遣ると云ふ風で、從軍記者としては適當な人であらう、

○紐育ヘラルド(米國)の デヒス氏

大兵肥滿な男で、金遣の荒いので從軍せぬ前から有名であつた、自分等(同氏は日本迄妻君を携へて來た從軍記者の一人であつた)便乘の都合で特に桑港出帆の汽船を三日間延ばさして米國を踏み出す時から既に莫大な金を拋つた人だ、日本へ來てからも匆々大袈裟な旅仕度で從軍の途に上つた、

されど某檢閱將校から聞く所に依れば、戰況の通信は丸で滅茶で方角違いや、見當違いは此先生の特色であつたと大笑して居た、文章は一度も見たものはないが、其通譯から聞くに能文の方でもないさうだ、

兎に角紐育ヘラルドなるものが聊も親露派の新聞だと云ふので誰れも氏に對して好い顏をしなかつた樣であつたが、鳳凰城滯陣中、社からの電報が來たと云つて歸國して仕舞つた、

○ロイテル電通の コリンス氏

米國の素封家のお坊ッチャンだと云ふ、年の若い、從軍は初めてなさうな、是迄北京のロイテル通信員であつたが、日露開戰と同時に我第一軍に從軍して最後迄殘つて居るのは此人一人だ、至つて寡言なヤンキー種には珍らしい男、ウイスキーは隨分吞むが他の記者連の樣に醉ふて高談放論を遣ると云ふ事もない、それに純粹の亞米利加主義で自他平等だ、韓人だから日本人だからと區別をしない、先生の周圍に在る者は皆朋友だ、氏が携帶して居た望遠鏡は頗る精巧なもので觀戰するには以て來いだ、そこで、人の惡い或通譯の如きは氏が酒を飲めば必ず眠るの癖あるを知つて激戰となると、ウイスキーをウント飲まして熟睡中に望遠鏡を每々拜借したものだ、

○セントラル、ニユースの
カートン氏

英國の騎兵大尉で、英杜戰爭に從軍したといふ男、恐ろしい意地の惡い、狡猾な人で、そして米國人が大嫌い、二言目にはヤンキーが惡いから斯んな事になるのだといふ、檢閲の八ヶ間敷のも米國記者が下らぬ爭を言つたり、馬鹿氣た事を書くからだと、莽りに米國記者を攻撃する、デウインデー氏とは何度口論したか知れぬ位であつた、

乘馬は氏が自慢の一であつたが、中々巧みなもの、一日其愛馬が荒れ出して廻ても手におへなくなつた、疳癪持の氏は眞赤になつて怒り出し直ちに短銃で打殺すと猛り狂ふて居る所、我騎兵が遣つて來て、之れ程の馬を殺すとは惜いもの、殺す位なら私に賜はれと乞ふ、たすると先生眞面目で何程に買つて呉れる? そして馬も命を助かつた、

○紐育ジヤーナルの
ロンドン氏

義州で或日本人と大格闘をして名高くなつた先生、米國では一寸聞えた小説家、されど何しろ根が帆前船の水夫と來て居るから溜らない、ベランメー肌で品位も人格もない方だ、

而し年が若い丈に頗る快活で、誰に向つても遠慮なく而白い話をして笑はせる、そして頗る氣輕な人であつたから非常に非難の聲が高かつたにも拘らず僕等は親密な交際をした、文章は巧みであつたか、何しろ之が從軍の皮切り丈に軍事的智識は皆無と云つても好い位それで通信の中にも清韓國の旅行記の樣な風俗や人情抔を詳記して(巧に)余り戰の事抔は書かぬと云ふ風であつたから自然と社の受でも惡るくなつたものか、直きに本國から呼歸へされて玆に物議の種が絶へた、

以上列記した外に獨逸の軍事通信員でガツドベルヒ、及び米國のヘーアの兩氏も居たか前者は鴨綠江開戰の前二日に義州へ着し、戰後三日間計り從軍僅かに五六日で病氣に罹つて歸國したから何んな人であつたか能くは知らぬ、

後者は寫眞師で名高い人ださうなが、只人の好い翁さんだと云ふに止めて玆に擱筆する事にした、

附記、僕今回海外へ旅行するに就き其前に凡て書て仕舞へとの嚴命に急ぎに急いで斯くは呆氣なきものになつて仕舞つたが、それでも下らぬ事をクド〳〵書くよりはと獨り合點で先は如斯、



朝鮮に對する日本人の職分

島田三郎

『新人』

等しき我同胞なり、而かも一は日本國家を形成し優に世界に雄視するに反し、何が故に他は今日の亡狀亂雜を極むるか。朝鮮が初めより衰亂の國に非りし事は既に述べぬ。文祿征韓の際秀吉が工藝品と同時に夥多の工人を輸入せし著名の事蹟を追懷すれば古代文明の餘勢猶當時に及びたりしを知る。然らば朝鮮人の墮落は實に近代の事なりと云はざるを得ず。予輩其衰亡の原因を探りて二を得たり。曰く地理上の影響曰く歷史上の影響即ち是れ。

朝鮮の地勢を見よ。西に大陸支那あり。東に慓悍日本あり。朝鮮半島は其間に介在して遂に大陸にも事へざるべからず日本にも事へざるべからざる自然の運命となれり。今日彼等の事大卑屈の陋習は固より固有の性質に非ず、日本の今日あるは島國てふ地勢の然らしむる所なるが如く、朝鮮の今日を致せる亦地勢の力與りて最も大なりと云ふべき也。地の利を占めたる吾人は謹んで天與の恩に感激すると同時に、また朝鮮の不幸に無限の同情を傾くるの態度なかるべけんや。

歷史上の不幸に至りては更に甚しき者あり。例へば夫の文祿征韓の役の如き兵燹の慘禍を以て如何に八道の風物を荒涼たらしめしぞ。況んや當時の軍隊は今日の如く嚴く規律ありしものに非りしをや。而かも其數度の侵入は皆是れ日本人の所業なりとすれば、朝鮮敗亂の責は半ば吾人祖先の上に歸すと云はざるを得ず。然れども朝鮮をして零落今日の甚しきに至らしめたるは寧ろ主として內部の原因に基く。何ぞや、他なし、施政方針の不善是也。吾人試に朝鮮人に財產の多少を質さん乎。彼等は必ず答て「無し」と云はん。蓋し財產無きに非ず。只暴君汚吏の掠奪を免れんが爲めに之を蔽はんと欲するのみ。「汝金ありや」の問は今や彼等に取りて一種畏怖を促すの聲たり。而して此暴君汚吏の虐政は更に人民をして多く勞して多く功果を收めんとするの熱心を殺ぎ、因襲の久しき遂に牢として拔くべからず移すべからざる今日の懶惰を來すに至りぬ。ア、是れ皆數百年來の慘政の結果に非ずや。かの朝鮮今日の運命を以て彼等の天性に歸するが如きは啻に冷酷の譏を免れざるのみならず又明白に事實を誤れるの言たり。

境遇に依りて彼等の性格の著しく變易せしの事例は亦今日南韓北韓の人民の日本人に對する態度の異同あるに於て之を見る。思ふに日本人は固より彼の先天的怨敵に非ず。然るに釜山京城の間南韓一帶の人心おしなべて大に日本人を嫌斥するの傾向あるは近くは文祿時代以來屢々日本人の橫暴抑壓に苦みしを以てなり。遠き北韓一帶の人心が日本と締交來往せしことあるに非して、却て親しく我を迎ふる所以のもの一見怪むべきに似て實は却て事理の當然なり。そは日本人の始めて漸く北韓に入りし

は日清戰爭以後のことに屬し、其軍隊の規律整然たるは到底昔日と同一の論にあらざるのみならず、外國人の指笑を憚りて吾人の行動に一層の愼重を加へしを以て也。然らば日本人に對する韓人好惡の情は其由つて起る處たゞ日本人の朝鮮に對する態度如何にあるのみ、獨り朝鮮人のみを責むこと勿れ。日本人たるもの豈亦深く自省せざるべけんや。

今の青年は戰爭に冷憺なるか

〔日本人〕

（第五）青年は戰爭に冷憺なりと云ふも、其の冷淡の現象は何の邊にか存する、青年は實際經歷少くして、國事に痛痒を感ずるの淺きも、一たび其の努力を要すべき場合によりては、必ずや渾身の熱血の傾倒してこれに當らずばあらず、而して其の血氣の盛んなる丈け、其の非難は一層劇甚なるを見ん、唯だかゝる場合の少きを憾むのみ。現に戰場に馳驅しつゝある、兵士たり人夫たるは何人なるか、其の大部分は殆んど青年ならずや、其の赤誠よく職分を盡して怠まらず、國家の爲めに何時にても生を拋たんとする、眞に感泣に値すべきものなり。其の已に塹壕に埋まるもの幾萬人、現に學校に學籍を有するものも、士官となり、兵士となりて、みな相應に働きつゝあるを見れば、一般の青年を此地に措く、まだ其現象の斯の如きあらんは、然るを信ぜざらんと欲するも得ざる所。會々冷憺なりとして觀らるゝは、單に其の內地に在りて別に戰爭の爲めに態度を變ぜざるに因るとせば、事は取立てゝ云ふべきにもあらず。然れども實際冷憺なるが如く見ゆるは、主として或る一種の文學者が故さらに吹聽するところ、即ち國家に縛せらるゝを小なりとし、其の範圍以外に逸脫するを以て豪的なりとするの少しく流行したるが爲めならずや。一時珍らしき感想を世人に與へ、兎や角噂せられたるも、畸形兒の珍らしがらるゝと同じく、大勢に何の影響する所あらず、一部青年の口に籍れるに過ぎざるか、或は青年の多數を代表するかは、殆んど一考をも値せじ、畢竟するに青年の軍事に冷憺なるを云ふは、幾分か心を文學に注ぐものゝ言、然らずしてさる感想を懷くものありや、青年の父兄たるもの亦た果して茲に疑ふ所ありや、吾人は思ふ、却てかゝる跡ありといふを聞きて其の何事たるかを解し能はざるの多からんことを。青年の軍事に冷憺なりとの言は、一部の文學者に對する批評と認めて可なるが如し、青年の事は一端を以て論ずべからざるなり。

所謂家庭物

〔天鼓〕

家庭は女子の世界也、而れども男子の家庭は世界にあるべし、家庭を其生命とせざる女子が其本分とする所を誤れるが如く、世界を其生命とせざる男子は、亦其本事を失へる也、家庭を生命とせる女子は又戀愛を生命とす、固より纏綿の情緒あるべし、世界を生命とする男子は須らく功名を生命とすべし、即ち不羈の意氣なかるべからず、家庭を中心とする女兒は保守なるべし、其眼は毎に現地を離る可らず、世界を中心とする男兒は進取なるべし、其眼は毎に前途に穿たざる可らず、女兒は向下也、地に着く可し、男兒は向上也、天に嚮ふべし、太極兩儀を判つ、陰陽各分とする所あるなり、人に兩性あり、男女各能とする所ある也、剛と柔と各其能とする所を盡して、始めて諧和ある也、始めて和合ある也、男子の剛、女子の柔、是れ自然也、本然也、心理的に然り、生理的に然り、女兒は消極也、受動也、男兒は積極也、他動也、女兒は終に

求心的たるべし、男兒は飽まで遠心的たらざる可らず、女兒が求心的に家庭に繋かるは即ち男兒が遠心的に世界に馳騁するを得る所以也、女兒が内に守るは、男兒が外に戰ふを得る所以也、故に女兒は常に家庭の主たるに甘んずべし、内を守つて家庭の慰安たるべし、男兒は世界の男士たるに努めざる可らず、世界と戰づて世界の瞻仰たるべし、此くの如くにして相扶け相濟ふて、乃ち世界に進歩あり人類に發達あり、故に女兒としては料理を說くべし、育兒を說くべし、家庭を整ふるは其任也、而かも男兒として家庭の瑣末に腐心し、巾幗の爲に齷齪するが如きは、男子としての活躍の意氣衰きたる也、生動の光彩褪たる也、自尊の氣象なく自恃の氣魄なきを表する者也、男兒として女兒に媚ふる也女兒に阿れる也、男兒としての自殺也、降伏（サレンダー）なり、服從也、此くの如き變生男子の徒らに多きは、世界進歩の上より見、將た又人道の上より見て甚だ慶事に非ず、小說にも、演劇にも、凡て社會の風が家庭なる名に傾倒するの流行は、女子の漸く其社會上の勢力を加へ來りたるものなりといはいへ、其裏面に於て男子らしからざる男子、女らしき變生男子が漸く其數を增加し來れる者あるの兆也、男子に剛健の氣象失せ、丈夫的氣魄失せ、獨立の精神失せたるの兆也、男子が其性を屈して女性の嗜好に媚ぶるは、淫慾のために其奴隷たるを甘んずるに由るものにして、即ち浮靡の風浸漸せるの兆也、今の所謂家庭小說なる者は二本棒小說なり、家庭劇なる者はデレ劇也、所謂テヨダワ的作物の青年の間に歡迎せらるゝは、即ち青年に大理想なく大永圖なく大望なく覇心なきを示す者也、菫と星と血と戀と、噫、是れ現代青年の懷裡に往來する唯一の希望憧憬也、所謂家庭物の全盛ある所以也、嘆す可き哉。

老成人と青年執權者と辯護士

【時代思潮】

何れの國、何れの世にありても老人は保守的にして、壯者は進取的、權柄を握れる者は保守的にして冷刻の風を帶び、辯護の側に立てる者は進取的にして同情に富む。ソクラテースが清新の敎に歸依したるはアテナイの青年にして、その人を告發し宣告し死刑に處したるは市の有權者なり。釋迦に歸依して四姓平等の恩に浴したるは武士農商の青年にして、之に迫害を加へたるは僧侶たる婆羅門族なり。キリストの信徒は平民にして、之を殺したるは舊の徒たるサドカイ等なり。明治維新の元動力は處士書生にして、當年の書生も執權者となるに及びては却て下民に同情せず、閥族の利害の爲に動くの人となれり。

古より、在廷の官吏、判官僧侶、敎員は常に保守にして下民や新進の情を解せず、此に反して上下の間に立てその情を疏通する職を執れる辯護士、新聞記者は進取の氣象に富み、一般の幸福に留念す。佛國革命の時に當りて辯護士がその同情を人民に注ぎたる、近くはロシヤの內亂に辯護士が人民の爲に盡したるが如きその適例にして、現今我國の情狀に照すも、執權者と辯護士との對照は社會の一活劇として見るべし。

今や老成の人々は青年の心情を解せず、徒に彼等の思操を叱責し、彼等の行動を非難す。敎員は生徒に對して常に彼等は生意氣なりとの惑を抱き、特に青年の女子はその家庭にありても學校にありても常に此の如き感情の中に遇せらる。社會の上層執權者と、一般人民との間には辯護士のあるあり、彼等の中には人民の金を目的とし、法律を盾として私利を營む者少なきにあらざるも、その而も一部には眞に辯護士として人民の味方たる者なきにあらず。然るに現今の青年は未だ此の如き辯護士を有せ

ざるにあらずや。教員は彼等の敵の如く、社會は彼等の繼母の如く、而してたま〳〵命を宗教に托せんとせば學校は又往々にして之が妨害を加へんとす。我等は現代靑年の爲にその不幸を悲むと共に、又彼等がこの難關に處して能く明治靑年の意氣を發揚せん事を祈り而してこの意氣は一に信仰の賜なるを警告せざるを得ず。

百千載の一遇

『朝日新聞』

平和の徵候は見えざるなり。吾人は我倫敦特電の言ふ所を以て確實と爲す。たとひ露國が和を乞ひ來るも、其誠意悔悟の證を得ざる限り、第一日本が休戰を許さず。

然るに吾人の見る所を以てすれば、奉天大敗衂の後、露國をして更に阻喪せしめたる可き一箇の事實あり。佛國人の對露態度是なり。露佛同盟は未だ弛廢に至らずといへども、奉天大敗衂に對する佛國諸新聞の論評記載の如きもの有りたるに因り、露廷の感情は爲に害せられざるを得ざるに際し、今又佛國銀行家は露國の巴里募債を拒絕したり。爲んぞ更に大に露廷の感情を害せざるを得んや。或は露廷は日本との戰爭繼續可否を決するに先だち、佛國との同盟繼續可否を決せんと欲する迄に憤りたらん。吾人は新く想像せざるを得ざるなり。何となれば則ち佛國人最近の對露言動は、明かに露廷主戰の意思に反對し、きわどき處にて之を覇勒し、以て自己の意思に付從せしめんとする者たるのみならず、更に歐洲の最强最大と稱號したる露國の兵力に疑念を挿み、露國人の自負自尊に大なる侮辱を加へたればなり。蓋し露佛同盟は攻守同盟に外ならず。露國が佛國に依賴する所は、專ら其財力に在りとするも、佛國が露國に大なる起債を許しつゝ其國民の財嚢を絞りて猶且其同盟を支持したるは、固より歐北列國の均衡上、大に露國の兵力に依賴する所あるを以てなり。然るに今や露國の兵力の信賴するに足らざることを知り、之を唇端に漏らすことロオロル紙上のクレマンソウ氏の如くなるに至りては(氏は今や一元老院議員に過ずして其勢力微なりと云へども而も其言論は猶引きて佛國人の意思の一例となすに足る)、露廷は必ず憤恚せざる能はず。況んや此際銀行家の募債拒絕あるに於てをや。露佛同盟の形體は猶は在りといへども、其の情誼は即ち或は既に亡し。佛國人固より其言動の不穩必ず露廷を怒らすことを知る。しかも既に一月二十二日の露都の虐殺に仰天し滿洲の今度の大敗衂に落膽し、いよ〳〵露廷の命運の敗亡に瀕するを見ては、もはや露廷の怒りを冒しても猶有効の手段を以て戰爭繼續を諫止せざる能はず。是實に自國の經濟的命運を維持するが爲め必要に出づ。露廷たとひ其の敗亡を意とせずして、焦土となりても日本と爭はんと欲する有るも、佛國は即ち露廷を愛惜して之を救ふの道を盡さゞる能はず。佛國人の苦衷亦聊か察す可し。露廷は未だバルチック艦を召還せず。しかも佛國人は既に久しき以前より召還〳〵と稱して、其事實たるべきを祈るに似たり。露廷は大敗衂後忽ち例の血眼にて四十萬の大增援軍編制を揚言す。しかも佛國人は露廷の戰爭繼續の意思未だ確ならずと稱して、其軍費公債應募を見合す。恰も親切にして實意ある女房が兇惡無賴の亭主を暗護するにも似たりけり。此親切は果して露國が戰爭を繼續する期間を通じて繼續す可きや否や。同盟繼續の可否論は、今度は或は又佛國議院に於ても問題となる可し。

然るに此際露廷に於ては或は少し位は悔悟するやも知ず。いかに佛國人の言動を憤りても、自家の利害に顧みれば、同盟の離婚は固より難し。戰爭を繼續せんが爲めには巳むを得ず矢張り佛國と同盟を繼續し、以て

佛國人の財嚢に頼らざる可らず。此勘定は無謀の露廷も決して忘るゝこと無かる可きが、さて其女房たる佛國人が此場合に於ける大賭博の資本を出すことを拒みて、事實的に其暴行を諫止するに當り、兇惡無賴の大博徒は、たとひ眞實悔悟に至らざるも、沮喪は必ず免れず。而して更に滿洲南部其三軍の大敗衂に關する詳細明悉の報告を其の總帥より受取るに至らば、或ひは又更らに沮喪の程度を強む可し。昨今の瞬間に於ける露廷の心意上の變化的動機は、吾人日本國民に於て長時深覗するを要す。しかも我軍事的行動は、少しも輕鬆なる可からざるなり。實に今日は百千載の一遇、此機會に至りては思ひ切つて大膽に、思ひ切つて久遠に未來の東洋和局の建築材料の取採に關し、有らん限りの速力を以て、有らん限りの經略を行ふ可し。時機一たび去れば亦捉ふ可からず。滿洲に於ける敵の主力は十の六七までも殲滅に歸す。皇師の向ふ所、草木皆偃す。草木皆偃して後、我戈當に徐に偃すべし。天職の日本に命ずる所は是。

奉天占領の經濟的價値

『讀賣新聞』

我勇敢なる滿洲軍が奉天の要地を畧取したる軍事上の價値は固より重大なるものあるべし、然れども亦之と同時に經濟上の重大なる價値を見ざるべからず、我軍が滿洲の貨物を呑吐する唯一の口として開えたる營口を占領したるは既に昨年の七月に在りしも、爾來未だ我滿洲貿易の著しく進捗したるを聞かず、是生產地方が戰雲に封鎖せられて、一方には生產の力を減じ、他方には購買の力を殺ぎたるに由るの外、奉天の要地が猶ほ敵の手中に存して、貨物運輸の途を杜塞したるに由ること太だ大なり。

奉天は淸廷發祥の地なると共に實に滿洲の首府にして、東三省一帶の貨物は一旦此處に集中し、更に小網に積まれて遼河を下り、營口に至りて始めて四散するものなり、其需要に於ても亦然り、一度營口に來りて後遼河を溯り、奉天に至りて各處に分配せらる、露國が曾てダルニーを保護し、東淸鐵道に藉りて貨物の輸送に焦慮したるも、遂に遼河の舟路に勝つこと能はざりしものは他なし、陸運の運搬力は到底水運に及ばずして且運賃の低廉ならざるものあればなり、而も營口のみ我手に落ちて未だ奉天の敵手に存する間は、東三省一帶の貨物空しく奉天に阻止せられて、一歩も遼河を下ること能はざりしもの、今より以往は途開け、便通じ、茲に依りて小網の遼河を上下するもの舳艫相啣まん、看來れば奉天畧取の經濟的價値亦大ならずや。

是に於てか我儕は實業家の此好機を逸せずして奮發せんことを望まざるを得ず、滿洲の地戰雲に鎖さるゝといふも其一部に過ぎずして、未だ全く生產、購買の力を絕つに至らず、況んや遼西の中立地は依然として平和を保持するに於てをや、久しく道途を杜塞せられて、輸出入共に廢絕に垂んとしたる此地方が、俄に物資の需要供給を激增すべきは必ずしも智者を待て後に知らざるなり、此機に乘じて速に我國產の販路を擴張するは、實に我商工業家の焦眉の急と謂はざるべからず、由來利を見るに敏き歐米の實業者は、此の際先を爭ふて滿洲の經營に力むべし、若し我邦の商工業家にして一着を歐米の實業者に輸するが如きことあらば、獨り自家の不利益、不面目なるのみならず、折角戰勝の効も其一半を舉けて之を烏有に歸する結果を來さん。

滿洲貿易の權を吾が商工業家の手に收むるは、自らを利益するの外、別に大に國家を利益するものあり、聞く我軍用手票は占領區域の擴大なる

に隨て、其發行額を增加するも、近來其信用太だ強固ならず、太甚しきは正銀に對して二割以上の打歩を以て引換らるゝ地方ありと、今若し我邦の貨物を輸入せば、軍用手票を手にせる支那人は、之を以て代價の支拂に充つることを競ふべし、果して然らば其手票は再び我に還り來りて我邦は遂に正銀を支出せずして濟むべく、而して手票の信用は自ら回復せられんなり、戰局の前途遼遠にして國費を要すること逆睹し難き今日に方りて、軍票の圓滑に流通するを計るは蓋し急務中の急務なり、現に角卒天晷取の功を全ふするは、繋りて實業家の双肩に存する責務たることを知るを要す。

在外公債相場の騰貴

『時事新報』

倫敦市場に於ける我六分、五分利付幷に軍事公債の相場は先頃來額面以上に騰貴し從來最も不況なりし四分利付公債も八十七、八磅內外を往來し倫敦巴里兩市場に於ける同利率の露國公債の相場と相違なきに至れり或は之と同時にコンソル公債、印度公債等の相場も騰貴したるより考ふるときは此程の英蘭銀行割引歩合の引下以來金融市場一般に緩慢を告げたるが如き其一原因には相違なけれども騰貴の程度が我國の公債に著しきに就ては之を特殊の原因に歸せざるを得ず即ち旅順開城以來戰局は一瀉千里の勢を以て進行し着々我に勝利を收めたる其一方に外國人が當初最も疑惧の念を懷きたる我財政の基礎も甚だ鞏固にして一年以上大戰爭の費用を支辨しながら餘力の豐富なる事實を現はしたるが爲めに大に外國資本家の信用を增進し自然公債を買進ましむるものにして我財政の眞價漸く外國に了解せられんとするは我輩の滿足する所なれども之と同時に次回の外債發行に就て充分に財政當局者の注意を望まざるを得ず第一回幷に第二回の外債は何れも六分擔保付にして殊に第二回は第一回よりも發行價格を引下げたる關係より第三回は如何なる不利益の條件の下に發行せらるゝや世人の掛念したる所なりしに今や倫敦市場の景況一變したること以上の如くなりとすれば我財政の信用程度增進したるだけ今後の發行條件は必ず我國に利益あるものならざる可からず當局者は如何なる條件を以て適當と考ふるや之を知る能はざれども我輩を以て見るに六分利付公債の相場が目下額面を拔くこと僅に數磅に過ぎざるは決して財政の信用に相當せるものと云ふ可からず四分利付公債の相場八十八磅なりとすれば六分利付公債は利廻より算出して時價百三十二磅まで上進す可き筈なるに實際に額面以上數磅に止まるは六分利付の公債の据置年限甚だ短く第一回外債の如き明後年四月以後は政府の都合次第何時にても元金償還の自由あるを以て今日利率の高きに乘じ額面以上の相場にて公債を買入れたるものが額面にて元金の償還を受けんには其間に損失を蒙るの恐ありと云ふ六分利付公債の相場が利率の高き割合に上進せず又其相場との間に利率に相當するだけの差を現はさゞるは此邊の事情に出づるものなりとすれば六分利付公債の時價を標準として今後の條件を定むるは當を得たりと云ふ可からず利率を將來の儘、六分とし四分利付公債と略ぼ同一の利廻を保つまで發行價格を額面以上に引上ぐる如き一策なれども公債の打歩引受は資本家の好まざる所なるを以て寧ろ利子を引下げ額面又は之に接近せる價格にて發行すること至當なる可し或は戰爭繼續して外債を發行する間に利率を動かすは困難なりとの說もあらんかなれども財政の信用著しく增進たる今日、依然法外の高利を付し然も利率の高き割合に發行價格を額面以上に引上ぐる能はざる事情ある以上は利率の引下は當然の處置なり（下略）

新刊廣告

法學士 早稻田大學講師 副島義一著

日本帝國憲法論

憲法の著書多しと雖も我國家組織の美質を遺憾なく發揮說明したるもの尠なし或は君主主權說を採り理論簡明なるも事、實際に適せず或は國家主權說を採るも其要を悉くさず此等の缺點は本書に因りて始めて之を補ふを得べし特に著者は**憲法専攻**の學者にして現今**獨逸留學**中完成せしものに係るが故に諸國の制度を比較參照するは勿論最新の學說は網羅して餘さず主權の所在、議會制度の起源、國務大臣の地位責任、條約、豫算其他領土の變更、新領土に於ける法令の效力等詳說細解實に八百餘頁我が憲法論として最も完璧と云ふを得べく苟も斯學に志すの士は勿論立憲政體の下に立つ者は宜しく一讀すべき良著なりとす

脊皮上製美本
全一冊 紙數八百頁
正價金貳圓
小包料四百匁迄

法學博士 早稻田大學講師 有賀長雄陣中著述

滿洲委任統治論

今や皇軍連勝已に北奉天を占領し露軍をして復た立つ能はざらしめんとす此時に當て滿洲の處分を豫する敢て早計たらざるべし抑**滿洲の處分**は東亞の大事にして亦世界の問題なり日露交戰の餘力を以て之を判決するにあらざれば何れの日か解決するの機あらん著者は**征露軍國際法顧問**の要職に在り其實驗と其學識とは化して本書となり滿洲の主權、外交軍政司法民政經濟、東淸鐵道の處分其他實際に起るべき重要の問題は學理と先例とに依據して之れを斷じ國民今後の覺悟に**一大教訓**を與へたるもの苟も經世の志あるの士は此の眞面目なる著者の言に聽くべきなり

洋裝金文字入美本
全一冊百六十頁
正價金五十錢
郵稅金四錢

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

御注文の節本誌廣告に依る旨御添記の御方へは精々便利取計ひ可申候

英國メレデス、タウンセンド氏原著
日本帝國大學教授博士建部水城氏序
韓國教育顧問 文學士 高橋亨氏譯

▲菊判總クロース製
▲紙數二百八十餘頁

（新刊）

亞細亞之將來

全一册
定價金七拾錢

タウンセンド氏は我が同盟國に於ける亞細亞の研究者として夙に世界に鳴れり本書は其數十年の論説を蒐輯せるものにして**西歐諸邦の東亞侵略策を痛罵して餘蘊なし東帝國國民一讀して知己の感**なきこと能はじ高橋先生大志あり去年韓國に赴任せんとして本稿を水城博士に託す蓋し亦故國のために深く慮る所あればなり

貧兒の福音

長田秋濤氏著

▲菊判總クロース美裝 紙數二百六十餘頁▼

（新刊）

貧兒の成功

全一册
定價六拾錢

祖先の餘慶に假らず恃怙の補翼に待たず赤手にして天下の偉業を成す男子快心の事何者かこれに若かんや秋濤長田先生成功せる貧兒の幼時を描きて游倖の貧兒に偉大の福音を與へんとす大志を懐いて赤貧に泣く者は先づ一たび本書を繙け一道の光明人をして思はず感憤興起せしむるものあるべし

發兌 東京 金港堂書籍株式會社

詞藻

森と野

ツルゲーネフ作
ちよいん譯

犬を連れ銃を擔うて獵に出るほど面白いことはない、春の朝まだ夜の明けやらぬ中に出立するの愉快はどんなであらう、行き〳〵と廣い草野に出る、薄暗い灰色の空にはあちらこちらに澤山の星が煌めく、濕ぽい夜明の風が時々顏を撫でる、耳を聳てれば秘密な曖昧な夜の私語が聞えて來る、暗の幕に閉ぢられた木々の梢は微に聲を發する、丁度今夢覺めた白鳥の一對が靜かに緩やかに道を横ぎる、籬の向側の花園の中には守夜者が平和に眠て居る、四隣闃として何の音もない、此處で馬車を備うて設けの座に就く、馬は直ちに驅け出す、車は高い響を起して廻り初める、寺の門を過ぎ、右手に崖を見て、溝渠を渡る、水面には一面霧がかゝつて居る、身體が寒くてぞく〳〵する、外套の襟を引張つて顏を掩ふ、やがて眠くなつて微睡する。板橋を渡る馬蹄の響と別當が鳴らす口笛の音に思はずも夢を破られる、此間に已に三哩も進んだのだ、大空の縁が少しく紅くなつて、烏は樺林の中に鳴き、雀は乾草の上に囀つて居る、空氣は爽やかになつて道路は明かに見える、天は光り、雲

は白く野は青くなつて來た、里人の小舍には木片を燃やす赤い炎も見ゆる、家の中には睡む相な人聲も聞ゆる、見る〳〵朝の氣は四方に動いて夜は方さに別れを告げて去る、金色の光線が空を射て、朝霧は山頂の雲に消えて了ふ。雲雀の歌は音樂的に聞えて、曉の風が勇ましく流れる、朝暾徐ろに紫の衣を脱いて八方に光の波を浴びせる、是に於て人の心も鳥の如く輕くなる、何を見ても新らしく、樂しく喜ばしい、眼を廻らして四方を眺むる、彼方の林の奥は村である、此方には白い寺がある、向ふの山の上には樺林がある、横手には沼がある…再び馬を驅つて前方に進む。

又更に三哩も進んだ、太陽は已に高く昇つて天空は全く明るくなつた、實に快い天氣だ、羊の一群が悠々と村から出て來る…山に登つて四方を見る、何といふよい景色だらう、蜿蜒と曲つて十哩も長い河の流は霧の中に青く見ゆる、一方には一面の青野があつて青野の行手は勾配緩やかな小山に續く、遙か遠方には鷸の鳴聲が聞ゆる、かゝる春の野邊に自由に呼吸し、自由に遊樂する愉快は實に何とも彼とも云へないのである。

夏の朝――六月の朝の夜明け時分、森の下蔭を徜徉ふ樂しさは獵人の外誰が知ることが出來やう？一歩一歩進み行く我足跡は白露を以て掩はれて居る草の上に青い印を付ける。夜一夜貯へられた溫かい香氣が突然鼻を撲つ、それは苦蓬、蕎麥、苜蓿の香氣であるらしい。遠く眺むれは樫の林が壁の如く突立つて日光に光り輝いて居る、餘り強い激しい薫香の爲めに頭がふら〳〵して眼がくらめく樣に感ずる、林の長さは果てしもない只一方の畑の大麥の黄色と蕎麥の赤色とが稍々此單調を破る、やがて車の轅る音が聞えて百姓の姿があらはれて日光余り熱くならない前に馬を木陰に置いて行く、草を刈る鎌の音は音樂的に聞ゆる、太陽は高く〳〵昇つて草の葉は全く乾く、今は眞に蒸暑くなつて來た、夫れより一時間程經過する…空は地平線に添うて黑くなつた、身體の汗を絞り取る樣な激しい暑さである、「何處か水を飮む所はないかね」、其處に居る草刈に尋る、「あ、

彼處の崖の下に井があるよ」と敎へて呉れた、蔦草を披き荊棘を潜つて崖の下に行く、成程崖の下に小さな泉がある、樫の枝は勝手氣儘に水の上に手を伸ばして居る、銀のやうな美しい水珠が黒鵞天のやうな苔の生えた泉の底から音を立てゝ登つて來る、地面に顔をつけて心任せに飲む、今は歩行のも厭になつた、幸ひ樫の木はよい日掩だ、いざこゝで一休せうか、と思うと日の色は黄ばんで來る、果て不思議な、何であらう？ 忽ち一陣の風が颯と吹き起る、雷か知ら？ 嵐か知ら？ 電がピカリと光る、さうだ嵐だ、日はまだ隱れぬが到底獵には出られぬ、嵐の雲は見る〳〵擴がる、草も藪も何も彼も暗くなつた、大變だ、實に大變だ、急がう〳〵秣小舍まで急がう、一生懸命に驅け出す、何といふ酷い雨だらう！ 何という強い電光だらう！ あ、雨滴が秣小屋の隙間を洩つて來る、はて電光が止んだなと思うともう日が照つて來る、早や嵐が過ぎたのだ、小舍から外に出る、嬉しい、實に嬉しい、あらゆる物が皆新らしく、光つて見ゆる。彼是する中にやがて夕となる、太陽は沈む、空氣は一層透明となる、遙か遠方の空には柔かな温かな光が流れて、今まで金色に輝いた野邊には桃色の霧がかゝつて見ゆる、木も、藪も、積重ねた秣も長い〳〵影を地に印する、太陽は全く見えぬ、星は輝いて天上の海に赤く震へて居る……やがて青白い光を放つ、空は次第に青くなつて地上は一段と暗くなる、今家に歸るべき時刻だ、疲れては居るが銃を掃除して急いで歩み出す、黒い藪の後の地平線が急に赤くなる、何じやらう？ 火事か知ら？ いや〳〵月が上るのだらう、さうだ月が上つて來た、右の方には里の燈火が見え初むる、あゝ終に家に着いた、窓の内には卓子も見え、蠟燭が燃えて居る、今晩餐が始まるのだ。

又時には競爭車を驅つて森に杜鵑を射るも面白い、大麥が兩側に高い壁を作つて居る細い道を進むのは已に一興である、ふさ〳〵と伸びた麥の穗が柔かに顔に觸るゝ、其花は足に着く、周圍には鶉の鳴聲が聞ゆる、馬はだくあして進む、森は寂寞として聲を潜めて居る、優婉な白楊は頭の上でさら〳〵と鳴る、樺の長く垂れた

枝は殆んど知られぬ程微かに動く、大きな樫の木は愛らしい菩提樹の側に戰士の如く立つて居る、影と光と交つて居るやうな緑の道を進んでゆく、大きな黄色な蝿が日當のよい所に寂然として動かない、死んだのかと思ふと、突然に飛び去る、蚊に似たやうな小虫が、蔭には輝き光には暗い雲に翱翔る、鳥は平和に囀つて無邪氣な愉快な聲は、谷から來る白百合の薫とよく調和を保つて居る、進み進んで一層深く森に入れば森は益々欝々として繁くなる、胸の中はいふばかりなく寂寞となる、周圍も亦寂寞にして夢見るが如くだ、然し急に風が吹き來て木の頂が一齊に波を打つ、處々には去年の落葉を貫いて長い草が生えて居る、又其中に廣い帽子を蒙つた菌も見ゆる、突然兎が驅け出す、犬は血眼になつて叫びながら後を追うて進んだ。

期は秋に入つて同じ森の美は一層増した、今や鷸は飛び初めて鷸狩の好時節となつた、然し鷸は森の中には居らぬので森の周圍を尋ねなければならぬのである。實に靜かなるは秋の日だ！、風もなく、日もなく、光なく、蔭なく、動きなく、響ない。秋の氣が酒の香の如く柔かな空中に充ちて居る、物やさしい霞が黄色な野邊を包んで居る、空は靜かに澄んで、菩提樹には金色の葉がかゝつて居る、地面は濕ほえて柔かて踏み心地がよい、人は靜かに呼吸をする、然し何となく胸か震ふ、森に添うて進み、犬を屢々顧みる、或は死んだ或は生きて居る美しい顏や、愛らしい姿が心に浮ぶ、長く／＼眠つて居たいろ／＼の感情が急激に目覺める、想像が翼を擴げて鳥の如く飛び立つ、總てのものが動き出して目に顯然と映つる。心臓は微かに皷動して激しく前方に突進する、かと思ふと又僅かに退いて記憶の帳簿を開かうとする、自分の一生の巻物は直ちに速かに目前に展開する、あらゆる過去と、あらゆる感情と、あらゆる勢力――あらゆる精靈を一身に抱く時は方さにかゝる時である、身の周圍のものは總て消え去つて了ふ、日もない、風もない、響もない。

涼しい、寧ろ寒いともいふべき秋の日――霜が降つて樺の木が夢物語にあるやうに美しく青白い空に聳えて

居る秋の日である、太陽は空に低くかゝつて夏よりも一層光はあるが熱は更にない、冷たい風が落葉を動かして我がゆく方向に誘うて行く、鵞鳥や家鴨が浮んで居る野川には鉛色の小波が絶え間なく立つて居る、遠くの方には水車が輾る音がして姿は柳の爲めに半分隱されて居る、鳩の一群は明かな空氣に翅を擴いて遊んで居る。

夏の懶いやうな日は、獵人仲間の餘り好まぬものではあるが、然し見樣によつては亦面白いものである。斯樣な日には足元から起つ鳥でさへ射殺すことは六つかしい、然し何處を見ても實に平和に、實に靜穩である、何物も皆目覺めて而かも皆默して居る、木の傍を通る、一葉なりとも動かない、靜かに默想して居るのだ、身の周圍は四方總て霧である、然し柔い風が吹いて霧が少しても動くと直ちに青藍色の空が顏を出す、其途端に金色の光線が迸つて、流れて野を射り、林を照す。やがて又元の如く一面の霧となる、此光と霧の戰爭がなか〳〵長く續いて容易に止まないのである、然し一旦勝が光の手に歸した時は如何に美しい勇ましい眺があらはるゝか、天地是れ一幅の絶景と變化する。

又時には郊外の草原に行く。十哩近くも横道を通て初めて大道へ出る。無數の荷車の列を過ぐる、道傍の居酒屋を過ぐる、一つの村より他の村へ進む、果てしなき野を横ぎる、勾配ある坂道を通る。實に長い〳〵間馬を驅る。初めて目的地に着いた、鵲は柳より柳に鼓翼する、百姓の女房共は手に長い耙を持て野原に出る、男共は糸目のすたれ上衣を着て疲れた足を引摺りながら來る、六匹の瘦馬をつけたガタ〳〵馬車も目に入る。

夫れから尚も進むと一つの村落に達する、小山の上に登つて景色を見る、何といふよい眺望だらう　無數の小山は緩やかな傾斜をなして殆んど麓から頂まで耕作されて居る、草藪だらけの洞穴が其間を蜿蜒して居る、村より村まで細い道が通じて白い寺院の屋根が見える、柳の中には細い河が流れて四つの橋が架けてある。遙か離れた所には古びた貴族の別莊も見えて得もいはれぬよい景色だ、尚も進めば村は次第に少さくなつて終に

は一本の木も見えなくなる、而して今度は限りなく廣い、人跡未だ至らざる原野に出るのである。

（A Sportsman's Sketchesより）

がまゝ

白也

○

見しがまゝ、聞きしがまゝに、思ひしがまゝをも添えて、書きつけ見ばやと思ひたつ、花散るさまを蝶とも見め、落葉の音を雨とも聞け、小雨にぬるゝ鶯をねためば、時雨に寒き鴫をあはれむたぐひ、人の情の濃きも薄きも、硯の海の淺きにくみて、水茎のあとおぼつかなくも、

○

世にをかしき事こそあれ、某とか云ふ男、近き頃縁あつて、媒人のお骨折に預り、四海波靜に漣もなきを、この男、赤いネクタイのハイカラ、萬事當世才子なるに、奈何してか男にあるまじき悋氣、若いとばかりは限らず、男と云ふ男には、女房を陰へ隱して、刎頸の友にも見せぬを、奥さんこと〳〵く悦ばず、さりとは人の前にも出られぬ、腑甲斐ない女房と思はれんも口惜しと、幾度びか夫に迫れど、どんな頼みも聞かうなれど、これのみはとて許さず、愈々客を遠ざくるに、はては堪えかねて里方へ逃げぬ、男一方ならずうろたへ、もどれと幾度びか使遣せど、頑に頭を振るにぞ奈何もならず、媒人の許へまかり出でて、實はかく〳〵の始末、手前男の口からは、近頃申にくいなれど、御足勞恐縮の仕儀ながら、そんな片意地申すなと、も一度の御骨折をと、折入つての懇望に、うち捨にもならず、ただちに行つて娘に逢ひ、親にも逢つて兎角浪風ないやうと、段々の物語、お前の心底奈何ぞと聞くに、疑つては濟まないなれど、最早あゝした事屹度すまいと、堅

い誓言ならではと云ふにぞ、某も媒人役、きつとこなたの一分は立つる覺悟、どんな誓言所望と聞くに、又してもあゝした事があらば、いつでも暇やると云ふしるしに、今から去り狀貰ひましよ、それが出來ぬとあつてはときつく云ふ、去り狀書かして元の鞘へとは、前代未聞のやうなれど、向樣の御思召もあらう事、兎に角媒人の役目、おろそかにはせまいと、ただちに引返へして扨てかく／＼、去り狀書いて給はるかと聞く、なんのそれしきの事易い話、それで女房滿足してくるゝとは珍重と、斜ならぬ恐悅、すぐ樣女に申しつけて奉書買はせ、わけて懇ろに認めた去り狀一本、再び高砂の松の相生、めでたく榮ゆるやうになつたは、近い頃の事ぞ。

○

をかしきは猶一とつ、これは舊い話、自分まだ附け紐の着物、村の祭禮に喧嘩した頃の事なれど、鬚いかめしう生した道者、何處の產とも知れぬながら、此頃村內某の許に止まり、御祈禱樣々に不思議の趣、專らの評判、如何な難病でも、ぬぐつたやうに平癒との事、段々と信者も多く、わけて某はきつい熱心、我儘ものゝ女房とて、誰知らぬはないを、ころりと反つて此頃の働きぶり、第一わしに心切で柔順になつたも、一重に道者の御陰との吹聽、茶飲み話にもこれを云ふにぞ、一角の利發者も、扨ては面白半分で、信者になつて見るのも出來、こんな手狹では奈何にもならず、追つて道場建立の議、某先づ發起の處、多分の御贊助、一圓二圓の寄附金またゝく間に積つて莫大の金、悉く道者の御德と感泣し、金子悉皆道者に預け、其翌日も例の通り、早朝に出て寄附を集め、夜分になつて歸つて見るに、女房も道者も見えぬに、奈何した事ぞと部室／＼を探すに、金子は元より、彼是と不足の品多きに、始めて驚き、地段駄ふんで憤ふれど及ばず、狂氣になつて其處此處聞きさぐるに、三里ばかりの處に居るをつきとめ、取り敢えず踏込んで談じたる處、女房欲しくば手切れの金出せと云ふ、そんな事前代未聞と思ふたなれ

ど、神妙に因果とあきらめ、若干の金子調達して、女房つれてもどりけるに、十日とたゝぬ内、又しても出奔し、今に二人の所在わからず、折角の手切れ徒らになりげれば、盜棒に追錢とぞ申しける。

○

青山の墓地を過ぎけり、時は夜の九時に近くて、頃は一月を半ば過ぎたり。徐ろに立ち上る霧靄は、薄絹の掛かるに似て、月は寒き光を放ちつ白う冴えけり、灰色に長う直なる道の、兩側に立てる瓦斯燈は、行きかう人もなきを徒らに輝きて、靜かにして動かざる石塔に明るく、常盤木と霧靄とは私やかにめぐりて、人の世と堺したれば、寂粛として悽慘の氣滿てり、其東劃の南端に當りて、新にして且つ大なる墓は、大理石もて疊みて一段と高う、太くして長き石塔の影寒くて、石鳥居の嚴めしう立てるが淋し、そを何ぞとすなはち見れば、常陸丸殉難將士の碑なり、ますら武夫が醜の仇うつにも至らで、とはに盡きざる恨みを含み、空しうみなわと消えしを忍びつ、今この寒き石碑に對す、空の星の瞬くにも涙ありや、かたみにかざす袂つめたき。

○

去年の事ぞ、白桃の花一本、庭の片隅に咲けるを見て、桃ぢやとて、一本では淋しかろとて、妹が褄からげ、緋桃一本求め來りて、並べて植えし緋桃白桃、ことしになつて妹は十八、まだその桃は蕾もかたいうち、妹は花盛り、良縁あつて嫁にゆきぬ。

○

末の妹、四つになるがあり、其鼻そとうちて、こは何と云ふものぞと聞くに、耳なりと云ふ、顏の眞中に耳やはある、鼻と云ふものぞと敎ゆるに、鼻々と幾度びかくり返す、やゝ程へて、こは何ぞと鼻を指すに、又しても耳と云ひける、をかしくもうち捨てゝ、敢て敎えず、二た月あまりして又聞きけるに、こたびは明らかに鼻と云ひけり、いつの間に習ひ覺えけん。

○

馥郁の梅が香に、蜂蜜の甘き蕊に、鬱金香の美酒に永遠醒むることなしに醉はゝ如何に、

君月の如き時我兎となつて躍り、君梅の如き時我鶯となつて囀らん、我尾花の如き時君露となつて宿り、我花の如き時君蝶となつて憩へ、

流に浮ぶ花一片、水花を携へて行くか、花水に從つて行くか。

○

人生は五十年、長いと云つても百が頂上、泣いた湖に笑つた靨、顔の容のおかめにおてこ、固よりよいとわるいはあれど、一皮むけばをんなじの髑髏、解剖室で御覽の通り、この髑髏幾個並べたとて、程がよいと思ふ者もあるまい、敢てむづかしい事云はずとも、たつた此事一とつ思ふたら、發心も解脱もならうと云ひしに、その髑髏見て居ればこそ、死ねばからうぞと思ふにつけ、せめて短かい五十年、それも三十と云へばすたりもの、後前をといつてのければ、美しいのも十四五年の間ぞ、可愛いのを可愛がらいて、奈何ならうぞと醫學生は笑ひぬ。

切つたな!

○

と叫びしは、太き男の聲なり、夜はとくに十時を過ぎて、軈て十一時に近かるべし、人通りもなくて靜かなれば、乾のかたにて、やゝ隔りたれど近く聞えぬ、何事ぞと驚きて、雨戸一枚繰るに、空いと曇りて物の色もさだかならず、何事か樣々の人の聲して、のゝしるが雨のやうに、ざわ／＼と遙かにして、唯時々明かに、口惜しいと云ふが聞えぬ、これは女の鋭き聲なりけり、それも軈てひそまりもてゆきて、はては元の靜けき夜とはなりぬる。

○

生れてよりこのかた、口惜しくて今に忘れぬ事、少しく昔物語ながら、立襟の脊廣着て、中學へ通つた時分、去る切髮の後家、無人にて淋しくもあり、あいた室もあれば世話しようとの事に、第一學校に近いが幸福、ただちに、伯父の許に參じてはかるに、

一議に及ばず、其日荷物引からげて移る、扨て何事もなく、一年も過ぎて或る日のこと、伯父の許よりわざ〳〵の使して、一寸參れとあり、取り敢えずゆくに、いと不興げにて、汝はしために懸想するなどゝは、不埒千萬の至り、學生の身としてあるまじき振舞ぞと、頭からの小言に、何の事やら一向に合點ゆかず、奈何した事にてと問ふに、そら〳〵しい口たゝくな、今朝後家殿よりの御狀、汝雇女に一方ならず懸想して、毎々見ぐるしき振舞、近頃家のとりしまりにもきつい迷惑、乾度御嗜め下されとある、これ見よとて、狀突きつけての憤り、身に覺えあらばこそとて、口惜しくて涙も止まらず、樣々に辯ずるに、御氣色少しばかり柔らげど、大方はうち解けず、ともあれすぐ樣、よそへ引移れとの事、そはこなたよりこそ懇望と、其夜のうちに移らんとすれど、行く處もなきに、荷物引きまとめて、伯父の家に來りて、よき處見當る間とて居けれど、口惜しくて夜も寢られず、腰折などに胸のくるしきを云ひもしけり、今に文庫の底に、其折の文屑殘れど、をかしくて餘人に示すべくもあらず、大方かゝる事云ひ作る人は、其行爲よからぬものぞと聞きけるが、今は切髮に霜さへ置けど、猶思ひあたる事のなきにしもあらず、總べて人の事、惡しざまに云ふまじき事ぞ。

○

我が愛する女は、最も女らしき女なり、我が好む男は、最も男らしき男なり、而して我は、最も人らしき人たらんを願ふ。

○

川口とおぼしく、後ろは水やゝにごりて瀨をなせど、あなたは大浪覆りて限りなく廣し、このにごれる水と、かの浪覆る海原との堺に、しからみのやうに海苔粗朶つづきて、八重垣の七重八重に植えられつ、其眞中に樋の口のいと大なるがありて、十歳ばかりの子其上に立てり、

今し我が乗れりし船は、樋の口の近くにありて、

覆りて、沈みゆかんとすなり、乗れりし者は、我と我友二人となり、其一人は水練にたけたれど、一人は浮び上らん術も知らざりし、

水の上に頭のみ少し出してもがけり、我は舟を失はじと、覆りたるを引きつゝ泳ぐ一人は拔手を切つて近より來りつ、沈める友を抱きて泳げり、

樋の口の上なる子は、いとど興ありげに高く笑ひつ、口惜しく腹立たしけれど、せんやうもなきまゝひたすら泳げり、しばしして樋の口の上に、一人の男、其年恰も五十ばかりなるが來て、其船横ざまにせよと敎ふ、辛うじてその如くにするに、船は安らかに走つて淺き水田に着けり、こは何と云ふ處ぞと聞くに、浪の音高くて聞えず、再び三度聲高に叫ぶと見て、眼醒めぬ

こは夢なりけり。

○

知れる男、近い頃までに、幾冊となく讀み上げた靑表紙、文箱五つにあふれて、床の間に、までならべたるを、悉く賣りしろなし、兵兒帶を角帶にして、俄かの前掛け、とても學問でめしは喰へずと、若干の太物を買入れての俄商人、何んと云ふ不量見、一とつかみ萬兩の夢は見ても、一文つゝを積む智慧は出まい、運をたのみにするやうでは、賭博したが近みちぞ、素人商人おほつかなき極みと云へば、政府でさへ煙草を賣るぞや、素人だとてと高言しけるが、暫くにして、大きなる損して、多分の借財を仕出かし、思はぬ難義をもうけぬ、總べて馴れぬ事せぬものぞとか、煙草の方は如何にあるらん。

▲登張竹風氏曰く　今度は大變失禮しました、どうも方々へ約束した處が、何れ樣へもこの通りで、いつそ約束なんか爲ない方が書けますがねえ、約束したから書けなかつたのです……とはちと矛盾な論法かな、かるが故に新聲は「出來心」の一節を拔いて、登張さんの文章は其人物の如く粗笨なり、意氣は奔放にして當る可らずと云へりけり

▲土井晩翠氏　は病氣に取りつかれて「南歐雜詠」の續篇は次號に是非々々とのこと

蜑へのねがひ

兒玉花外

礁蔭きよき蜑少女、
青淵、波に沈む間を
旅ゆく吾と語らずや、
むれて歌へる白鳥の
首向く如くをとめらよ。

つぶらの眼に何怪む、
生くにえ堪へぬ熱情の
燃ゆる炎の身を君よ
思なぎさの鳥となり
沈みて胸ぞ冷さなむ。

人の情のさだなめや、
浪風あらき世の海に
流れ漂ふそれよりか
貝採る業にたちまじり
賤が安さを得なましを。

わが戀、空の雲少女
浦をさまよふ風のみ子、
散りてかつ咲く波の花
ながめ歌ひて樂まん、
白浪、白髪かつぐまで。

世捨て、馴れにし塵衣
海人のみけしと脱ぎかへむ。
眞珠こそ包めわが袖に
愁、秘むべき、塩濡づも
袂に涙しぼるかは。

やよ蜑少女、あはれまば
たゞ折れ蘆の姿態せね、
花ぞ凋みしわが魂に
男女をいはてあれ
君し黑髮長きばかりぞ。

佛

繞石選

佛壇に朝茶の烟る餘寒かな　青龍
爐塞いで佛の花を換えにけり　同
菜の花や寺の跡なる石佛　同

蟹は耶蘇田螺は佛を修しけり　同
陽炎や石の佛に鳥の糞　五遷
佛像を堀江に投ず柳かな　同
春雨やおのが念佛眠くなる　同
賣物の煤け佛や春暮るる　同
永き日を欠伸もなさで佛かな　俳馬
廬舍那佛雨の落花に靜なり　白夢
大佛の鼻吹きぬくや春の風　句仁王
春彌生佛子暹羅より來錫す　無餘
念佛に爺媼集ふ宵の春　鳴子
夏近う佛の頭巾古びけり　同
陽炎のだら〳〵坂や石佛　石羊子
佛かく金銀泥や春の風　同
佛參の庫裡に下れば利茶かな　夕村
白梅の戸や佛門に入る人の　同
涅槃會の壁一つぱいの佛畫かな　竹香
百代の佛に事へ彼岸餅　同
畑寺の黑き佛や花大根　同
寒食や襖あくれば佛の間　蝶衣
爐の名殘もぱら佛に仕へけり　同
雁風呂の下火を消して念佛かな　同

選者吟

白梅や佛足石のひやゝかに
佛前に黄粉こぼれて草の餅
白木蓮佛師が庭の雨細き

五月分課題　神(夏季)　四月十八日限
六月分課題　豆の花　五月十八日限

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町拾壹番地の大谷正信宛の事

種蒔（蚊蠅會）

繞石選

蒔く種のをちつく程や小糠雨　白風
五戸の村畑打ち終へて麻を蒔く　同
種を蒔く男灰置く女かな　秋良
南瓜蒔く秘事習ひけり蒔て見る　無餘
珍しき種蒔くや心用ひけり　瓢々
種蒔いて縄を張りけり裏畑　夜濤
種蒔くや午砲のひゝき山に入る　松溪
一岡を皆麻蒔きぬ夏も來よ　夕村
蒔いて行く袋もるゝよ何の種　同
畑焼いて幣木の種ちらし蒔く　蝶衣
麻蒔くや出水のあとの荒畑　同
種蒔くや畑木に雀鳴き群るゝ　同
藍蒔くと千町田を打ち平らしけり　同

歌

尾上柴舟選

若山牧水

春山のさくら露ちる下かげを石ともならで行く法師かな
故郷や振分髪をくらべつゝ小草つみつゝ戀知りそめし
千鳥ともならばや人の島かげに夜な〳〵鳴かむ島千鳥とも
武藏野や筑波むらさき富士桔梗霞にあけて江戸の鐘鳴る
唄合せて花藻草刈る朝舟のふたりをめぐる春の潮かな
緋をどしに逸物たつる清水越楯をまきてははな吹雪する
雪の夜を島より島へともす灯の影うつくしみよる千鳥かな
花散らふ春山堂のおぼろ月夜古き壁繪の鬼ぬけいでむ
黒髮に潮の花散る櫻散る螺蝶とるて衣つけぬ海人
武藏野や松のこゑする杜いでゝ若草ふめば春の雲濃き

○

米野町子

燈籠に苔むすまでの佗住居初見あゆみて花むしりする
帝も王もたゞ人の世の力なり天に地にして人は人のみ
世にいまだわれいでざりし時よりと堵に一人の僧住みおはす

歌を思ひ歌をおもひて暮るゝまでなやめば空の雲もよどみぬ
朝風の入ッ手ゆすれば島ひとつあはき叫びに花すべり行く

○　　村田愛美

とこしへに醉ひて歌ひて又醉ふは詩の子が性と許しませ君
一つ二つ海士が苫屋に灯のみえて磯邊松原暗にさびゆく
そは唯にすさびのわざといひますな此世の教へ我れ歌に見る
風薫るラインの岸に別れにし人をまねびて小百合まゐらする
われ泣かば君は慰め君泣かばわれは慰めかくして世經む
これよりぞ東亞の地圖は浮からむ記せよ西暦千九百四年

○　　湖陽子

易の書に燕賀する春かぜにおきなト者の髯やはらかき
花咲きぬあや雲わきぬ春は來ぬかくて我が世は又あらたなり
見つむれば綸のごとかすむ野のはてをやゝに見えくる小家小柳
老の目に涙たゝへてのたまひし酒よその悔あゝ今知りぬ
ひた〳〵と涙やはらかき春の磯寄居蟲はいでて小海老ははぬる

○　　坂田夕星

才に泣くわれも昔の歌反古にわすれて今をほゝゑまれぬる
胸に手をそとおさへつゝ若き少女密にとひぬこはこは罪か
春ごとに神のゆるしの露うけて甦り行く野の名なし草
おほ地をゆるがせて見むさらば神よ我を此地の外に立たしめよ
君に我れはわれは君にと戀のほのほ高きがほどを爭ふ二人

○　　中村猪通雄

このあした萬象力ある野に立ちて我れと我歌弱きに泣きぬ
月いらば駒乘りいてむ斥候のしばしを友と歌に興ずる
高き〳〵理想の君がみ歌謳して仰ぐ大空光に滿ちぬ

○（「銀鈴」を讀みて）　　河田道一

小雨ふり青柳けぶる京の山やまより山に暮れの鐘なる
君を思ひひとりさまよふ嵯野や花の香夢を憧がれしむる
若草や奈良は霞の杉木立小鹿むれ行くうるはしの春

○　　高林柳子

菩提樹の葉ごしに月のかげあびてふける默思に何得給ひし
樂によき獨乙の都美のみやこ酒のみやこに君ふみよます
飛ぶゆびに沉珠くだくる樂の手や神のみ聲と胸に泌入る

○　　若麻績長風

罪の手をかつては我れも頬にあてゝ花の小徑を思ひなかりき

（出征の友に）

行け男の子汝が祖國は三千年神の建てたる歷史ある國ぞ
秋風に白駒高ういななくよ露の香みつる北佐久のはら

○　　木下支山

興ありと兒の高笑ふ夜なるらし荒海こえて疾風吹き吹く
響ふれば猛者の最後か夕波に黄金をちらす島のおごり日
事なりて老養はゞ興あらむ根岸白濱うたによきさと

○　　大福伏

能果てゝ衣裳をたゝむ花かゞり脇師若うて二十にみたぬ
王といへどあゝ三尺の土佐給屏風かげに傲らふ小さき詩國

○　　久保田桂湖

なき人のみ靈こふるは西の空に消えにし雲の彩追ふがごと
人の子の悟り濟しといふな君悶のやみをいてしひととき

○　　東滸

今日もまた野の夫よりの文使と床のすみれに胡蝶舞ひきぬ

○乳母が家の垣根をめぐる花卯つ木詩興なき子の折るにえ堪へじ　塚田叱劍

○はつ結ひの丸髷重き夕窓や風にちりくる花もはづかし　池田松峰
きらめきて森をもれくる夕づゝに獨り靜思の歌つゞるかな

○　夏野百合子
渡らむと小さき橋を危みてやなぎの糸を手にまきて見し
閑寂のあしたを深き瞑想あり松の花散る草堂のまど
若葉かげみどりをもれてゆらぐ灯のゆらぎて翳に咡く如き
あは雪の松より落つる影さして姉と閑居の窓の日ほがら
いひさして燗に羞ぢらふ妹の袂まさぐる罪なきすがた
ひんがしの國より西へ跨りて何の默示か大虹かゝる

前號正誤、春の野に靈光えたりと友はよべどわれにはあらず あらばその思ひ、緘子、亡き母の御言ときゝて森蔭の泉の聲 にあはすわが歌、桂湖、

▲歌募集

四月十八日限り、東京本郷區西片町十番地ほの部尾上柴舟宛の事

名吟餘りに多くして、とても小さき我雜誌に載せかねれど、さりとて捨てんも惜しきとて六號には組みけり、却りて此方美しきによき事してけりと編輯者喜び居れど投稿諸君は如何思はるゝやらん、されど敢て蔑みたるにはあらず



評論

平和の聲（尚早し）

紅鹿子

○堅忍持久と云ふ言葉は既に陳い、新思潮を歡迎する當代の人は、再々此言葉を使用するのを嘲けるであらう、嘲ける者は嘲るが可矣、吾人は依然として此陳い堅忍持久の言葉が、最も新らしい思潮を齎らすことを寧ろ不思議に感ずるのである。

○和に永久の和はない、戰に永久の戰はない、けれども一日でも戰の長からんよりは、一日でも平和の永からんことを希望するのは、素より云ふまでもない、吾人が干戈を執つて起つたのも、戰を短くして和を長からしめん爲である、比較的長時間の平和を望んだか

らである、しかも其比較的長時間の和を得るには、どの點まで戰つたら可いてあらうかとは、頗る注意すべき問題である、こゝに於て吾人は今日例の堅忍持久なる語を繰返さゞるを得ない

○近頃外電の傳ふるところは平和の聲である、而して吾國民は—少くとも國民の多くは—此平和の聲に隨喜して、明日にでも和を媾ずることを望んで居る、それは人の情である、拒否し難い人の情である、けれどもそれは餘りに近視眼的である、盲目的である、干戈を執つて起つた最初の目的を忘却した話である、恐ろしい考である、なさけない譯である、沙河の合戰から奉天を奪ひ鐵嶺を占領した戰局の進捗といふものは凄まじいものである、大勝利には相違ないが、前途は所謂遼遠で、大勝利の結果は甚だ心强いものでない、利したところは露の東洋艦隊の殲滅と我陸海軍の精英を天下に示したばかり、失ふところは幾萬の人の命、五億有餘の金、五億有餘の金を一ヶ年使用すれば露の東洋艦隊に倍する艦隊は造り得らるゝ、差引いて吾人は甚だしき利を得て居らぬ、賴みにするは媾和の條件である、より有利なる條件を附せんには、より大く戰ひに勝たねばならぬ

○譬へて見れば、去年の今日は種を蒔いた時、今年の今日は禾穀の漸く成長した時である、實を結ぶのは目前に見えて居る、早かれ晩かれ成熟の期は一日〳〵と近いて居る、然るに此花を開き實を結ぶの時期を待たず、平和といふ甘い言葉に欺かれて、折角成長したばかりの稻を刈り取る愚者が世にあらうか、堅忍持久の語は依然として新らしい眞理を有して居るではないか、旅順の陷落に騰貴しない證券は、平和の聲で騰貴するの現象、世はまだ近眼者を多く有して居る證據也

○露は吾人の恐るゝに足るべき國でないが、又決して侮るべきでもない、我日本軍に對抗して、頑强かくの如きは、世界中唯一のスラブあるのみ、日本軍に對してこそ意氣地はないが、而もこれ歐洲に於て最も勁き大露西亞である、彼の內政が紊亂し、財政が困難であるとするも、矢張り九尺二間的でない、たとへ此戰爭には徹頭徹尾敗北しても、支那朝鮮と同一運命に下落はせぬ、大家は大家として相變らず歐洲に雄視するに足るのである、されば捲土重來もやるかも知れぬ、再び盛り返して來ることがないとも限らぬ、と云つて彼を全滅さすといふことは寧ろ不可能である、全滅は不可能であれば、一矢でも多く痛手を蒙らしむるのは

我に安全を保つのに利益である

○聞け、廣漠たる西比利亞の平原も、豐穰なる滿洲と沿黑龍州とを有せでは、只いたづらな贅物に過ぎぬ、昨一年は日露兩國の戰鬪力を比較して世界に示した年である、今一年は日本が東洋に於る露國の權力を驅逐し、日本の有せる權力に露國の有せし權力を附け加へる時期である、次の一年は乃ち東洋の事は日本が欲するまに／＼遊ばす時期である、かくして次へ／＼と推して行け、戰局の永いだけ我に利で彼に損である、戰費が一圓多く要ればそれに高價な利子が附く、目下の忍耐は他日の平和を安全に永久にする所以である、こんな覩易い道理も知らず、平和といへる甘い言葉に耳を傾くるとは、洵に呆れたものではないか、戰爭の慘禍は戰爭を開始して後に悟つたのではない、今更仁者らしき面付で、其慘狀を說くが如きは、今日迄犧牲に供せられた軍人を無意味に殺した下手人である、吾人は功勞ある軍人の功をして今一層光輝あるものとならしめねば義理が濟まぬ

○而して明日和を媾ぜんといふ沒理漢は、下層の人民にあらずして、東京に於ても中等敎育を受けた、それ以上に多い、勿論學生等は其の最も多數を占めて居る、歎はしいことではないか、と云ふのが外でもない、統計によりて開戰以來中學生の增加は夥しいものである、一面より見れば中等敎育の旺盛で、或敎育家の如きはこれだけを見て國家多事の際と雖も、敎育の事は盛んであると悅喜して居るが、他面より見れば體裁よき徵兵忌避者の增加である、憶病風が彼等を驅つて學校の門內に逃げ込ましたのである、說き明すまでもない、彼れ等が急速な平和論者たることは、即ち憶病風の賚で、もとより國家の利害より打算した論ではないのである

○恁うした國民が多數を占むる時代を想像するに、前途頗る心細い、今日得たる赫々の偉功も、子孫の代を俟たずして消されて了ひはせぬかと案じられる、如かず今日力のあらん限り我國家の發展と安全の爲に、堅忍持久して、永遠の平和の爲めに、一層敵に痛手を負はすべしである

●●●●●● 女學校の校長

女子大學の評論紅鹿子の俎に上るや、我編輯机上に集まりつゝある投書、其數數ふべからず、（そは追て發表すべし）其中の多くは皆各種女學校々長の惡德を數ふ、衆口金を鎔かす、今にして悔い改めずんば禍やがて其身に及ばん、女學校を非難するもの、吾人のみにあらざる也

家庭ものの流行

今日最も多く賣れるものは、家庭雜誌、家庭繪はがき、家庭小說也、內容の善惡は問はず、家庭といふ肩書にて賣れる也、演劇も家庭的、學校も家庭的、遂には女義太夫も、落語家も、擧つて家庭の名を冠するに至るべし、抑も家庭とは小さき名也、狹き名也、その國家的、社會的、世界的となる迄には、さて何時の事やら知るべからず、家庭的とは惡き事にあらず、然れどもかく迄に濫用されては、誠に困つたものにあらずや

モルガンお雪何者ぞ

一時新聞の三面を賑はしたるモルガンお雪、多少小說的可笑みなきにあらず、而も彼の來るや、新聞社は態々社員を派し、爭うて之が動靜を詳報せしめ、恰も珍客の來れる如くす、吾人は何の要ありて此の如き馬鹿らしき事をなすやを知るに苦む、モルガン何者ぞ、お雪何者ぞ、一は金を以て戀を得たる痴漢、一は金の爲めに節操を破りたる醜業婦、吾人は彼等に關することを知れども、未だ彼等を歡迎すべき所以を知らざる也

文士の勢力

一日青木嗣の外務を訪ふ、子爵問ふて曰く、現今日本の文學者の名あるものは誰々ぞ、答て曰く、露伴、逍遙、ならんか。如何なる著書ありや、曰く近著には前者に「心のあと」後者に「新曲浦島」あり。我れ之を購讀すべし、今一度著者の名と著書の名を云へ、とてノートを出し、さて露件とは如何なる字ぞ、坪內逍遙とは如何にといふ、子爵には未だ此等の名を知り給はざるか、これ三歲の童兒も知れる所ならずやといふに、首をひねりて、未だ聞かず、未だ聞かず、と答ふ、予は呆然として餘りに事の意外なるに驚けり

文藝時觀

鏡花君に與ふ

(風流線を論じて當世の批評家に及ぶ)

高山絳雲

△鏡花君、僕は今こゝに一書を君に呈して、君の小說を論ずると共に、否、それはほんの副にして、重に現代の批評家に就いて、日頃からいたづらに膨るゝなる我腹を空かさうといふ考を起した、僕は昨今君の「風流線」を精讀したのである

△御存じの通り、君の小說は、近來頻りに批評家から批難されつゝある、罵倒されつゝある、妖怪談だと云ふ者があれば草双子だと云ふ者があり、讀んで了つて何等の印象を殘さぬとけなせば、無意味極まる小說だと喞つ、新聞を見ても雜誌を見ても、あつちこつちに引張り出されて居るのは君の名で、而も悉くそれが惡評である

△然るに僕は君の小説を讀むたびに、不思議に堪へぬのは批評家の言、菲才敢て小説を解し能はぬので、好評十幾版と重ねた某々の小説に隨喜することが出來ず、鏡花の小説の馱作たるに氣着くことが出來ぬのであるか、それは主觀的て分らぬ、けれども僕獨りでは君の小説(こゝには近著風流線)を以つて、敢てかまはず、東西古今、天下の絶品也と叫びたい！　君に諂するのでない、又お饗應に預からうと云ふのでもない

△僕は一切理窟は知らん、美術の定義も存じない、只君の小説を讀んで巧みだと感じ、面白い痛快だと思つた、美しい、優しい、なまめかしい、すばらしい、また恐ろしい身の毛の戰慄つ、もの淋しい凄絶の氣に打たれた、哄然として笑ふとか、本に嚙ひ付いて悲泣するといふことの外は、要するに殆んど凡ての快感を起したといつて可い、要するに天下の絶品だと感じたのである

△先づ其文章の美しいこと、巧みなこと、君ならずして誰かこの妙文字をなすものぞと思はしむる

「私は欺かれた、あの通り、」と思はざる狀していふと、フト謠が留んで、すぐに皷ばかり二挺になつて調が揃つた。

打つたり矣、一調、あはれ、天女、樂譜の風に身を任せて、月の都に行く道の、羽衣の袖のゆらぐにつれ、瓔珞の珠星に觸れて、乳房を撫づる音ならん、折からの雲のたゝずまひ、花降りかゝる氣勢して、ぱら〳〵と松葉がこぼれた。(風流線第五十七綾の皷)

これ等は風流線中取り立てゝ云ふ程最妙な句ではない、成程此だけの文章を見ても、妖怪談には恰好な書き狀である、而もたとひ事柄が妖怪談で空想でも、それを現實にあり得べきものゝ如く感ぜしむるの筆致、これたゞ者でない證據である、更らに其寫實の神に入つた處を引用すれば

力松は背後樣に、片手を高く擧げて、

「やあ引急げ、やい、急げ、」と下腹に踏張を入れて、疳走る。

左右畠の一條筋、三畝りばかり畝つて長い、森に接した畷の上、遮るものなき月の下へ前なるは影暗く、後なるは形朧に、鰭を立てゝ十八九人。續いて一團、又一團、一町措き、二町措きの其間を、ちら〳〵と二人三人が相繋いて、正に色黑く丈長き異樣の怪物、月の光と黃昏の名殘の色とに隱見して、末は遙に雲間より地平線上に降れる氣勢。

魁の同勢は、力松の聲に一動掻み、前後左右が入交つて、墨汁を礑と擲つたやう、手足の影をべた〳〵と地に印して、衝と驅けて近いた。(第十八急先鋒)

多少芝居氣の大袈裟な邊はあつたにしろ、たゞありありと讀んで行くうち眼に見えるてはないか、墨汁を礑と擲つたやう、の如き、誰れにでもは出來ない活きた形容ではないか

△其他獺之守と捨吉とが、棒と鉞とのせり合ひ、奥方盜み出しの役を承つたる多見次働きの場など、文の到らざるに於ては、あれ程快哉は呼ばしめない、特に警句の多い一事は、一々應接に遑がない、若し風流線中の妙處を拔萃しやうとするならば、僕は寧ろその妙處の餘りに多きに煩はされるであらう、曾て近松の世話物を讀んで、朱筆を執つて圏點を打つたとき、遂に一篇眞赤に染めた事がある、君の風流線に朱點を打つ、亦それと同じである

△紅葉山人が西鶴を評して、天才煥發、直に妙文字を爲すと云つた、直ちに移して僕は之れを君の上に云ふ、僕は君を學者とは思はん、寧ろ淺學の徒と云ふ、君の文は決して學問より來たとは信ぜん、即ち天才煥發の妙文字だといふ、風流線一篇、僕は之を以つて一大長篇の無韻詩だと感じた

△けれども、と批評家はいふ、君の小説に出る人物の性格が判然しない。僕物を案ずるに、或は、主人公が何れであるかゞ知り難いと共に、聊か其おそれがあるかも知れぬ、しかし、此に出す人物はかう〳〵かく〳〵の性質で、かくの如き癖を有して居る、それだからかゝる事を演るのである、と一々斷り書はしてないもの〻、自然讀んで行くうちに人物の性格が、擧動によつて、言語によつて、風采によつて解つて來るやうに思ふ、お頭工學士は物に動ぜぬ溫順な威のある人好きのする多く事々しからぬ好男子、巨山の主人も間接乍ら略ぼ性格が現はれて居る、お龍でも不二太でも巨山夫人でも、想像するに難からぬ性質を表はして居る、人相書の流行する小説界に、君の書き振りは歡迎されぬかも知れぬ、けれども性格は立派に書かれて居る、

只惜むべきは人物が殆んど同一性格てあること、なれども君いまだ神にあらず、萬能は期し難い

△無意味だ、草双子だとけなすのは、如何なることか理屈にうとい僕には解らぬが、思ふに一篇の趣向が整然と立つて居ない、始めと終りが曖昧漠糊として居る、如何なる人生の機微を描いたのか知り得られぬ、と云ふのであらう、而も僕の讀んだ風流線には閃々として種々な人生の機微な點が描かれてある、無論統一はないが、趣向はあれだけの趣向と見れば可い。別に諷刺小説てはないけれど、當世の慈善家を諷したのが、即ち風流線てあると云つても差支ない

「仁者の架した橋は頼まず、鬼の渡る路は出來た」の如き、慈善家が聞いたら、胸三寸へ釘の痛みを覺えさうな皮肉な句がある、馬之部、牛之部も小氣味の好い程痛快て、最後に大慈善家に下すところの懲罰としては

「此處にござんす、これてすよ。」と卓子の引出奥深う、づッと出して差置いたは、小形の桐の手箱てある。中は救小屋の非人控、馬之部、牛之部はいふまでもない。

巨山はく蒼なつた。

など、一篇の終結として批難の打ちやうがないと思ふ

△今時多くの小説は心理學の解釋て、人はかゝる時は如何なる心的現象を呈するとか、といふ説明が附してあるのに、君の小説にはそれがない、少しも説明書が添へてない、或は君は心理學書を讀んだことがないのかも知らん、僕は君が心理書を讀まなかつた方を賛成する、喜ぶ

△要するに僕は風流線を逸品だと稱する、缺點はある、大にある、而も其缺點を以つて、絶妙な處を消すことは出來ぬ、却つて其妙なるが故に缺點を隱すことが出來る

△話代つて當世の批評家に就いて、てある、嚴格な意味から云へば、現代我國には批評家といふものが無いかも知らぬ、僕のこゝに謂ふ所の批評家とは、批評家としての價値の有無は扨て措いて問はず、一般に文

藝の作物に對して善惡をいふ人を指す。雜誌記者新聞記者、小說家詩人、乃至新聞雜誌に投書する讀者の一部も含んで居る

△鏡花君、僕は今批評の本義を持ち出して理屈と云ふのでないが、全體批評といふものは、當つて居る居ないを問はず、批評家の感じたまゝを云ふのが批評である、若し美なるものを醜と云はうと、全く其人が然う感じたら仕方がない、自分の思ふまゝを枉げずして吐露するのが、眞正な批評てはあるまいか

△然るに、君が批評家の批難を受けやうと、賞められやうと、少しも之に耳を傾けないでも、痛痒を感じないでも可いといふのは、今の批評家は自分の思ふ存分を枉げずして吐露するのでなくて、利害の爲め、個人同士の關係の爲め、其屬する書肆との關係、其屬する派との關係、人に賴まれた義理の爲め、嫉妬、猜忌の爲め、惡く云ひたがる性癖の爲め、面白半分無責任なのもあり、人の憎しみを怖るゝもあり、かくて批評の筆をとる、なんすれど其正しきを保せんやてある、即ち眞正な批評てないからてある

△某の書店て、故人なにがしの傑作といつて僞作を出版するに就いて、なにがしの大家に序を乞うた、其大家は請に任せて、すばらしい誇張な贊辭をつらねて書店に與へた、之は批評てはない、序文である、けれども序文の意味は批評的であつた、其書の僞作て（過半は）あることは、文藝にたづさはつて居るものは知つて居る、讀んで見ても僞作であることは立に解る、然るになにがしの大家は何故に斯る序文を書いたか、若し其内情を知らなかつたとすれば、其内容を見ずに、即ち嘘を書いたのである、知つて書いたとすれば此上もない不德である、故人を傷けるものである、文學史上には其内情は傳はらず、其序文が傳はるてあらう、これ書店の爲めに默し難くて、思はぬ罪を作つたのである、而して自家の見識を下げたのである、こんな事は一例に過ぎぬ、類した事は幾らもある

△又日本人には惡癖がある、生前には口を極めて惡口を打いて、死んでから天才だとか偉いとかの稱號を

奉る、高山樗牛にしろ、正直正太夫にしろ、又は君の師なる紅葉山人にしろ、生前には隨分惡評もあつたのに、故人となれば露程も惡くは云はぬではないか、現代の人間を輕んじて、過ぎ去つた人を重んずる、一方から云へば美德であるが、一方から云へば惡德である、その基くところの心理はと云ふにてす

△嫉妬、猜忌の念が烈しいからである、現代の人間を重んじ貴めば、自然己れは其下風に立たねばならぬ、彼が偉くなるだけ己れはそれだけ肩が低くなつて來ると考へる、さればこそ、天才の出現も己の爲めには不利と見て取り、心の中では感服しながら、頭から毒矢を以つて射縮め、己を高うし、人を低うの政策をとるのである、なんと呆れた者們ならずや、己を高くせんとする積極的意氣地がなくて、人を陷れんとする消極的勇氣がある

△彼は己の友人である、同じ派である、と云つては賛辭を呈する、あれが多く賣れては己が仕へ奉る書店の不利益で、從つて己も亦影響を蒙る、と云ふ事で心ならずも嘲罵を逞うする、中には讀まずして批評に取りかゝるお方もある、畢竟するに、批判といふ程のものでない

△たま〳〵批評家らしい批評家が出ると、此人友人にも疎まれ、書店にも見離され、孤立頼るべきなき身となり果て、一生不遇轗軻で生活らさねばならぬ、齋藤綠雨でも、餘りに世渡りが上手でなうて、正直に誰の作でもかまはず思うがまゝ、感ずるがまゝを云つたので、死ぬまであの通りに憎まれた、內田魯庵、此人も一時遠慮のない批評の筆を執つたので、憎まれ役を一人で背負つて立つた姿、遂に今では批評の事は思ひ切り、と云ふ次第、これは作家の膽玉の小さいせいであるけれど、情けない世の有様ではないか、あゝ混沌たる文界のさまやとて、慨歎するのも僕一人ではあるまい

△けれども批評家の勢力といふものは恐ろしい、かゝる內幕を聞いて見れば、批評も糞もあつたものではないけれど、好く云はれるのは好く賣れる、惡く云は

れるのは比較的實行よからず、つまらぬ駄作が持囃され、天才の作が埋もれる、讀者には内幕の事情は分らぬから

△君の作の惡評ある、魂膽既に知れて居る、天才を嫉み猜むのである、惡く云はれるのは却つて其作の佳いことを證據だてる、好く云はれるのこそ怪しいのだ、僕は君が絶對に己を信じて、がや〳〵と喧しい批評家に耳を傾けず、一心に君の天職に忠實に、其天才を發輝されんことを望む、妖怪もよし、幽靈もよし、草双子も可也、東西古今獨歩の傑作を續々と出して貰ひたい、餘り批評家を罵倒すると、僕も危い目に遇ふかも知れぬ、もう中央公論の紙數五頁を費した、初めは筆の左に影があつたのが、今は右にうつッた、ぞんざいな書き流し、君を引出して嘸御迷惑、こゝに筆を擱く事にします　（三月廿三日）

三月文壇

孤村主人

◎文藝倶樂部は巖谷漣氏、生田葵山君、山岸荷葉君の名を列し、新小説は小栗風葉君、小川未明君に西村醉夢と云ふ人の名を掲げ、文藝界は江見水蔭氏生田葵山氏奴之助君、其れに齋藤素影氏の名を掲げて居る次第てある、外に太陽には北里龍堂君の夢なれやと云ふのが出て居る。僕は先づ文藝倶樂部から評して行かう。

◎巖谷小波氏のは家の鬼と題せられたものであるが、同君の作に就いては定まつた世評がある、輕妙と云ふ文字は其の作の上に捺印せられて殆ど動し難い。この作とても然うて二拾頁足らずの短篇一氣に讀んで了はれる。小兒の眼から見た家庭の波瀾の一部を描寫したもので着想は凡てないが輕妙の筆致は此處迄及んで突込み樣が足らぬ樣に思はるゝ、其れて藝術的の作品と云ふよりも寧ろ訓戒的の意が多く含まれたものとなつて了つた。そんじよそこらに能くある家庭の波瀾、我物顏に貳人曳て飛歩いて居る交際好の貴婦人は一讀するがいゝ

◎生田葵山君の獨住み。作者の作風が之て一變した樣に見られた。成程毎日新聞の湖の人が評した樣に此の作者は追想を多く描くと云つて居たが確に其の欠點がある。矛盾した性格を持つた主人公の閨子に同情が喪せられるのは僕も同感て、作者の筆致が到つて居ない。余り其の妹の性格と書分け樣として批評的に見た爲てあらう。若し作者が閨子の氣質の自分の性情を自覺して泣く所を描き出したならば或は讀者の同情を博したかも知れない。而し其れは之から次の時代の出來事、閨子の年齡て自覺の境に入る事が出來ないと作者は應へるかも知れない。文藝倶樂部にしては長篇の作物、作者は未だ年が若いんだから今後愈々奮勵するがいい。

◎山岸荷葉君の泣ぼくろ。讀んで行く中に中途幾度も止さうとしたかも知れない。要もない淺草公園て小兒との會話、一體之は何の爲めに描き出されたのてあらう。冗慢も此處迄に到つては度し難い。小兒は只失戀

した母と母の戀人を奪つた女性を引合す丈けに使はれたのに過ぎないではないか。其の文を引出して母との交情の密なるを示した心算ならば至極拙いものだ。而して父母の交情の密なるを母の戀仇に見せる樣に描いたのならば更に拙だ。七回目にまた小兒が引出されて居る。小兒は車上の人を覺えて居て、車上の人は小兒を覺えて居ない。先づよしとして之から漸く本文に入りさうな所でめでたし／＼と何の事だらう。僕は荷葉君に作家の眞心の存在を疑ふ。一夜作りと云つても之は又餘りに甚だしい、注意を乞ふ。

◎新小說所載小栗風葉君の深川女房。風葉君は或る性格の女を捕へ、其れを讀者の前に顯はし出さうと謀んだらしいが、計畫は中ばにして見事失敗したと云つていゝ。何としても今一息見方が足りない。之ては普通人丈けの見樣に過ぎぬ。もとより捕へた主人公が勝れた人格を備へて居るのでも無いのだから或は難しい注文であるかも知れないが、凡な性情ならば凡な性情としての見方はあらうと思ふ。只終りに爲さんの頬に「畜生！何云やがる！！」と怒鳴つて香爐を投付けたので少しは解る樣だが其から金之助の家へ往つてお仙と假盃を上げさす約束を結んだとは至極覺束ないもので、僕は其の晩金之助にくどかれて落こちやしまいかと危まれるんだ。愛に對して自覺のない女。義理と云ふ事を然う明白に心得て居る女とも見えないぢやないか、謐し凡作。

◎霰に霙小川未明君の作なり、此の人の作に接する事二回、製作の上に深い想像力や烈しい感情を持つて居る樣には見えないが、穩な美しい情を持つて居る事が直ぐ解る。此の篇にしても然うで小兒心の幾分を分解して、算術教師の性情をほのめかして居る。が霙の方の女教師は全く想像の霞に包まれて了つて何だか惘然として了つて居る。單に小兒の情の追憶ばかりでなく此の女教師の性格を判然たらしめたらば作品として面白かつたと思ふ。之では單に小兒が母以外の女の優味に觸れた事を平凡にかいたものに過ぎなくなつて了つた。作者が持つて居る美しい情と同に觀察力の發達に力めたら後來面白い作品が出來るだらう。

◎見えざる黑影西村醉夢君の作。作者は往時新聲社から種々な出版物を公にしたので世人から其の名を知られて居る。が其の出版物は餘り世間から尊敬を拂はれる性質のもので無かつたので、同時に其の名も格別の注意を拂はれて居なかつた。然して今僕は此の作を讀んで不尠或惑にうたれた。恐らく作者は此の作に多大の勞力と苦心とを投した事であらうが、僕が嘗て此の作者の作物を讀んだ時の感と此の作の裏面に潜んだ製作の精神とても云はうか、其れに觸れた感とが余り相違して居るので、此の苦心したらしく見える作物も同一の事情の下に作されたのでは無いかと疑はれて眞面目の批評がしたくない樣な心地がした。之は僕丈けの心地て世人の皆がさうではあるまいが之に就いても作者は出立點が大事であると思はれる。さて其の批評だ。如何にも苦心した眞摯な作であるとは知れるが、佳作とは斷じて云はれない。斯く迄主人公が其の眞心に苦しめられながら猶世に存せんとする其の終りの心の狀態が今一つ明瞭ぢやないし。其れから自分が犯した其の人が自分を戀して居ると云ふ事が解つてからも猶苦しんで居る。作者は前の苦痛と後の苦痛との間に一階段を附けなければならないのを忘れて了つて居る。最初の苦痛の煩悶はあれでいゝとして後の煩悶は何としてもあの書樣では間違つて居る。事實に於て既に戀うだのに其の主人公靜浦保君の性格には前後矛盾して居る處もあるし、明瞭とせぬ所が多々ある。失禮だが之は若い作者が何かなしに今迄知つて居る智識を此處にならべ立てた樣な感もする。其れから葦子の性格とても極めて朦朧たるもので、其の狂者になるのは失戀の苦痛か、眞人に對しての罪に惱むだか所因が解らぬ。若し所因が前者

であるならば、單に結婚であつたと云ふ事をほのめかしたのみでは否けない、今少し其の境遇、幷びに心的狀態を讀者に知らせなければならないぢやないか。上野で逢つた所など極めて飽氣なく、其れから全體が至極感情的のものでなければならないのに、何處が稜々として居る。工夫せなくちやならない。兎に角作者には初陣と云つていゝ作だ、不結果だと云つて氣を落さずに勉勵するがいゝ。

◎太陽の北里龍堂君の夢なれや、極めて感服しない作である。之を何處からの新聞批評で心理小說だなんと云つて居つた。何處にそん面影が見えて居るだらう。至極表つらの作で、文章に骨を折つたと云ふ外、格別の處に見當らない。最後の壜など何としても拾年前の靑方だ。

◎地獄の曲平木白星君の歌劇だ。同じく太陽に掲載されたものとて之は一斷片であるさうだが、之丈では只强い言葉の幷べ立てた樣な氣がして幽冥界の深玄な趣は一向に覗はれなかつた。三節の七の句

蘇枋すかるゝ春、君いかに
雞頭花悼む秋を君いかに
思ひは同じ君さぞな

餘り感服した句ぢやない。殊に四の節に老怪寃が出現してお七に戀のゆきたてを話すのは何となく滑稽に感じられた。六は能く調和して居る。八は全編中の最高所勝れて感ぜられたのである。とにかく世評は餘り迎へぬ容子であるが、僕とても其の句使ひの荒いのは感服しかぬるが、如何にも其の大膽な男氣に感ずるのである。白星君力め給へ。

◎同誌上に公にせられた佐々木信綱君の湖畔の一夜美くしい筆致と云ふ外、此の湖畔に於て詩人が當然得べき情趣は余りかき顯はしてないので其の題名に相應しい詩趣は得られなかつた。之よりも德田秋江君のポロチノの役。トルストイの原著である丈けに面白く讀まれた。願はくは恁云ふものは時々見せて貰らひたい。

◎文藝界に就て一言しやう。卷頭江見水蔭君の壺中の魚、作者は渦中の賊の狀况の極めて面白く、其の寸刻の時間に詩想を見たのだらうが、書方を變へたならば宜つたてあらうと思ふ。若し鏡花君がかいたなら大時代の盜賊となつて了ふだらうし、是非とも愬ふ云つた材はあのゴルキイの樣な强い筆致が欲しい。然うせれば滑稽に陷る。

◎生田葵山君の謎の女、風葉君の深川女房と同一徹或る女の性格を描かうとしたもの、自然の筆致に力めたもので、餘り感服した作ではない。奴之助君のは見ず、終りの齋藤素影君のホウソルンの譯何と云ふ拙い譯だらう。而かも此の不老泉は德田秋聲君も譯し、其の他二人ばかり譯した中で一番拙い譯を今頃又圖々しく掲載して居る。編輯の神谷君しつかり賴みますぜ。

◎白百合には神無月の一夜、と題して薄田泣菫君の詩が掲載されて居る。今迄に餘り見當らぬ幽艶な詩が見えて來て、更に一段の進歩と見られる。僕は二節の

あくがれ心、夜な夜な
涙もろとも　祈れど

以下の句を愛唱した。

◎兒玉花外の秋の夜、同じ雜誌に載つて居る。其の人を想ふて此の詩を吟ずるとある悲みの源泉に探り當てる樣な氣がする。今の詩界に個人として此の人程同情に富んだ人はあるまい。句は平凡だが

鳴る糸車、糸に涙を、繰りて歌ふ。

此の人の眞質の際だ。

漫評



當世美術家氣質

八面生

水野年方

先生は左官屋の子にして、幼より美貌の譽あり。嘗て炎天に曝されて土をこねてゐる時、其の父これを見て慨歎して曰はく「おれの子には惜しいものだ、鳶が鷹を生んだとはこの事だらう。何時までもこんな下等な仕事をさせるは可愛いさうだ」と。それより芳年氏を訪ひて仔細を語りて、弟子入させた。所が芳年先生當時の繪師文人に有勝の放逸で、連日連夜遊里に入りびたり、殆んど子弟を敎うることはない。年方氏は何時も留守番のみ命ぜられ、月末には酒屋八百屋の催促の申譯に困しめられてゐた。折々はあまりの苦しさに自分の家から小使錢を貰つて仕拂うことがあつたので、一度實父が腹を立てゝ、家に連れて歸たが、今更外の職業にも用ひられぬので、再び入門して、遂に今日をなすに至つたのである。先生は歴史風俗に興味を有し、其の參考品は多く集めてゐるさうな。性質は溫和にして美術院の他の人々に比べると、新機軸を出さうとか、世間を驚かさうとかいふ覇氣がない。吾人は先生の平穩無事の畫家たるを喜ぶ。

和田英作

白馬會の秀才、早くより前途有望を以て目され、自分の抱負も大にして、功名心も同輩間で最も盛なるが、研究心も強く、毎會の展覽會に注意を引く作品を出すは稱すべし。岡田中澤など同會の諸先生とは異なり、如才なく交際に巧みなり。黑田先生に取入る手段も上手だとの噂あり、或一部の不遇者には嫌はれてゐるが、吾人は先生の各方面に活動し、其の才を縱橫に振ふ目醒ましさを喜ぶ。先生は文章を以ても自己の意見抱負を發表せんとする程にて、今月より發行の白馬會の機關雜誌には先生の大意見が表はれるだらうと思はれる。

中澤弘光

概して日本畫家は職人根性を脱せず藝人肌を離れぬ

が、西洋畫家には藝術家らしい者が多い。中澤先生の如きは、全く世間氣のない繪畫に自分を打込んだ人にて、日常の行動も昔の美術家はかうてあたかと思はれるやうだ。嘗て讀賣新聞に入社した時、乞食のやうな汚い衣服を着けて來たので、編輯長も流石に眉を顰め、もつと小奇麗にして出て呉れと忠告したら、この着物しかないのだから、これて惡ければ退社するといつたので許可を與へたそうだ。其の作は白馬會の一流だが、其の割合に世間で評判されぬのは處生術の拙なる爲で、氣の毒な事だ。

従軍餘談

○○生

▲黒木大將と英國の小兒

我が同盟國なる英國が擧國一致我國に親厚なる同情を表する事は今更ら贅するに及ばざるが過日英國の小兒より黒木大將に送りし左の書翰の如きは如何に無邪氣なる小兒が其愛らしき小供心に我國の勝利を喜べるかを證するに足らん

親愛なる黒木大將閣下

私は八歳の英國の子供てあります閣下が鴨綠江て露西亞兵をあんなに酷ひ目に合はせましたのを見て大層喜て居ります英國の小供は皆な日本の味方てあります私は日本の郵便切手と端書が欲ふあります父様の申すには私が閣下に手紙を差上げて御願するならば私に送つて下さるてせうとどうぞ私の御願を御かなへて下さい

五月六日　エツセツクス、イルフチレドノース、アルツク、ロード五十二番

エツトキン、ホケン

嚴格なる黒木大將も此無邪氣なる愛らしい手紙を喜ばれ陣中にて寫されし大將の寫眞に添へ一通の手紙を其小兒に送られたり其全文は讀むことを得ざるも文中にはお前は良い小供てあるから私の寫眞一枚を贈つて上けるがお前の父母や姉さんなどには見せても良いが他の人に見せると又澤山貰ひに來ると困るから隠くして見せない様にしておくれと言ふ様な文意なりしと聞けり

▲日本軍と露兵の對照

敵の背面に出て逃ぐるを追ふて奮戰激鬪中隊長幷に小隊長を失ひ僅かに特務曹長に依つて指揮されつゝ既に味方の過半を失ひ彈丸つきて尙且つ「突け劔」にて敵の大軍に迫まりし我が廿四聯隊第五中隊の如き或は十中隊の如き我兵の最後は實に目醒しきものなるに露軍に在りては彈藥の三分の二を消費せば降服すの例を嚴守し居るものか今一息と云ふ所にて必らず銃を投げ出し手巾を振つて降服すそして兵士は兎に角堂々たる將校までが平氣なものにて中には故國の家族へ無事て居る由の通知をしてくれと賴むものありとは彼我兩軍の對照妙てはないか

▲兵士の好模範

我兵士の戰地に於ける一言一行一として佳話ならざるなし況んやこれに親しく接する我々從軍の徒は之れが爲めに幾度感涙に咽ばせらるゝやを知らず只々殊勝なる兵士と云ふの外讚辭あるを知らざるなり中にも余が四道溝の兵站部にて目擊したる一事實の如きは之を報ずるの余も涙を禁ずる能はず之を讀むの讀者も又感涙を注がる可きを信ず同兵站部には前

日の戰に重傷を負ひし軍曹安部新吉氏を始め九名の重傷者あり中には肺部頭部を貫通されし者もありしが意氣猶壯にして女々しき呻吟の聲を放たず然るに本隊は前進の準備に忙がはしく從つて兵站部員は目も廻るばかりの忙中に在る爲め心ならずも此の負傷兵の上に迄行屆き得ず午前十時を過ぐれども負傷兵は未だ朝飯を喫せざるなり之れを傍にて見たる余は氣の毒に堪へざれど我に多數の傷兵を滿足せしむ可き食料もあらざれば如何ともすべからずされど彼等は一人として不平がましき言を言ふ者なし余は餘りの氣の毒さに「急がぬ旅ならば君達の傍て及ばずながら御世話もしてあげように」と言ひしに彼等の一人は嚴然として曰く「イヤ戰鬪力を失つた僕等はどふても好いのですそれから前進する戰鬪員が空腹ては戰が出來ませんから後廻しになる位の我慢は何んても無いです」と嗚呼何等切實の語ぞ余は强き感慨に打たれて暫らくは其過を去る事能はざりき日本兵の平素を知悉せざる外人等が「日本の兵士は何の信念ありて斯くも大膽に且つ死を恐れざるか」と驚嘆するも全く無理ならざるなり

▲支那人の從軍出願

摩天嶺以北の支那人は露人の爲幾多の酷苦に遭ひ遺恨骨髓に徹せざるものと見え我軍到ると見るや壯丁群を成して來り「我等に銃を與へられよ貴軍に加はりて共に露兵を討たん」と願ひ出づる者多きに我軍政署は其不可能の事なるを諭し汝等中立國の民は斷じて其意を採用する事難しと說諭するも猶聞入れず切に乞ふて止まざるに我軍も殆んど持て餘し居れりと云ふ彼等が我軍に對するの厚意は總て此の如し

▲憐れむべき戰地の婦人

世に憐れむ可きは戰線附近の支那人なり彼等は此れまで暴虐なる露兵の爲めに家財は掠奪せられ田畠は荒され剩さへ兵燹に家を燒かるゝ等悲慘交々至り片時の安居をさへ得ざる目下の有樣なり殊に支那婦人の如きは深閨に隱れて世に出づるを厭ふの風習なるに頃日來露兵の侵略の恐ろしさに家に居るに堪へず遠く山中に遁逃して僅かに安きを得るの境遇その心情察す可し現に余等の宿舍に宛てられたる藏連山腳の農家の如きは其一例にて余等一行の當地に着せしは六月卅日なりしが聞けば三日前まで露兵が天幕を張り居りたる由にて余等の宿舍は茅葺の一棟なりしが其大部分は余等に占領され殘れる一室に七八人の男雜居しつゝあり居る事十餘日一日清人總出にて屋內の土間に木片を集めて怪しげなる床を造るに何にするかと問へば明日婦人の一行が山より歸る故その爲めに寢床を造るなりと答へしが翌日果して四五人の婦人は七人の男に護衛されて歸り來るを見れば赤ン坊を抱ける者或は背負へる者或は四五歲とも思はるゝ童子の手を引ける者我家へ入る事さへ危ぶく思ふが如く逡巡しつゝ四邊を見廻し惴々と入り來りしが奥の間に我等一行のあるに驚き再び驚愕したる樣子にて羞恥の面色に顏を被ひて狐鼠々々と彼等の爲めに讓て設けられたる寢室に逃げ入りぬ然るに翌日に至り婦人と共に山中に隱されたる荷物と豚は運ばれ彼等もやゝ安堵の胸を落付けしと思ひしも只の一日にて翌曉は摩天嶺方面に於て彼我の砲聲頻りに聞ゆるや彼等は蒼々行李を收め婦人は又もや子女を背負ひて何所ともなく避難せり其狀のいかにも憐れなるにマックスウエル、ナイト兩氏と余は毫も危險ならざる旨を說き諭し避難を思ひ留まらしめんとせしも狼狽せる彼等の耳には入らずつひに忠言も聞入れずして逃去れり其キヨト／＼と落付き得られぬ彼等の境遇は實に憐れむ可きものなり

鬼面魔語

醉美生

▲藝者遊をするものは衣服裝飾に心を用ふれども、女郎買をする男には決してさることなし、是れ一は見得張意氣張を主とすれども他は然らざるによるものならんか。

▲雜誌の口給、給はがき屋の店頭、明治座に於ける貞奴の寫眞を掲げざるもの殆んど罕なりか、新聞などては隨分惡口を叩けども國民の助平心却て飛んだ所に顯はる。

▲青年雜誌といひて青年のことを書き、女學雜誌といひて女子のことを記す、是れ最も人情の幾微を解せざるものゝする所なり、青年雜誌に於て女子のことを書き、女學雜誌に於て青年のことを記す、是れ商機あるものの必ずなす所、其實行のよかるべきこと疑を容れず

▲バイロン曰く、痛むべきかな、此嚴かなる世界に於て快樂は屢々罪惡にして罪惡時として快樂なることをと、道義と人情の衝突万古人の血を啜り、涙を絞ること今尚昔と異なるなし、痛むべきかな。

▲姉崎博士の文學的趣味を知らんと欲するもの は時代思潮に出でたる「近時文壇の好佳作」を讀め、果然彼は一箇篤學の士、文壇に打て出づべき人にはあらず。

▲少デーマの椿姫は小說中の小說、戀の眞相を描くこと微に入り細を極めて感嘆措く能はざらしむ、中に面白き思想あり曰く、「戀の入口は二つあり、一は精神的の戸にして、一は肉體的の戸なり、然かも精神的よりせるものも終には肉體的の要求起り、肉體的よりせるものも後には精神的の顯冥起り、遂する所は畢竟同一の殿堂に外ならず」と。靈肉合一の觀念といふべし。

▲熱烈なる戀愛の戀求は靈肉の合一を見ざれば決して止むものにあらず、彼我の靈肉合一して子となつて生る、われはこの意味に於て生殖の止むべからざるを慾ず。

▲激しき戀愛、抑へ難き戀愛、靈は電氣の如く躍へて、肉は火の如く燃ゆ、此時男女相擁して玆に偉大なる子生る、單に實利的の眼を以て見るも戀愛に無限至高の力あり。

▲新詩社の連中盛んに同人を擔ぎ上げて頻りに八方に當る。晩翠を嘲り、露伴を罵る、吾人必ずしも不遜なりとなさず。只嘲らんがために、罵らんがために、殊更に嘲り、殊更に罵るが如き風あるを見ては吾人密かに其品格の陋なるを悲まずんばあらず。

▲東都のデン界今や大阪義太夫の蹂躙する所となる、男に組太夫あり、生島あり、女に組幸あり、隅玉あり、万八あり、長年あり、昇之助あり、而して何れも吾人の趣味を滿足せしめたるものなし、只新是れ趁うて眞の藝術的趣味なきの俗衆我之を奈何せん。

▲孔子歎じて曰く、群居終レ日、言不レ及レ義、好行二小慧一難矣哉、と。今の下宿屋の書生連の如き實に義を言はざるのみならず、終日不義不德を口にして耻ぢず、禍なるかな。

▲高等學校及び官立學校の數少くして僅かに受驗者の四五分の一を收容するに過ぎず、而して其落武者を收容すべき完全なる私立學校も亦至て多からず、かるか故に徵兵猶豫の特典ある學校に籍を置て下宿樓上に偃臥し遊樂す、あらゆる誘惑は其隙を求めて終に墮落深淵に導く、われは今日學生の腐敗を以て一半學制の不完なるに歸す。

▲久しく他國に流寓して故鄕に歸る、最も驚かるゝは無邪氣なりし乙女

手の丸髷となつて赤ちやんを背負る姿なり、年老いたりし人の墓石となれる必ずしも靈かず。

▲金遣ひ荒き子を持てる富める親御達に告ぐケチな錢を與へ、シミツタレ金をやることなかれ、これ却て金遣ひを荒からしむる基なり、金遣ひの荒きは金の有難味のわからぬが故なり、宜しく財産の幾分を分ちて其子に持たしむべし、彼れ必ず君に劣らざる敬虔を福神の前に捧ぐべし。

▲トルストイ曰く、「神は人に與ふるに己れの靈魂を救活するの自由を與へたり」と。我れは此言に於て初めて都合よき宗敎觀を見る。

▲美貌にして女に慕はれ、激しき情海の波に泳ぐ、これ確かに青年第一の快。平和にして人に敬はれ、静かなる靈界の光に浴す、これ確かに老年最上の樂。

文士初對面錄（その九）　天中天

▲志賀重昂氏（ノ一）　身躰の重いにしては口の輕い、口の輕いにしては眞面目な話をする人、戰地へ行つて餘程悟つたところありと見え、訪問者をとらへては屹度恁ういふ、どうも軍人の豪いのには感服して了つた、我々は智識の正確なのにも及ばんし、其勉强にも遙に及ばん、此勢を以つて進んだら、戰爭には捷つヲ、智識は勝れて居るヲ、全く軍人の世の中になつて了ひます、彼の山岡少佐の如きは、あの忙しい眼の暈むやうな參謀の職務の中でも、露佛の語では足りないといつて、朝は早くから、暇さへあれば英語を獨習して居た、日本の新聞記者なんぞは、あはれ果ないもので、將校は皆口を揃へて、新聞記者といふものは最少し學問のあるものかと思つたら案外だと評して居る、（ツヾク）



精神勞働者問題

（生活上より見たる學校教員と文士）

夢蝶庵主

一

世に勞働問題を言ふ者は多い、然れども未だ精神勞働者を勞働者の一種として、勞働問題の範圍に置き、之に研究を加へてゐる者は、甚だ尠いやうに思はれる、然かも今日生活に苦しみ、常に苦悶の聲を放つてゐる上に於ては、體力勞働者と精神勞働者と何等の異る所はない、否或者は却て體力勞働者に劣れる者も多いので有る、若し勞働問題を以て、胃の腑の問題、即ち生活問題なりと解釋せば、啻に體力勞働者のみならず、精神勞働者にして、生活に苦める者は、同じく之を勞

働者として、社會問題の中に入るゝに、何人も異議を挾む者は有るまい、然るに、我國にては、一に體力勞働者のみを問題として、更に精神勞働者に言を立つる者のないのは、甚だ不思議の事共ではないか。

而して體力勞働者に幾多の種類あるが如く、精神勞働者にも幾種の別あり、之を或意味にせは、小官吏の問題と爲り、他の意味にせば銀行會社の小給者の問題と爲り、更に他の意味にては、文士、新聞記者、學校敎員等の生活問題と爲る、余輩は、爰に文士と學校敎員の二者に就て、世人の注意を求むべし。

二

その職業を見れば、極めて高尚て、其の生活の卑賤てあるのは、學校敎員と、文筆で衣食する「文士」といふものであらう、學校敎員といつても、色々區別がある、大學敎授も、學校敎員であれば、各專門學校の敎授も學校敎員、併し乍ら余輩の問題とする學校敎員は、普通敎育に敎へる中學以下の學校敎員をいふので、特に國民敎育の任に當れる小學敎員の生活狀態てある。

近頃新聞紙の上に、頻々として、敎師と生徒との衝突なる學校騷動を見受くる、古風な風敎論者は、例の紋切形の、師道の頽廢論などを持ち出して、その罪を敎員の德の至らざるに歸してゐるらしいが、余は神聖なるべき敎員の職務が、生活問題の中に沒却して、敎員たる者は、若干の給料を受くる報酬に、生徒に學術を供給する一種の器械と爲りし者であらうと考へる、而して中學師範學校等の學校に紛擾多きは、中等敎育者其人の宜しきを得ざる外に、また或意味にては、小學敎員の生活狀態が、余りに卑賤なるが故に、その生徒に對する威權を缺き、感化薄く、中學或は師範學校等の生徒と爲れは、放縦にして無賴なる今日の如き惡事實を示すので、見來れは、風敎論は、中等敎育よりも、寧ろ其の根底たる小學敎員の上に重要であるやうに思はれる。

三

爰に少しく小學敎員の生活の現狀を吟味して見やう、日本全國の小學敎員の生活程度を見るに、一ヶ月四五十圓の高給者もあるが十人の中、七八人までは、二十五圓以下、否二十圓といふ數字を現はしてゐる、試にその證據を擧ぐれば

	本科正敎員 尋常科	本科正敎員 高等科	專科正敎員 尋常科	專科正敎員 高等科
三十五年度	一四、六八六圓	二〇、八〇〇圓	一一、八一三圓	一四、二八三圓
三十四年度	一四、二九五	二〇、二五一	一一、八八八	一三、七五八

三十三年度　一三、五八一　一九、一六八　一一、三五〇　一三、四八九

斯うである、即ち三十五年度には、本科の尋常科教員は平均十四圓六十八錢六厘、專科のは十一圓八十一錢三厘で、而して本科の高等教員は、二十圓八十錢、專科の高等教員は、十四圓二十錢、即ち小學教員の隨一たる本科高等教員といつても、二十圓を出づること僅に八十錢、尋常教員に爲ると、小官吏の最も小なる十級俸の最低官吏にだも當らぬのである、若し小官吏を以て、社會問題の目的物と爲すことを得は、此の九級俸以下の低給者たる小學教員の如きは、更に一層甚しきものといふべきではないか。

斯くの如きは何可とすべし、正教員の外に、准教員といふ者が有る、その給料を見るに、尋常科教員は、八圓五十五錢三厘で、高等科教員は、僅に十三圓〇七錢八厘！、一日四十錢宛の日稼人足の賃銀と匹敵してをるではないか、余嘗て地方に遊べる時、北越地方の某村落で、顏を墨黑々とせる惡太郎等は「先生那邊へゆく、味噌買ひに」といへる不思議の俗謠を唄へるを聞いたが、今日に至つて思へば、今の小學教員たる者は、自から面桶を携へて、味噌を買ふべき境遇に在るのである。

而して前に掲げた統計表に依つて見れば、三十三年と三十四年、三十四年と三十五年、その間僅に五十錢乃至七十錢の増給を示せる丈けであるから、此の無趣味なる數字に於ても、物價と伴はぬ淒慘なる生活狀態が現然と見えてゐるではないか、之は高等科教員であるが、尋常科教員に爲ると、十錢、三十錢、五十錢に出づるのは甚だ尠いので有る、ア、先生那邊へ行く味噌買ひに！曰く文字を授くる兒童の口より、その生活の醜陋を嘲らるゝも、先生たる者、赧然として、辭なかるべし。

四

小學教員の給料額といへば、あら〳〵右に擧げたやうなもの、その結果は如何、と言ふに、何れの小學教員も、職務に對して眞面目を缺くのも、亦已むを得ざる次第といふべき歟、特に有造無造の寄り合つてゐる東京市の小學教員の如きは、神經の鈍い、イクヂのない連中を除けば、他は小學教員といふ職は、公園に備へつけてあるロハ臺と同樣、一時、然り、ほんの一時腰を掛くる段階として、職に就いてゐる者が多いので、之を以て、生涯の職分として、眞面目に遣つてゐる者は殆ど見ることができぬので有る。表面より見れば、教

育の普及は、年一年に好成績を示してゐる、その教授法の如きも、二十年乃至十年前に比ぶれば、著しく發達したに相違ないが、教員その人の精神に何等の進歩なく、否、教育術の進歩とうらはらに年月の加はる毎に、却て不眞面目と爲つたやうに思はれる。

ア、是れ何の故ぞ、是れ何の故ぞ、余輩は我日本の軍隊が、滿州の野に、露國を挫き、連戰連勝の快事を致すに浮かれて、此の教育社會の一大事實を見脱がさざらんことを希望する。

五

次は「文士」といふ生活者である、文士！甚だ漠然とした言葉で、世間の稱ふる言葉振りに依りて見れば、文士といへば、單に文學若くは文學に關係する學術を文筆にする一種類を指してゐるらしいが、余輩は便宜上文士の意味を極めて廣汎に解釋し、小說家及小說家類似の者は固より、苟も文筆に依つて衣食せる者は、新聞記者を初めとして、各種の雜誌記者、著述家等、悉く之を「文士」の大傘の下に概括して置かうと考へる、併しながら、文を以て生活せる者といへば、今日の狀態にては新聞雜誌記者、小說家、及一種の著述家であるから、結論に於ては、此の三種の生活者に止まるやうな結果と爲るやも知れず。

此の文士といふ階級にも、學校教員に、大中小の別あるが如く、その品位に、その生活に、幾十種の別がある、故に之を小學教員と同視して、一列の下に、その生活狀態を揭ぐるを以て、此の階級者には、一種の感を懷く者あるべしと雖も、「生活社會の人」としては官吏も會社員も學校教員も若くは勞働者も何等の相違なく悉く是れ勞働者（精神と體力との相違はあらうが）であるから、文士を以て、小學教員と同列に置くも、何等の不都合もあるまい、否、余輩は文士の或者に於ては、生活狀態は、寧ろ小學教員の下に在る者も之を見受くるので有る、小學教員は味噌買ひに出掛け得べしと雖も、文士なる者は自ら味噌買ひ得ざる變妙な境遇に在る丈けそれ丈け、一層の同情を注ぎ、批評と研究とを要する。

六

先づ今日我國に幾何の新聞雜誌、及圖書の出版ありやと見るに、三十五年の調査に依れば、保證金を納めたる有保證の新聞雜誌は、七百四十七種で、無保證のは五百八十四種、即ち合計千三百二十八種ある、之に從事する精神勞働者——文士は幾何なりや、甚だ判

り兼ぬるが、假に一種五人宛なりとせば、六千六百四十人、之は日本全國の數てあるが、比較的精確に概算され得べき東京市の新聞紙に就て言へば、東京電報とか東都日報とか、一般に知られない新聞紙は除き、時事、日々、國民、朝日、報知、讀賣、毎日、日本、都、中央、中外、萬朝、二六、電報、人民、日出國、の十六種に就て見ると、一社に四五十人といふ多數なるもあるが、平均二十五人宛とせば、東京市に於ける新聞記者の數は、無慮千三百七十五人、之に雜誌記者を加ふれば、如何に少數に積つても、千五百人――二千人の新聞雜誌記者は居る揣定と爲る、千五百人乃至二千人、といへば、精神勞働者中、最も少數の群類であるが、此の千五百人(假定)の少數が、五千幾百万の民衆を、包容せる我日本社會に於て、政治に、經濟に、文學に輿論を起こし、風雲を捲いてゐるかと思へば、侮るべからざる感想も湧く。

更に新聞雜誌記者以外の著述者の數を見るに、之も甚だ算定に苦むが、試に三十五年の出版物を擧ぐれば、一年間に、二万二千九百五十の出版圖書が見えてをる、その中最も多いのは、農業書類、その數二千三十冊、次は法律書類、千三百八十冊、續いて宗教、次いて商業といふ順てあるが、單に文筆及文字に近かき出版物に就て見るに

哲學	一四四	詩	六四	日記	六三
歷史	三一六	音樂	二八七	紀行	一五
傳記	二一八	謡曲	五一九	叢書	一〇六
歌	三八四	字書	一〇一	小說	五四四
俳諧	七七二	教育	八二七	計	四三六〇

といふ成蹟を現はしてゐる、即ち出版圖書總數の弱五分の一は、廣き意味に於ける文學書類て有る、然かも文筆に依りて生活せる者の數より言へば、此の文學に屬する圖書の生産者は、分量に於ては、その數は多からうかと思はれる、右表に依れば、冊數て多いのは俳諧書類てあるが、勞力の多きは、小說、哲學、歷史、敎育の數てあらう歟、現に余輩の見聞に依りて察るも、著述に依りて生活せる者は、此種類の者に多いやうてある、开は兎に角も、文學物は、一年間に四千三百六十冊出てゐる、一人に一冊宛の出版を出だす者とせば、我國には四千三百六十人の文學者ある揣定、二冊宛とせは二千百八十人、四冊宛とせば、千九十人。此中には金銀以外の目的を以て、即ち名譽の爲に、或は道樂半分に出版せる者もあらうが、その半分、少くも三分

の一は、文學的生活者――專門文士の生産物であるに相違ない、特に小説類の如きは、十分の八九迄は、米麵の必要に驅られて製作せる者と信ずる。

以上、新聞雜誌記者、及著述家の概算であるが、此の一國の文華を飾り、文明を胎みつゝある文士なる者の生活社會に占むる位置は、果して如何なる程度に在る乎、いざ、讀者を伴ふて、少しく其の實情を見やう。

七

先づ新聞記者に就て見るに、その高給者は、百圓以上、二百圓以下といふのもあり、五十圓以上といふのも多いが、その低給者を見れば、十五圓内外といふもあり、二十圓内外といふのもあり、新聞社に依りて、相違はあるが、各社を平均せば、二十圓乃至二十五圓といふ處ろが最も多いやうに聞いてゐる。

三十圓の月給、之を體力勞働者に比せば、一日の賃銀一圓の石工と相同じく、官吏に比ぶれば、七級俸の判任官に相當してをるのであるが、平均二十五圓である、僅に八級俸の判任官に相等しく、日給七十錢乃至八十錢の大工左官と異らないのである、然かもその服裝を見れば、或者はフロックコート、晝飯には、西洋料理屋に給仕を走らすのもある、而して出入には、その過半は腕車を驅つてゐる、更にその出入先を見るに、高官にあらざれば紳商、然らざれば世に時めく學者、名流、何等奇怪の生活者ぞや。

大凡世に衝突と矛盾とを生活に現はしてゐる者は尠くはない、が、單に經濟的現象として言へば、新聞記者の如きは、その最も著しいものではあるまいか、その職業は、常に天下の憂に先んずる、如何にも壯快に、如何にも高尚げに見え、日常の生活も、農業者や、商業者や、力役者の想像にだも及ばざる贅澤を極めてゐるにも拘らず、篤とその收額を點檢せば、體力勞働者たる大工左官の徒と何等の徑庭はないのて有る、渠等は、如何なる魔力があつて、能く斯くの如き奇怪の生活を續け得るのであらう乎。

最もその人物を見るに、家族の關係なき獨身者が多いのも、原因の一つて有らう、生活の意味を輕んずる弱年者の多いのも原因であるに相違ないが、新聞記者は悉く青年者でもなければ、獨身者でもない、家族ありて、生活を重んずべき筈の人にして、尙且斯くの如き者の多いのを思へば、餘輩は、新聞記者といへる精神勞役者は、一種の階級者として、特別の觀察を加ふる外に、他に方法を有しないのである。

世に新聞記者の墮落を言ふ者は多い、然れども墮落の意味を以て、金錢の前に卑劣なりといふに在りとせば、這は甚だ新聞記者の實情を察せざる不通の言ではなきか、寧ろ甚だ殘酷に聞こゆる、僅に二十五圓乃至三十圓の少給者に對し、抱負を望み、見識を望み、清廉を望むのは、人に聖人たるを望む者の言で、相率ゐて墮落の地に就くのは必然の數であらうと考へる、特に新聞記者には、他の精神勞働者たる官吏や會社員の如く昇給の事も甚だ尠く、否、不分明であるのみならず、扶助恩給等の事もないのであるから、日常の生活に矛盾多く、衝突多く、且つその職務と生活とに對して不眞面目であるのも、蓋し必然の結果であると信ずる。

故に余輩は一般青年、特に新聞記者を望める者に對しては、徒らに新聞記者たらずして、他の精神的勞働に從ふべきを奬むると同時に、世の先覺者及新聞經營者に對しては、新聞記者の風習を改むると共に、今少しくその收額を大にし、その生活をして安固ならしめ、即ち他の生活者と相伴はしめんことを望むのである、今日の新聞記者の所得と勞働狀態とは、甚だ調和を缺いて、不眞面目に陷つてゐる、是れ新聞經營者の罪のみにあらざるべしと雖も、斯くの如きは、決して健全なる者にあらざるべし。

八

更に他の文士、即ち雜誌記者及著述者を見るに、新聞記者と似たり寄つたり、特に雜誌記者の如きは、その品位及性格は、殆ど新聞記者と相似てゐるやうであるから、暫らく措き、單に著述家——小說家の類に就て言へば、新聞社、雜誌社、若くは書肆と關係の深い者は、その所得も略ぼ一定して、生活に甚しき缺陷は見えないが、一定の勞働市場を有せざる小說家に至つては、生活は甚だ不規則を極めてをる、或時は百圓乃至二百圓の金錢を手にすることもあるであらうが、之は一年の中に一回か二回、普段は零砕な金額を集めて、生活を營んでゐるのであるから、甚だ悲慘な有樣に陷つてゐるのが、余輩の知れる範圍に於ても、一二人は居る。

假に書肆其の他に關係深き者といへども、之を他の精神勞働者に比ぶれば、必らずも最上の位置に居らない、先づ七級以下の小官吏と相似たものであらう歟、爾して此の人達は筆に立派なことを稱へてゐるにも拘らず、常に資本者の前に頭を垂れて、自由なるべき意思

を束縛せられて、悶いてゐる、余は此の生活者を見る毎に、何が故に此の故に此の才に富み技に熟せる人達は、好んで斯くの如き、不快なる境遇に身を投じてゐるのであらうか、と怪まれるのである。但し其の人には余輩門外漢の窺ひ得ざる別種の慰樂はあるであらうが、兎に角も、一般生活者と比べて、異樣の生活狀態になるのは、文學者であらうか。

近頃、社會の一角に、社會主義の聲が呼ばはれてゐる、その論ずる所を聞くに、體力勞働者の窮扼を救はんとするの聲であるらしい、成程、體力勞働者の生活は、年一年と窮迫を告げてをるに相違ないが、單に生活の憐れむべきより言へば、寧ろ此の文士の階級に甚しきを認める、即ち社會主義を稱ふる者が却て社會問題の目的と爲つてゐるやうに思はれるのである、併しながら余は之を以て社會主義を非とする者ではない、また文學其の物を排せんとする者でもない、社會主義の如きも、その理論には、多少の異議を挾むべきものあるにもせよ、また是れ系統の立つた學說である、特に文學に至つては、人生に幾多の教訓と慰樂とを與ふるものであるから、珍として、大に重んずべきものであるが、文學者其の人が、小說の材料と爲るやうては、甚だ面白からぬ。

玆に當りて、余は少しく世の文學嗜好者に、言ふことあり、文學を喜ぶは可なり、之に耽るも亦不可ではないが、之を喜び、之に耽るの結果、文學を醜業とする者を生ずる傾向あるのは、如何したものぞ、余は文學は職業にあらずとは言はぬ、然れども何等天才なき徒が、讀者の階段を越えて、之を衣食の料とせんとするに至つては、甚だ奇怪に考へられる、况んや今日喜ばるゝ文學小說なる者は、青年男女の風俗情交を描ける者多くして、その文學の中に何等の人生なく、社會なく、智識なく、慰樂なき無價値なる者なるに於てをや、併しながら今日の如き文學書類も、亦た或讀者には利益もあらう、慰樂も與へてゐるであらうが、直に其の作者を慕ひ、その生活を羨むに至つては、嗚呼の甚しき者、余輩は、余りに今の青年者流の淺墓なるが憫笑に堪へず。

理屈は暫らく措き、今の文士の生活を擧ぐれば、他の同格に位する精神勞働者に比ぶるも、右の如く卑賤な位置に居る、その原因を探れば、幾多の理由は出づるであらうが、余輩は、今日の如き狀態にては、決して價値ある生產――勞働の効果を擧ぐれことは出來まい

と考へる、斯くの如きは、文學てふものは、未だ職業の神聖に到達せずして、その勞役者は、依然として、德川時代に於ける戲作者氣質——道樂商賣たる感念の解脫せざるに在るのではなきか、而して文學にして今一層職業の性質を帶びて、生活と密接し、その精神勞働者にして、眞面目に、業を執るに至れば、その作物も、僅に學窓に在る青年男女のみならず、一般讀書社會の讀み物とも爲るであらうと信ずる、敢て精神勞働者問題を掲げて、文士諸君の一考を煩はす。

新聞活版職工（上）

活版小僧

左は東京市内に於て、目下第一流と稱せられたる某新聞に就き、專ら研究されたるものなれば、各般に涉り盡く然りとは斷言し難し。譬へば一家には各々家風あり、一新聞社亦其々の風儀あるは、主義の異なり方針の殊なるが如しと雖ども、大體の組織に於て動かすべからざる一致あるは、家内に三度の飯を食ひ、味噌汁は味噌にて拵ゆる外なきが如けん。

▲男工女工

◎下女代り　新聞社の職工を別つて二となす、曰く男工、曰く女工。と論つて來ると、何だか博士が大講演でも始めたやうでもあり、又職工に男女あるは、新聞社に限つたものでも無く、少々鼻に附く氣味が有るが、其麼も實際だから您う記つて來るより仕方がない。其處で先づ、男工女工の二大別を爲して於て、彼等の割合を示さうなれば、五と二十五の關係、女工が五人ならば男工は二十五人、女工が十五人なら男工が七十五人といつたやうなものである。此では折角大別して女工と名乘らせた甲斐もなく、實は男工に比して女工は其の五分の一しか無いのである。されば其の仕事も大方推せらるべく、實際女工は解版の一部に逐退けられて、其の他には下女代りの追使ひに動いてゐると言つても可い。所で男工となると巾を利かしたもので、先づ新聞社の工場は自分で脊負つて立つと云つても可い位。實際職工と云へば直に男工のみを想像さするのである。仕事も隨つて九分までは男工で行ひ、

◎其種類　を擧ぐれば假名返し、文撰、植字、差替へ、大組と言つたやうなものである。さて此から男工女工の任務を記して見やうと思ふが、何から記すか、何處から緖を引出すか、一寸見出すに迷ふのである。——一體新聞社の工場の仕事は、循環して環の端の無きに等しく、文撰したのを植字する、植字が濟んだのを差替する、其から大組する、ステロタイプに取る（ステロに取るのは印刷の工場で他の工場に屬する）ステロ場から上つたものを、解版する、解版したのを假名返しと文撰が返す、返したのを又文撰て拾ふ、又植字で組立てると言つたやうに。何百年經つても、世界を二度廻つても、クル〳〵廻りて端がない。所謂環の端なしてある、と云つて默いてゐては涯がないから、試みに文撰の中から記して見やう。

▲文撰

◎鳥が啄むやう　文撰科はケースて以て四方を圍はれた別天地と言つても可い。寒い時ならば大火鉢を中央に、三方若くは四方がケース即ち活字棚て、此の活字棚が斜めに向ふに凭り懸るやうに立つてゐると、文撰は各自拾ひ箱(縦二寸五分横五寸位)を抱へて、ケース棚の前に立つのてある。さて文撰は編輯局から來た原稿と右の拾ひ箱を左手にしてケース棚に立つや、眼前にイ、言、山、の一區畫が開けて、文撰は其前を飛び廻り鳥が物を啄はむやう、右の指先を尖らせて、活字を拾ふのてあるが、此は皆原稿を讀みつゝ拾ふので、其の讀方が一種異様て、二三度繰返し、語尾を引きつゝ、言はゞ歌つてゐるやうなものてある。其から其風つきが面白い、鉢巻したもの、筒袖のもの、襷懸けのもの、脚胖穿のもの、或者は仇討の姿、或者は賭博に打ち負けた姿、或者は遠方行の姿て。朝から晩まで歩き通して有るから、實際日々十數里を歩くに値ひすると言つてゐる。

◎小冊子の編成　予は今文撰の風俗の多様なるとを云つたが、眞にさう見受られる。風つきの多様なることは活版職工中の第一てある。書生の響落者、丁稚の成り上り、放蕩息子の隠場、といつても可い。思ふに活版職工(尤も小供の時から會社に養成せられた眞面目のものも居るが)の中て、飛込んで久しうならぬのか文撰科て、まだ蝶に變性するには早すぎて、比較的に元形を多く保つてゐるからてあらう。故に此の科ては文學者、畫伯、都々家ありといつたやうな譯て、小說雜誌講壇ものが能く讀まれ、或は讀むに滿足せす、自ら小冊子を編成し、勝手の技能を振舞はし、勝手の熱を吹くとが往々ある。

◎彼等の理想　彼等は職に入るとの深からぬ丈心も動き易い。上階級の植字に昇つて、一錢でも多い給料に成らうとか、下の階級を睥睨しやうとか云ふよりも。寧つと立派な、猶つと儲かる仕事を遣つて見やうといふのが多い。て種々に藻搔いて、此の地位に居つくものも、他の割に少ないやうだ。だが元來正當の道を踏み外して、落ちて來たものてあるから。資格としても性質としても、立派な商賣人、立派な朝野の人物となるには勿論まだ早い。彼等の中で最も成効した部類に屬するものが、新聞社の雜報書き位てあらう。予が見た文撰の内ても二人程、此の羨まるゝ階級に昇つたものが有る。一人は北國へ、一人千葉縣下に行つてゐるが、他の文撰等は其の新聞を乞ひ求めて、旨いとか拙いとか評し合つてゐる。彼等の或者は、名から何々屋何助と俳優じみてゐた、平生の身振言葉遣ひは勿論俳優に似てゐたが、到頭拾ひ箱を拋うつて脂粉を事とする身となつて了つた。又或者は惡所通ひの爲に此日も足らなかつた。昨夜は幾圓役つた、此度て幾度逢引がすると、誇り顔に話してゐたが、久しからずして姿を躱して了つた。さて彼等は胸に種々の想像を描きながら、拾ひ箱に拾ひ了ると原稿と一緒に拾ひ棚に置く、此からが植字の世界となるのてある。

▲植字

◎錯雜した道具立　目倉縞か唐縞の筒袖て、身輕いのが、遣つて來て、小腰を屈めて拾ひ棚か差覗く。原稿と拾はれた活字を見合はせるので、手輕さうなものから持つて行く。此から植字に取懸るのてある。植字臺は高さ乳丈計り、下が棚で着脫諸物其他を入るゝ様になつてゐる。上は即ち仕事場て、正面にルビ箱が向ふへ凭り懸り、左りが原稿置場、右がゲラ箱置場(此も斜に向ふに凭れ懸るやうになつてゐる)そして前には種物箱のやうな、仕切された淺い箱があつて、此に入つてゐるものが、「インテル」、「スラング」「クワタ」、「ジョス、オーナメント」、抔て、此が幾種類にもなつてゐる。其から言い殘したが正面ルビ箱の傍らに圏點、

「ダッシ、」「リーダー、」送りの各程がケースに選入てゐる。要するに頗ぶる錯雜した道具立て、一度位へ見ても目に入らぬ、聞た所で呑み込み惡い。

◎**「ステッキ」** さて植字先生は、此の込み入つた道具立ての前に、「ステッキ」を持つて立つのである。「ステッキ」を持つたと言つても、決して散步に出懸けやうと云ふのではない、又面倒だから植字臺を叩き崩さうといふのでもない。此處で使ふ「ステッキ」は、植字に片時も缺くべからざる機械である。即ち眞鍮又は鐵で製した一種の箱で、長さ六七寸巾二寸五分位、二方に緣が有つて、一方が離り上るやうになつて、一段又は二段の處で止めるとが出來、一方は明いてゐるのだ。といつた處で、見ない人には到底會得さるゝものでない。要するに新聞で八行位組むやうに出來てゐるのだ。

◎**振假名を一字〳〵** 植字先生は例の重寶な「ステッキ」を斜(しや)に構へて組み懸る、最初が「ルビ」即ち振假名を一字〳〵宛組むのである。其が一行組めてから今度本行を一行組む、此が非常の面倒である。一體振假名なしの文章なれば、只だ圏點を打つとか、句點を置くとか、苦もないとてあるが。振假名付となると、其の面倒は非常なものである。假之ば「◎旅順口の陷落」といふ文句を五號活字で組むとして、先づ「◎」の處を考へればならぬ、「◎」には「ルビ」が要らぬから、其の傍に相當する所には、活字より低い込めものをせればならぬ。其處で「ルビ」二倍の込めものを置く、此で「◎」の傍が何も寫らず白く出るとになる。其から「りよ、じゆん……」と組んで行くのであるが、此の「じゆん」が又問題である。

◎**三字音の融通** 一體五號活字の傍には「ルビ」二個で丁度合うとになつてゐる。其が三個並べなくては成らぬとになるので、大に不都合である。此處で恁な場合には止を得ず上下の篏物で融通せればならぬ。此には大に本文の捨假名に恩を着せる譯で、即ち捨假名の傍へ没入させて融通をつける。故に文章を書く時分、捨假名の無いとが、三音字を多く用ゆる行があると、實に植字泣かせである。此等は文章家の注意する所であるが、植字でも此の總體總面に出會すると、止むなく狡猾手段に出て、三音字を二音に縮むるとになる、即ち「ちやう」とすべきを「てう」として了ふ、起草者に取つては由々しき大事で、名たゝる大文章家も、文盲の譏を受くるやうになるが、此も止を得ない有心故造の誤植である。此な苦心と活路を求めて、植字先生「ルビ」行を組み了ると、今度は本文の行を組むのであるが。何樣かすると振り假名と本文とが齟齬ふやうになる。老練の植字には此が無いが、下手になると其が其儘になつてゐて、校正に餘計な迷惑を懸ける。此で完全な一行が組み終らるゝと、其から八分「インテル」を一枚入れ、其から又「ルビ」、本文と繰返して行く。「インテル」は行間の挾みもので、行間に善い明を造ると、活字の崩れを防ぐ役目をする。

◎**椽の下の力持** 序に前に出た植字の篏物を一寸言つて置かう。「インテル」には八分、四分、二分等の種類があつて、此は皆五號活字から割出したもので、八分は五號活字の八分の一の厚み、四分は四分の一、二分は二分の一である。そして八分は亞鉛板一枚の厚みで、普通八分をトタンとも言つてゐる。次が「スラング」此は「ルビ」の厚みで「ルビ」八本に相當する長さである。故に普通「ルビ八」とも言つてゐる。又「半スラング」といつて「ルビ」四本に相當する長さのがある。其から最小なのが「ルビ」の三分の二の長さである。次に「クワタ」此は五號活字と同じ巾のもので、五號と同じもの、五號の二倍の長さあるもの、四倍のものがある、五號と同じものは普通五號全劃と稱してゐる。其役目は、文章の了つた處、又は中間の明間に挾んで、印刷の時紙に寫らぬやうにしたのである。

大に「クロス」此は頗る大なもので、一號文字以上の大さのがある、此も眞四角なもの、縦長のものがあるが。多くは廣告用て活字板の間に大な明間が有る時疊むものてある。その外に三號六號の込めものかある。以上言つたものは、一口に言へば活字の間を白くする爲めの道具に外ならず、皆な活字よりは低くて、印刷の時には何の苦心も現はれず、只だ活字を支持してゐる椽の下の力持てある。世間にも此の種の役目を勤めて、一生人に知られず、愚痴も零さず、其の職分に殉する人があらう。又「オーナメント」は右と殊なり、非常に花やかなもので、常に文章の始め、又は文章と文章との中間に坐つて、秩序を整へ體裁を飾つてゐるもので、花形唐草劍形其他種々ある。けれども「カット」とは自ら異なり、文章の末尾に踊つたり跳たり浮かれては居らぬのてある。

◎**粒々皆血**　其て假に新聞一段の文章を讀むに、世間の人は僅か四分か五分て濟すかも知れないが、植字先生は普通一時間を要してゐる。其も拾假名一字、振假名一本から組み上げて、字間に空地があれば有る程、手數を懸け又其上に四號三號二號一號と割合を考へて疊み上げるのて。實際其の組む所を見てゐれば、能く間違はないものだと思はれる。粒々辛苦とは文字通りに此事を指すのてある。讀者も仇や忽そかに、拾假名の横向きや、振り假名の入違ゐ位いて、罵倒したものてはない。文章家が字に皆精神を籠めたものなれば、植字先生も又粉々皆血を注いたものと言はればならぬ。そして最も完全に、最も巧みに出來た時が、乃ち普通押通りて、其以下は過失陋劣て、惡罵惡嘲の種となるから、植字——若くは活版職工全體——其自身が椽の下の力持て、込物のクヲタ、ルビ八以上には瞑れをしないのてある。

◎**指告に精神が籠る**　さて雜は思はぬ所へ馳せた、此は大分貰つてゐるなと覺し召す人もあらう。抽象的の贊字は此位に止めて置て、今少し彼等の技術上に付て語らしめよ。植字先生が原稿を讀み、「ステッキ」を攜へて働く時に當つては、實に凄まじいものてある。口には一種の唱歌を稱へ、左の手て「ステッキ」を上下し、右の手て拾ひ箱の活字を逆しまに持つて來る（一體活字は左文字てあるから、活版屋は皆逆にして使用する）特に目覺しいのは其の「ルビ」を揃ふ時て、右の手先に精神が充實してゐるのだ。前に云つた「ルビ」は「いろは」四十八字と「カサタハ」行の濁音二十字あり。此の六十八種が、向ふの「ルビ」箱に並んてゐる。其を眞の一瞬間に拾ひ出すのてあるから、考へも暇もない、目て觀てゐる間もない。只だ直覺て行くのてあるが、「あ」といへば「あ」、「か」といへば「か」の處へ、鷲のやうに攫へた三本の指が、ヒヨイ〳〵と獨自て行くのてある。熟練といふものは恐ろしいものだ。

◎**巧好の技術**　彼等の中には一種の技能を備へたものがある。例之ば短かい章句の、評論か雜報てもあれば、其の末行の尾端を揃へる。此は前々の行から拾假名を抜き差して、融通して來て、初の項の尾端が八字止ならば、次の項のものも八字止とするのてある。又「▲」か何かて追込んだ文章なれば、其の「▲」の行く所を豫め胸積りして、雁行なり、山形なり、或は一文字なりに揃へることがある。時としては頼まれもしないのに、此の道樂を遣つて、獨りて喜んてゐる者もある。又其の技の堪能なるものになると、簡單な繪を「インテル」の高いので組込んて、畫工の代用することもある。此等の技術は、廣告を組む時に最も必要てある。

◎**拙い句が耳に立つ**　彼等には非常に音聲の美なるものがある、植字の面倒を操つるに此の美音を以てする。傍から聞いてゐるも快い心持になるが、若し文章に拙ない句が有ると直に耳に立つ。文章家は書上たら一度人に讀んて貰ふ必要があることが知れる。其から同じ植字の中にも無論早いて優るもの、巧みて優るものが有つて。社說小說若くは念の入つた論

説の如きは、巧みな方の者が遣る事になつてゐる。其から廣告を組むのも上手な職工が遣るのであるが、相場欄は一人若くは二人て專門に遣つてゐる。此は解版まで兼れてゐる。斯くて組み上られた活字の文章を「ゲラ」と言ひ、細糸で緊かり括り、長い一方開きの「ゲラ箱」に入れ、其れから手引の機械て一寸と刷り、校正を濟し、差替へに取懸るのである。

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内投書に限る▲締切は毎月十八日

▲鼻持ちならぬお江戸

淀橋　田舍漢

東京の人が鼻を蠢めかして田舍の人に誇る所謂花のお江戸はどうだい夏は流行病に冬は火事泥棒淫賣がある道路は晴天には紅塵万丈雨天には泥田の如く大溝小溝は惡臭紛々たる汚水が一杯溜て河水に何とも云へない程汚ない、空氣は煙や煤や惡瓦斯に汚がされそれて住んてる人間の人氣は惡い之て花のお江戸も押しが強い宜しく鼻持ちのならぬお江戸とでも改めた方がどうです所謂花のお江戸子諸君

▲インバネスとオーバー

本郷　直角生

帝國大學生と私立大學生とを比較すると一はオーバーコート一はインバネスを着て居る一は和服にも角帽、一は他の帽、一は努めて自分の大學生なるを現はす樣に一はなるべく知れない樣にして居る併しオーバーたりインバネスたるに依て學問に優劣があるか或は海老茶式部の瞳の働きに差違があるかは敢て嘗くべき限りにあらずだ

▲東京の言語

語學者

東京の言葉は立派て丁寧て明晰て氣が利いてるが中には度が過ぎて返て不明瞭て間が拔けてお話にならないのがある御御御汁、御御御足などは立派に過ぎ丁寧に過ぎて間が拔けてる御鐵瓶、御辨當、菓辨齋などは反對に略し過ぎて通用が出來ない程だ御女郎、御圍女などに至つては御の濫用も甚だしい人を愚にして居るぢやないか

▲御山の大將

京橋　彌次馬

高等學校生徒がベースは各學校に敗れ暫く回復の見込なくボートは高商の申込に逃け大弓柔術何れもさしたる好成績もなく運動に關しては先づ第二段の位置に甘んぜねばならぬにもかゝわらず運動の總本山は此方だと云はぬばかりに肩を怒らして御山の大將氣取りはちと片腹が痛ふ御座るて

▲名言

神田　傍聽生

嘗て某文學博士の演説を聞く滔々數萬言演題に曰く人はパンのみにて生くべからずと宜べなり博士はパンのみにて生き給はず常に大に酒を用ひてパン以外の或物を用ひざるべからざるを窮行實踐し給ひる人なりけり

▲時代思潮

本郷　白痴

都の子供に大きくなつて何になると聞くと大臣だと云ふ田舍の子供はおまわりさんになると云ふ此頃ては都も鄙も軍人なるんだと云ふこれを少年の時代思潮と云ふ

▲復活　日本橋　中學生

新聲と云ふ雜誌がつぶれたのが今度復活と云ふ字を冠にして大々的の廣告をしたキリストは六日目に復活したが新聲は少々手間どれたよく腐つて了わなかつたと或人が云つた

▲厄介もの　本町八百長方　俳馬

親類或は他人の孤兒を引取て世話をする、呼で厄介者と云ふ離れ度もない親子でも緣がなければ別れるのだ、然るに人の孤兒を育る、何ぞ能々の因緣ならざらんやなんすれぞ厄介呼ばりをするべけんや

文士初對面錄（その十）　天中天

▲志賀重昂氏（ノ二）　而も彼等軍人は軍事智識ばかりて、文學などは解しないかといふに然らず、古武士の面影が偲ばれる、乃木大將でも軍務の餘暇には詩を作つて、これはどうぢや、と云つて見せたり、他のものゝ詩を評して、志賀さん此は詩經にあつた句ですが、とか、出處は何處にあるとかと云つて、我々の知らないて、赤面の至りといふ場合もある位、それが新聞記者と來たらどうだ、歌が一つ讀めるてはなし、詩の一句も出來るてはなし、軍人に及ばざること寔に遠しだ」、といつて、更に慨嘆して

「新聞記者もだが、從軍布教師といふ各宗から派出されて居る坊主も格別だ、彼等は何をしに來て居るのか目的が知れぬ、雪が降るから寒い、道が惡いと云つて中々負傷者の見舞も碌々にしない呆れ返つたものだ、そのうちで感心したのは西本願寺の御連枝だ、若いのに似合はず、山でも野でも駈け廻つて働いて居る。兎に角今に軍人に他の者は壓倒されて了ひます」



當世詩人　汽車栗毛　茶人

一、評定

武藏野は、月の引込む山もなし、尾花が末やいつしかに、白雲頭に罹りにし、てつち野郎の小僧さへ、乞食の子でも三年で、三ッになるの假令にもれず、今は仕出してお家繁昌、土藏構の大のれん、扨ても變れば變るもの、椀久紀文の富さへも、春曉一睡の寐言は古し、馬車がすたつて電車が通る、通る路さへ切り石で、たゝむお江戸の繁昌は、田舍の者は眼の玉を、廻しもすらん程なれば、守田寶丹の賣れ口も、昔に增さる御贔負を、反つてねたむ輩もありとよ、中將と云へば昔者は、子をろし處といち早く、合點すれども今の世は、これも替つて血の道や、子宮病にもきゝめあり、

天狗が議員になる世の中、辨慶さんが煙草屋の、廣告するとて不思議はない、良藥にして口に甘しと、千古不變の格言を、淺田の飴が作り出せば、胃病に胃活泣く子に乳と、杜李も及ばぬ對句もあり、貞婦兩夫に見えずとは、元之れ後藤點時代の言、イツト イズ エドツクの今日、一夫一婦を唱ひつゝ、又傍らで未亡人、再婚論が喧しい、墨染衣に子をだいて、お經の節て子守歌、ねん／＼ころり南無阿彌陀、佛に歸心の切髮が、燕脂を含み白粉の、汗をかくやら耻をかく、昔氣質の父親は、頭かくとぞ申ける、さればにや、人の心を種子として、萬の言の葉となれりける、わが敷島の道さへも、道傍の、樺は馬にしてやられ、言玉のさきほふ國は草だらけ、月雪花は舊いとやらて、今は菫に星とぞなりぬ、玆にこの、菫に星を歌ふ詩人、優にやさしき其名さへ、白菫となん侍るもの、祖父の代まではこも莚、唯た一枚の水呑百姓、親の代になつてから、内情幾分か樂になり、どうやら畠の一枚も、買つてのばした其矢先、この白菫ぬしが、幼き頃より神童の、譽れも高き評判に、あたら名玉馬糞に埋め、鋤だこの手にしてのけんも、あたら惜しいと子の闇の、中睨んだ爺の炎眼、十六歳の其の砌、土臭い土地を去り、白粉香る都に上り、此年十九のにきび盛り、いつしか菫に思ひ焦して、星の逢ふ瀨をねたしと歌ひ、天晴菫に星歌ふ、當世詩人となりにける、さる程に、近き頃より睦じく、行きかう星野光と云ふは、氏と素性は知らねども、犬も朋輩鷹も朋輩、菲大蒜何んとやら、共に味噌一背の風流を、悦ぶ同志に氣も合ふて、又なく親しき仲なりけり、或日の事に星光る、白菫の下宿に訪ねより

『白菫君、餘寒が嚴しいの何んのと云ふが流石に好い時候になりましたね、

星朧梅咲き匂ふ春二月

『燭の火影に歌誦する君かね

『ヤンヤ／＼、それだ君、夫れに就いて少々僕に妙案があるんだ、即ち來る……おやない來んだよ、來ん土曜日から日曜日へかけて、膝栗毛がして見たいよ、四疊半に引籠つてばかり居て、奈何して宇宙の壯、自然の美が歌へるものか、自然を歌ふには自然と親まなければならん、歌人坐ながらにして名所を知るとは、字引學問だ、所謂疊の上の水練に等しい、苟も審美學的の名歌は自然と同化しないで出來るものぢやない、

『そりや面白い、大贊成、然し審美學的の名歌と云ふ

のは褻のやうだね、審美學とは讀んで字の如く、美を審にする學問と云ふ事だらう

『三百的の理屈はおき玉へ、詩人に理屈は大禁物だ、兎に角僕の妙案に、君も贊成するの光榮を有する以上は、土曜の早朝、頭に星を頂いて出掛ける、新橋から汽車に駕して　鎌倉は奈何てす

『膝栗毛は大に愉快だ

『汽車に乘るのだから膝栗毛とは云へまえ、汽車栗毛だ

『汽車栗毛……語既に奇だ、大にいゝ、然し鎌倉にも更に詩材がないよ、江の島の白波を歌つた處が更に美でないよ

『そうだ、美でない、苟も戀を歌はないもので美感の起るべき理由がない、白波……或る程度迄は美だが、終に殺風景たるを免かれないね

『全くだよ、夫よりは水戸の觀梅は奈何だね、上野から臨時の觀梅列車が出てゐる位だから、東京からも紳士淑女、或は女學生も隨分多く行くだらうと思ふてす、鎌倉より遙かに詩材に富んでゐるね

『紳士は詩にはならんが後のものが大に美的だね、ある！詩材は乾度ある、行から！

『なら水戸と極める、汽車の内にも乾度多くの詩材があるだらうと信ずるね

「ミユーズの神ヴエーナスの神の天降り
　神集ひます汽車の一室

『ウフヽヽある！、大にある！、妙だ、あゝ嬉しい、愉快々々

『然らば今度の土曜日

『僕はもうたまらん、土曜日までは待てないよ、今にも行き度なつた、明日行かう、明日

「わかき子は燒ゆる血潮をおさへかねつ
　玉しゆらげば明日もまたれず

『明日も待たれずとは性急だね、氣を落ちつけて、速くと事を仕損じる、土曜日と云ふた處明後日だ、今日は木曜日だもの、第一土曜日曜の外觀梅列車が出やしないよ

『止むを得んかな

『止むを得んよ

『止むなくば待たんそれまで命あれな

『やがて來ん幸福を心たのみして

『そんなら土曜日一番で行くとしよう、可いか、例の朝寐は心許ないな、大丈夫かい、

『大丈夫、乞ふ隗より初めよだ、安心し玉へ
『乞ふ隗より初めよは變んだね、あれは先づ自分から始めろと云ふ意味ぢやないか
『うむ……そりや……そうだ、だから人の事を大丈夫かなどゝ云ふよりも先づ君から大丈夫のやうにしろと云ふのだ
『何んだかちとをかしいやうだが、何んでもいゝや、土曜日だ、乞ふ隗より初めよだ
『そうだ、乞ふ隗より初めよだ
げに詩人の行動は、天馬空をゆくとかや、以心傳心山川の、合の言葉に似て非なる、日本語にして日本人に、解らぬ事を可笑げに、面白さうに樂しげに、お鼻も聲も高調子、軈て其日も入間のと、いつしか文句も七五調、七つの時が四つなりて、殘る三つの燒芋に、宇治の番茶に舌鼓、打てばしちようも白鷺が、烏に追はれ目を廻すを、げに孤城落日と、一人得意の鼻ふくらせば、一人は腕をこまぬいて、さきの高言何處へやら、物云へば、齒糞寒し冬の夜を、黑白(あやめ)もわかぬ盤の上、三百六十有一の盤を四つの眼に睨み、下手の考休むに似て、いつしか夜も更けにけり
『碁には負けた、碁は亡國の具だ、然し敗軍の將だ、終に兵を語らず、ハヽヽ、夜も大に更けたから失敬する、土曜日、いゝか忘れちやいかんよ
『大丈夫だよ、乞ふ隗より初めよだ
『そうか、そんなら屹度、乞ふ隗より初めよだ
『失敬』がらりと雨戸を操りやつて、毛糸の襟卷くる〳〵と首に卷き〳〵まき煙草
『ぬば玉の暗の夜だ
『あやめもわかぬやうだね、氣をつけ玉へ

二、道行

寐れば夢起きては現幻のと、戀ならぬ戀の土曜日も、東叡山の鐘の音に、突晴したる日本晴、まだ東雲の薄明り、殘んの星の影さへも、消え殘りたる朝霜を、片足づゝに踏み分けて、二人手に手をとりがなく、あれ鳥がなく鳥の名の、都の中の都ぞや、嘘にはならぬ本郷と、人の噂に坂菊の、住み古したる下宿屋を、後になしてぞ出にける、上野發車の一番に、乘り後れなばあしかりなん、いそがんものと諸共に、一二一二の號令に、踏み出す足の右左、足袋の紺色紺はげて、うつろひ易き人の世や、花嫁の、花はおぎやアで根にかへる、歸る雁がね一寸呼びとめて、乙鳥來るなと云ふたとて、月日に關は立てられじ、若いうちこそ花とも云

はめ、軈て霜置く翁草、それ秋風ぢや歯が落ちた、菜は〳〵と冬の梢に啼く鳥、鳥啼くにも身の末の、知れそなものを若い同志、無分別にも遊びつゝ、暮す一日一日を、故郷の父親母親は、如何なる思を胸にして、都の空や望むらん、親の心を知らぬ子の、二人は歩みをゆるめつゝ

『君々、まだ早い、時間は十分あるのだからも少しゆつくり行かう、抑も今度の紀行たるや、詩の爲めにするのであるから……

『皆までの玉ふな、明亮てす、だから斯うやつて歩いてゐても、徒らに無言行たる事なく、目に觸るゝ者をして悉く詩たらしめよと云ふのだらう

『イエス、イエス、大に察しが可い、贊成だらう君

『贊成々々、そして出來たのはノートブツクに記載し玉へよ、且つ聲高く誦し玉へ

しばし二人は言葉なく、電信柱煉瓦建、軒の犬ころまで、殘るかたなく目を注ぎ、ぎよろり〳〵と八方を、見廻し歩く其様は、鳶に油上げしてやられ、うろつく姿に髣髴たり、星野光はだしぬけに、出來た〳〵と怒鳴りつゝ、鼻息あらく歌ひける

『道霜の白きが中に雲のごと黒きをかしき馬ばりの跡

どうだ君、着眼點が面白からう

『馬ばりとは何のことだ

『馬の小便の事よ

『馬ばりは新らしい、おれも出來た

切通し切通したる街鐵の走るを見れば九段三田ゆき

『一二句が少し古今調だね、然し佳作だ、次はこれだ

旅すとてつと起きいでゝ我行けば鼻息白し朝し寒しも

『大に萬葉調をやるね、僕をやるぞ

旅すとて湯島に來れば上野森鳥むれ啼く朝寒みかも

『秀句々々

秀句讀みの歌の二人が都去らば都の空の星二つへらん

『へらんは妙句だ、老手々々

道の傍の石ころの上に置く霜は團子に砂糖かけしに似たり

かく歌ひつゝ誦んじつゝ、三枚橋も早や過ぎて、里の歸りのきぬ〳〵の、うつけ顔なる客のせて、返る車を流し眼に、掛けし荷物の振分の、ぶらり〳〵といつしかに、汽笛の音と諸共に、名も鳴り響く上野なる、停車場にぞ着きにける、時間は如何にと見てあれば、未

だ十五分ばかりあり、やれ萬歳や有難や、さらば其間に客だねに、日頃念ずる美の神や、戀の女神やかしこくも、綾にかけまくかけ襷、まゝもたいたつ水仕事、顔だらけの女中でも、踵皮むけた者ならば、詩に歌はんにつかへなし、あゝ渇仰の女神たち、ゐますや如何に一と通、見參せんとばかりにて三等二等一等と、くまなく見れどこは如何に、雨夜の星かこは如何に、捜せど〳〵こは如何に、一人は終にたまりかね、いゝ聞えませぬ天道樣、八百八町の其中で、一といはるゝ停車場、ましてや水戸の觀梅の、臨時汽車さへ出るものを、たつた一人の女神さへ見えぬと云ふは胴慾な、僕なんぼでも承知はせぬ、つれないわいなとべそをかく、一人も共におろ〳〵涙、いかに戰爭があればとて、梅見てならぬと云ふやうな、そんな規則がありやすまい、今日に限つて美の神のたつた一人もゐまさぬは、神も佛も見捨てゝか、如何なる前世の因果にて、斯うしたぶまに逢ふことか、思ひ出せば先つ頃、君と下宿を出る時に、障子に頭ぶつつけて、瘤を出したが何日にない、腫がひかぬと思ふたが、斯うした事がある故に、今日の旅行は一層の事、よせとの印であつたるか、今日は如何なる惡日ぞと、胴振ひして泣きけるは、道理過ぎて了ひけり、かくてあらねばさり乍ら、なんぼ發心したとても、こんな味無い味氣無い、列車に乘つて水戸と云ふ、長い間の道中が、どう淋しくて出來やうぞ、一層のことに二番目の、出るまで待たんそれがよし、大吉上と二等室、早や一番は出た後とて、あたりに人も無きまゝに、大股廣げ足を出し、備付けある新聞を引張り合つて讀み居たり、

（未完）

眼前文學

山田野梅

▲途上、若い娘のお顔粧をしたのと、母親の老い皺ばんだのと、連立つて行くのを見ると、吾輩毎もうんざりして面を背けずにゐられない。知れきつた事ではあるが、今日若い娘も、他日一轉化すれば、お母さん乃至お婆さんといふ稱呼の下に、小さく黑く皺くちやになつて、餘喘を保つまでの物体たるに過ぎず、謂はゆる紅顏綠鬢などいふ詩人のお世辭は、そも〳〵世を忍ぶ假の名であるのだ。

けれども今日の場合、母親は、あなたお氣に召したらと、娘を一個の寶品として、能ふ限りの粉飾を施せば、娘は娘て、ちよいと！見て頂戴ようと、自ら別品を以て任ずる態度すさまじく、白日天下の往來を、洒蛙々乎として得々焉として、或意味の廣告的行動に出づるといふも、勢ひ已むを得ぬ事でもあらうが、これを局外から冷靜に觀察すれば、正に是れ人生一面の活縮圖で、人情といひ世間といふ者の眞相を、不言の間に發揮するもの、併せて亦人間の無常迅速を、具象的に說明するもの

我輩これを看る毎に、覺えず慴然として恐れ、慄然として身顫りが出るのである。

▲自分の履物を穿くに、他(ひと)の履物を鼻緒ごと踏着けてかまはぬ人がよくあるものだ。吾輩何となく不快を感ずるのである。自分の都合に依つては、他(ひと)を踏着けてもかまはぬといふ、人の品性の下劣なところが、思はぬ事に現はれるものではないか。

▲酸漿を鳴らす女、戸障子を後ろ手に締める女、鼠色の足袋を穿いてる女、孰れも、一つ鍋の趣味を倶に語るに足らず。

▲たましひの入れ物一つ種ふくべ。そのまた瓢箪を入れておく間の家(いへ)居(る)といふもの、雨露を凌ぎ、寒暑に處するまでの設けてある。冬は南の椽に日影が溢れて暖く、夏は同じ疊の上に、月の光が射し込んで涼しかつたら、それで澤山ではないか。何の華美か、何の數寄か、或は貧富といひ、榮辱といふもの、畢竟、若い娘が若い男を見る時、一寸すまし込むと同じ筆法たるに過ぎない。

たゞ一つ、わが今日の安住境は、膝を容れるに足れば足るのではあるが、厨房に皿小鉢の鳴る音と、便所に人の出入る物音との聞えぬ程の、家の構えを工夫したい。

▲リボンといふもの、房やかに垂れた髮に結んで、長く飄めかした風情は、空に懸つて清く麗はしい七色の虹を、細く裂いたとでも謂ひたいやう。童女の髮の飾りとして、詩趣横溢するものである。

リボンの代りに、十二三の子の下げ髮を、春風に靡く柳の糸て結んでみたい。

▲食はず嫌ひといふ語(ことば)は、讀んで字の如く、食はずして嫌ふといふのてあるが、爰に、負(よ)けず嫌ひといふ語がある。負けることを嫌ふとならば、負け嫌いて可さそうなもの、負けず嫌ひでは意味を成さぬてはあるまいか。

▲近來新らしい人の歌などに、ちひさきといふ語(ことば)を、ちいさきといふ風に好んで用ふるやうであるが、日向臭い語て、我輩虫が好かない。これは何處かのお國言葉が、口から耳に傳へられ、耳から口に慣されたものて、例の清少納言に口眞似をされた、ちうせい折敷(をしき)、ちうせい高士器(たかつき)の類。東京語ではない、書生語である。楔芋の大小を論じて、これはちさいといふ、それは諸君宜しいが、例へばお馴染の。紫にほふ花菫、その花の小さいのは、これをちひさいと謂つて頂きたいもの。

童曰くちさいだなんて厭(いや)たわれ

當代文章の缺陷

橘 星睡

◎眞正の著作は自己の發現なるが如く、眞正の文章は亦必ずや自己の發現ならざるべからず。而して此に云ふ自己發現とは何ぞや、曰く他なし、一著作又は一文章の上に、作者自身の生命が活躍せるにあり。尚ほ一層詳しく之を言へば、作者が、其の著作又は文章を通じ、讀者をして、能く自己の活ける人格を想見し、更に進むで之に同化せしむる所にあり。是やがて文章の生命也。

◎或る場合に於ては文章は、未だ必ずしもそこに作者自身の人格が現はるゝを要せざるが如し。然れども文章の目的が、啻に讀者の理解或は感興に訴ふるのみに止まらずして、更に一層切實に或る物を讀者に要求せる以上、究竟は、そこに現はるべき作者自身の人格に待たざるべからず。假令ひそが普通に智識を傳ふるをのみ目的とせらるゝが如き塲合ありと雖も、吾輩は其の智識を傳ふることに依りて、實は尚ほより以上の

或る物を讀者に要求しつゝあることを忘るべからず。かくて人格の活現は、文章に於いて絕對的に須要なるものとせらるゝ也。

◎當代の文章は。此の點に於いて饋に大なる鈌陷を有す。讀みて能く分る文章はこれあり。面白く樂しき文章はこれ有り。痛快案を打つが如き文章も亦これ有り。然れども唯夫れ此の如きのみ、然り唯此の如きのみ。讀者は、そを讀み行く中に於いてこそ、或は假くも感ずべけれ、讀過一番、そこに活躍せる生命が、坐ろに讀者を動かすものあるなきは何ぞや。是今の文士が、文章の生命たる自己人格の活現てふことに向つて甚だ其の注意を怠れば也。

◎夫の面白かつたと云ひ、或は能く分つたと云ふが如き、未だ之を以て文章の目的は充分に遂せられたりと謂ふべからず。文藝上の作品にありては殊に然り。而して今の文士は、此の點の注意に於いて多くは實際に盲目也。

◎言はゞ今の文章は餘りに技巧に流れたり、又餘りに小器用になれり小細工になれり。華麗はあり、瀟洒はあり、雄大も亦無きに非ず。然れどもそは唯文字上の技巧に於いて然るのみ、修辭上に於いて然るのみ。然り今の文章は、如何にしてそれより立派に、且つより巧者に書くべきやに就いて、多くの工夫をなされたるべしと雖も、文章の第一義たる、そこに殘りなく自己を發現すべきことに就いては、絕えて何等の注意だも拂はれざるものゝ如し。かくて文章愈巧になりて、又愈其の目的に遠ざかり行く也。

◎今の文士諸卿の文章を見るに、其の立派たり巧者たるに反して、果して、幾許か能く社會を動かし、又能く人生に反響を起しつゝありや。然り、斷じてこれ無きには非ざるべし。然れども其の多くは吾人が前に言へるが如く、讀者が一文章を讀める間に於いて、そこに讀者の或る感興を繋き、或は之に依つて問題の理解を與ふるのみ。而して此の如きは、唯技巧修辭の末を以て猶は能く充分に爲し得べき所に非ずや。夫の永遠に活ける生命を讀者に與へ。延いて社會を動かし、人生に大なる反響を起すと謂ふが如きに至りては、人格の活現なき今の文章に於いて、到底未だ不可能の事也。

◎作者の活ける人格が活躍せざる文章は、そこに如何なる技巧修辭の美を極むるとも。遂に是根なき花也。之を床の間に飾られたる生花にも比すべき乎、就いて其の美を賭るべし、其の巧を稱すべし、而かも遂に一の果實を結ぶべからず。

◎苟くも一管の筆を執つて社會に立ち、以つて世を動かし、人生に貢献を齎らさむとする程のものが、さばかりの事に注意せずして、唯技巧修辭の末のみを以つて或る効果を贏ち得むと考ふるが如きは、是元と誤れるの太甚しきものに非ずや。固より文章としては、或る程度迄修辭も必要也。技巧も必要也。然れども技巧や、修辭や、かくて如何にせば遺憾なく自己が現はさるべきやに就いて、吾人が須要として用ふる所の方法のみ、斷じて夫れ自らが文章に於ける第一義には非ざる也。

◎エーマソン嘗て曰へらく、予は信ず、法庭に於ける辯護士の、想の高まり來る時は、其の辭漸次平易なるべし。尙ほ言はゞ、感想の激昂せる時は、其の辭鋒も衆人に理解せられ易きものとなる也と。此の語文章に於いても亦洵に然り。而して其の想の高まりたる時や、感想の激昂せる時や、是やがて主觀的にして極めて切實に自己の現はされたる時也。

蓋しかゝる場合に於いて人は、徒らに彫琢技巧を思ふが如き念慮なく、直ちに自己其の物が移りて、此に言辭となり將た文章となる也。然り、眞個能く人を動かし人を同化せしむるの力は、唯此の眞摯より來る。要するに技巧修辭の末のみに拘りて、自己人格の活現を忘るゝが如き、是

自ら思想の缺乏と人格の無生命とを表はすものにして、遂に俗文の徒として、適蛙鳴蟬噪の譏りを免かれざらむ。

◎火の千秋の下猶ほ惱天を起たしめ、一枝の筆を以て天下幾億の民衆を動かすが如き、是其の文章を通じて、そこに神彩奕々たる作者の活ける人格が活躍せる故に非ずや。人格の活現は文章の生命也、社會を動かすも是、人生に反響を傳ふるものも是、他なし、文章は唯一種の技術に非ずして、洵に自己の活躍なれば也。

◎竿覓ずるに今の文章が、其の立派たり且巧者たるに反して、深く大なる反響を人生に起す能はざるものは、作者が、文章を唯一種の技術なるかの如く考へ、徒らに技巧修辭の末のみに勉めて、遂に自己人格の活現てふことに甚だ注意を拂はざるにあり。而して是やがて當代文章の一大缺陷に非ずや。文士諸卿の如き、吾人特に此の點に注意せられむことを望まざるを得ず。若し夫れ書きッ放しの文章に至りては、固よりそを文章として論ずるの價値なきもの、此の如きは吾人の今謂はむと欲する所に非ざる也故て、一言す。

新刊批評

▲劍と戀の日本

ヨーキン、ミラー
野口米次郎　共著

米國詩人ヨーキン、ミラー及び野口米次郎氏の詩文を集めたるものなり、文は僅かに二篇にして二人各一篇づゝを記せるもの、此書の本領は素より詩篇にあるべし、而してミラー氏の歌へるもの二六篇にして野口氏のもの二十篇を超ゆ。卷頭掲ぐる幸田露伴氏の「野口米氏に寄す」は六行廿一聯の長詩、野口氏を以て櫻の實が、大洋の水を流れ〳〵て大陸の土に花咲ける一本櫻に比す、感興溢るゝが如くならざれども文藻の饒かなるを見るべし、野口氏の詩は世已に定評あれども"Let us march toword Manchuria"の如き雄壯なるものは今回を以て初となすべく、國民の意氣を外人の胸に染み込ますべく恐らく幾多の新聞論說に勝るものあらん、然れども野口氏の本領は寧ろ其詩情の幽婉温藉なるにあるべく"The sun I worship"を以て初まる"Lines"の如き"My soul and Harps"の如き吾黨の感服する所なり。ミラー氏の歌へる"The bravest battle"の如き詩人的感慨を見るべし。只卷末掲ぐる所の「詩人ミラーの清話」は野口氏の日本文に拙なるを示して氣の毒なり、寧ろ英文にて記せられしならんにはと思はる。少しく英語を解し、文學の趣味あるもの讀を望む。

（金尾文淵堂發行、定價四十錢）

▲古今武士道史譚

久保天隨編
育成會發行

項を分つこと七、曰く淵、曰く壯、曰く俠、曰く温、曰く純、曰く烈曰く雅、而して各項少くも五人多きは廿人に近きの傳記を載す。例へば淵の項に於ては小早川隆景、石田三成を傳へ、俠の項には上杉謙信、西鄕隆盛を記したるが如し、文章は天隨一流のものにして只筆端の容束せざるをのみ取るべし。書中必ずしも武士道的事蹟をのみ傳へず、悉しく餘談を載せたるものありて名實相協はざるが如き少からずと雖も武士道の修養發展は今日及び將來の急務なりとすれば此書の如き又捨て難き所ありといふべし。（定價三十錢）

▲世界お伽噺第六十八編　活水死水

巖谷小波編
博文館發行

嗹馬(デンマーク)のお伽噺を省略して譯出したるものなり、トロイといふ子が其兩親の慈悲深き爲めに魔法の鍵を貰ひ、種々の面白きことをなするといふ面白き話なり、お子供さんを持てる親御達、弟妹を有せる兄姉樣の必ず

買うて土産とすべきものなり。（定價八錢）

▲夏花少女

前田林外著
弘文社發行

前田林外氏の詩集にして和田英作氏の繪畫を添ふ、卷頭の夏花乙女は十二篇より成る長篇にして一篇は十四行西洋の sonnet に倣ふ。其他曾て明星に出でたる源九郎義經を歌へるもの三篇、アメリカ彦造の墓、金翅鳥王の歌、夢のほのほ、壁畫孔雀の賦、白鵠に、極樂鳥の賦等數篇を載す。吾人之が細評を試みんとするも編輯、期迫りて其暇なきを以て之を次號に讓り、こゝにはたゞ紹介に止め置く。（定價四十五錢）

編輯錄

▲本號には前約の大分外づれたのがあつて、讀者に對して濟まなかつたが、それだけの埋合せをしてあるつもりだから勘辨して貰ひたい

▲理學博士坪井正五郎氏の原稿は早く着したのだけれど錦上更に花を添へるといふ趣向で挿畫をしやうとしたので遂に間に合はなかつたのは殘念、その代り次號がそれだけ多く賑かになる理窟也

▲口繪の筆者サーダビッド・ウイルキイ氏は、有名なるスコットランドの畫家で、特に人間の生活狀態を寫すことに於て妙手と稱せられて居る人である

▲第三號の新聲が本誌の賣高を八百位だらうと想像した、苟も中央公論ですと我社の人は大に憤慨したり、新聲の無考に噴飯したり、八百部といふ想像は百といふ字と千といふ字の誤植だらうと或人が云つたが、併し新聲は自分の雜誌と引きくらべて考へついたらしい、お氣の毒な次第

▲表紙の意匠と裏の意匠とは丹羽玉邦君が書いた、君は前途有望の畫家で、これからも毎號本誌の畫を擔當して書く筈である

▲次號の原稿の既に出來て居るのは大隈伯の武士道坪井博士の土俗雜話、その他三上博士、中村博士等で顔揃ひ、社員は尚八方に奔走して居る

▲女子大學に就いての投書は續々とあるが、これぞといふ穿つた正確なものが少いのは遺憾である、併し來號あたりで其うちの或ものを發表して世人が如何に女子大學に就いて考へて居るかを見たいと思ふ

▲必すしも聲を大にして呼號することを要せず旣往の歴史と現在の

文庫

と隆盛は文壇に於ける本誌の位置に就て公評の定まれるものあらしむ

三月十五日發行▲第廿八卷第四號

臨時增刊

四方より輻輳する原稿の多大なる記者をして促して此議を定めしむ

第廿八卷第五號 四月一日發行

淡影（英男）死の曲・幻影・瀕死の白鳥・幼兒・最後の手紙・の五篇を藏む、ゲーテ、テニソン其他大家の名作を譯して文字精練を極めたり、秀才此人の如きを有することを得たるは所謂赤門の名譽といふべし

春海夢路（北原白秋）曩に『全都覺醒賦』を草して其長篇を成すの技倆を世に示せる青年詩人は、更に本誌五頁に亘る『春海夢路』を寄せたり、是れ瀨戸内海の風光を描けるもの、鮮麗花の如き作者の詩筆は能く其大景を活かして聲あり韻あらしむるに足れり

▲眠らぬ魂……澤村胡夷
▲夢の鴉……藤花郞
▲巢籠る雲雀……石井楚江

▲島守……梅原成美
▲春の貝……ゆづる
▲濕れる棹……登阪柳晴

文壇言専門以外○書籍の壽命○梅坊主の活惚を觀る○新聞小說○餘材片々……小島烏水

▲野の宮……本山荻舟
▲葡萄棚……うつぼ
▲喜劇……白水庵

▲雜誌百種……靑山
▲續舌切雀……露の風人
▲䍐丸日記……たぬき

東西千里（瀧澤秋曉）作者の弟旅順攻圍軍中に在ると半年、今や更に遠く北して奉天城外砲烟の間に馳驅しつゝあり、君が爲め、山ゆかば苔蒸す屍と高歌するは彼等健兒の意氣なりと雖、父兄遙に之を憶うて朝暮多少の感なからむや、嗚呼東西千里、夢魂夜々に飛ぶものありといふも誰か敢て之を咎めむ

夢珠鞍（夜雨）今更におもふ、夜雨は詩人なる哉、眞人なる哉。乞ふ見よ江湖の人試に『雲珠鞍』の其五一篇を見よ、我輩斷じていふ、之を讀んで泣かざる者は人にあらず、木片石塊のみと

▲**定價** 十五錢
一冊金拾五錢　六冊前金郵税共九十錢　十二冊前金郵税共壹圓六拾八錢
一ヶ年（定期增刊四回共十六冊）前金郵税共貳圓二十四錢　見本郵劵代用

發行所　東京本郷西片町十番地　內外出版協會

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること
▲締切は毎月十八日最終便まで
▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論 定價表

冊數	定價	郵稅共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論 廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし
一郵劵代用の塲合は必ず壹割增のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす
一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込あれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし
一御拂込み金額の端金の塲合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし
　一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割
　一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町	東京堂
神田裏神保町	上田屋
京橋銀座四	東海堂
本鄉四丁目	文明堂

明治三十八年三月卅一日印刷
明治三十八年四月一日發行

發行兼編輯人　武田竊松
印刷人　清水金右衛門

東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

娛樂實用 園藝界

實價

壹冊……金參拾錢郵稅壹錢
六冊前金郵稅共……金壹圓五拾六錢
十二冊前金郵稅共 金參圓拾貳錢
郵劵代用一割增

▲第二年第四卷▼ 四月上旬發行

●園藝協會會員募集!!

▲花卉木竹を愛するを以て、一種の道樂とせば、天下之にまさる好道樂あるなし、本會は此道樂を喜び、此自然を保護し、其趣味を愛翫する人士の爲に無上の機關となり、無二の良友となり、眞に共に園藝上萬般の研究をなし、園藝思想の向上を期す。

▲本會の會員は、雜誌園藝界六ヶ月以上前金者を以て組織し、別に會費を徵集せず。

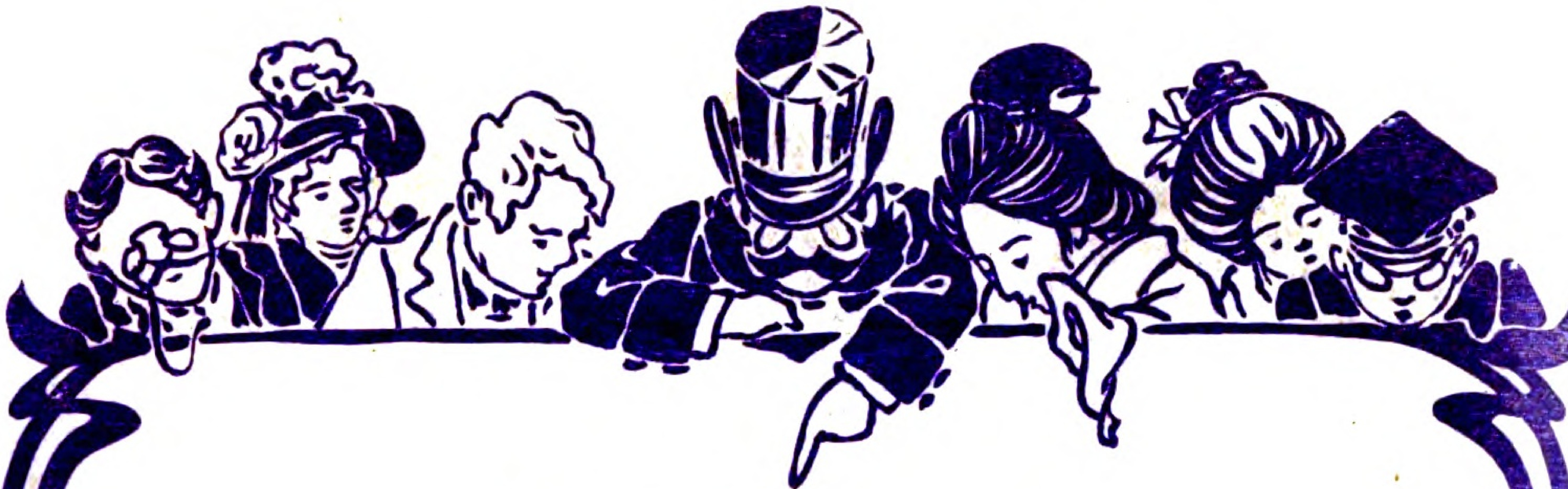
▲會員は園藝界誌上を以て、隨時諸般の質疑をなすべく、又自己の研究觀察を發表し得べし、特に臘葉の鑑別に至りては、本會の贊助員にして、且つ顧問たる理科大學牧野富太郎氏が責任を負ふて鑑査さるゝ者なれば、斯學に志す學者に在りては、最も信頼すべき標本を作成し得べし。

▲本會は適當の季節を選び、適當の地點に於て、植物講習會を開き又指導選定して採集旅行をなし、實地に就て親しく教示すべし。

▲本會の會員の爲に、最も信憑すべき種苗の分與、採集用具、園藝用具等の求めに應ずべし。

▲會員申込所は、東京市日本橋通四丁目春陽堂にして、雜誌園藝界六ヶ月以上の前金を添へて申込まるべし。

▲園藝界見本入用の向は郵劵參拾壹錢を封入して發行書肆に申込まるべし。



中央公論

No. 193

明治十九年創刊

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

明治三十八年四月一日發行（每月一回）

發行所　東京本郷區駒込西片町十番地　反省社　（電話下谷九一九）

印刷所　東京牛込區加賀町一丁目　秀英舍第一工場

大賣捌所
神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四丁目　東海堂
本郷四丁目　文明堂

（定價一部金十二錢）

前號概目